

川柳塔

創刊大正十三年 通卷一一三八号



日川協加盟

No. 1138

三月号

「川柳雑誌」「川柳塔」通巻一〇〇〇号記念出版

『麻生路郎読本』



麻生路郎
読本

A5版

514頁

頒価 三〇〇〇円

(郵送料共)

目次

- 麻生路郎アルバム
- 麻生路郎作品「旅人」「旅人その後の作品」
- 麻生路郎文集・麻生路郎語録
- 麻生路郎物語（東野大八）
- 麻生路郎の人と作品
- 麻生路郎の作品「福寿草」
- 麻生路郎著作解題・麻生路郎年譜
- 麻生路郎・葎乃作品索引

ご希望の方は左記の事務所までお申し込みください。

〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号

花野ビル201号

電話 06-6779-3490

川柳塔社

振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番

句会部よりお知らせ

川柳塔本社3月句会は、下記の要領で誌上句会と致します。

皆さまのご投句をお待ちしております。

記

* 「川柳塔」誌3月号に投句用紙を同封します。

(未読の方は川柳塔事務所に「請求ください」)

* 投句締切 3月31日(木)消印有効

* 入選発表 『川柳塔』令和4年6月号

* 投句料 1000円(切手不可)

- 兼題 「サービス」 緒方美津子 選(兵庫県)
 - 兼題 「灰」 澤井 敏治 選(大阪府)
 - 兼題 「育つ」 岩佐タン吉 選(大阪府)
 - 兼題 「過ち」 古今堂蕉子 選(大阪府)
 - 兼題 「相性」 小島 蘭幸 選(広島県)
- (各題2句出し)

問い合わせ・送り先

〒543-0052 大阪市天王寺区大道1-14-17

花野ビル201 川柳塔社

TEL 06-6779-3490

古方句集

小島 蘭 幸

昭和42年、私は川柳塔社の同人になりました。19歳でした。私の川柳の師、山内静水は「蘭幸が20歳になるまでに川柳塔社の同人にしたいんじや」と事あるごとに言っておられました。私には同人になったら、何があっても同人を止めないという強い思いがありました。

その頃の川柳塔は、橋高薫風、早川清生、不二田一三夫、工藤甲吉、後藤梅志、正本水客氏等の作品が異彩を放っていて、正に個性の集団という趣がありました。

その中で淡淡と淡淡と深い作品を発表される作家がいました。戸田古方さんでした。私はいつしか古方川柳のとりこになっていました。月末に川柳塔が届くといつも一番に古方さんの作品を探していました。

昭和47年5月1日、一冊の古方句集が発行されま

した。それから1年5ヶ月後、私の手元に古方句集が届きました。古方句集は古方さん直筆の手書き句集なのです。最後の頁に昭和47年5月1日、戸田古方著、昭和48年10月7日浄書(82)川柳塔社発行と記されています。一九〇頁、四二五句の作品の一字一字に生命が宿っています。

「私の好きな句」「詠史」…、11のタイトルの頁には水彩画が描かれています。例えば「無量寿」には鶴と亀、「わたし」には自画像、「いきものたち」には猫が描かれています。

大学教授だった古方さんの作品は、淡淡と詠んである中にどこか哲学の匂いがしました。そうかと思うと、仙人を彷彿させるとほけた味のある作品も多いのです。

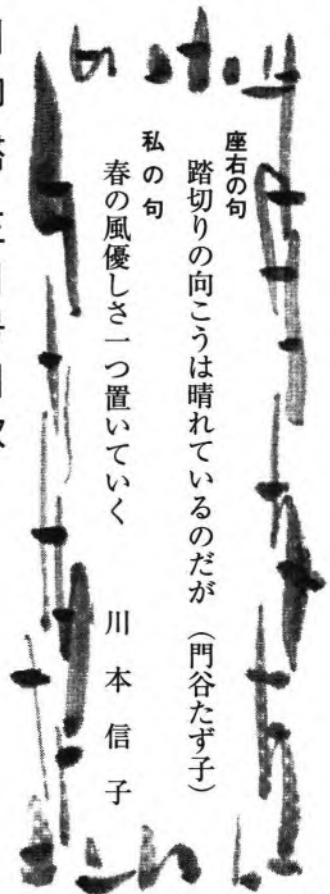
作品

日が暮れたらねるんだったね老子さま

そういえば海のまるさが見えてくる

ひと冬をポケットに穴あけたまま

古方句集をいただいて早いもので49年の歳月が流れました。まだまだ古方作品のあたたかさ、奥の深さには遠く及ばない私ですが、一歩一歩近づいて行こうと思っています。



座右の句

踏切りの向こうは晴れているのだが (門谷たず子)

私の句

春の風優しさ一つ置いていく

川本 信子

川柳塔 三月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「当麻の春」

■巻頭言 古方句集

重大なニュース

小島 蘭 幸 ……(1)
仁部 四 郎 ……(2)

川柳塔 (同人吟)

小島 蘭 幸 選 ……(4)

川柳塔の川柳讃歌 (26)

木津川 計 ……(37)

自選集

黒川 紫 香 ……(38)

句集の森

黒川 紫 香 ……(41)

温故知新

川上大輪選 ……(42)

水煙抄

川上大輪選 ……(42)

西尾菜句集「水鶏笛」

川上大輪選 ……(42)

英語 de Senryu (24)

吉村 侑 久 代 ……(58)

■エッセー (なくしたものの得たもの)

八木 千 代 ……(59)

誹風柳多留二三篇研究 19

八木 千 代 ……(60)

重大なニュース

仁部 四 郎

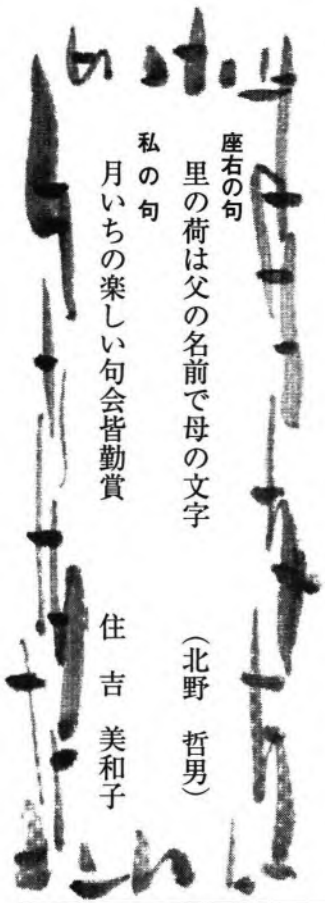
「大ニュース年末年始にひしめいてわれらの舟はノアの方舟」という歌を作ったのは、昨年十二月の大阪の「クリニック放火事件」の後だったが、亡くなられた方々には申し訳ない歌になった。

「ロシアとウクライナ」「中国と香港」の情勢の行方を私ごとときが心配してもどうなるものではあるまいが、おそろしい。日本にも領土問題はずっと続く。

国内では、安倍氏の名前がニュースの表面によく出るようになったがおそろしい。政治家の信義というものを、社会科の元教員として、なぜそうなるのかがおそろしい。「内閣へ支持率という愛の鞭」「雑草の一票明日の歴史です」は三月と八月に作った句だが、永田町では冷笑される句なのだろうか。

コロナもまだまだ終息しそうにない。国産のワクチン等はどうとう間に合わないのかと思っているのだが、テレビ等のニュー

愛染帖	……	新家完司選	……(62)
檸檬抄「名残」	……	兼原道夫・久保田千代共選	……(66)
一路集「オフレコ」	……	佐々木満作選	……(70)
「単純」	……	前田楓花選	……(71)
初歩教室「ほっこり」	……	高瀬霜石	……(72)
川柳塔鑑賞	……	平井美智子	……(74)
水煙抄鑑賞	……	奥澤洋次郎	……(76)
せんりゅう飛行船 [㊦]	……	新家完司	……(77)
インスピレーション・ナビ	……	印象吟	……(78)
大西泰世	……(78)		
三月各地句会案内	……		……(80)
各地柳壇(佳句地十選/倉益一瑤・山崎武彦)	……		……(82)
柳界展望	……		……(95)
■編集後記(ひとこと/澤井敏治)	……	朱夏・眞澄	……(96)



座右の句

里の荷は父の名前で母の文字

(北野 哲男)

私の句

月いちの楽しい句会皆勤賞

住 吉 美和子

スでは、「終息」より「収束」がさかんに使われていてエコノミーに重心がかかっているわけであろう。「テレビでの授業先生叱らない」では、実は、先先になって困ることになるし、「第6波その前に来た物価高」では、今日明日がストレートに困る。

今年の年賀状には、「身の丈に身の程といい年賀状卒寿に届く今年で終り」という添え書きをしたのだが、社交辞令が全く下手な私も、川柳や短歌を添えて百枚ぐらいは出してきた。喜んでくれる人もいたのである。

身の程といえば、一昨年の十二月に高齢叙勲の沙汰があり、実物は昨年の三月に届いた。

勲章というものは、妖しく摩訶不思議なもので、死亡叙勲では全くサマにならぬと思っているが、私立ではなく県立の高校長を2校5年勤めて、米寿になったので、私のような者にも来た。

一月三日に、資源活用ということで二〇二〇年の暑中見舞のハガキでこの稿の依頼が来た。私の今年の十大ニュースになるが、十二月が来るものである。



小島蘭幸選

西予市 黒田茂代

小春日和でした日本のエーゲ海

カーテンを開けると生きている絵画

盆地冬 白い天使の舞踏会

大根も葱も間に合う距離にある

ほうたるの形 淡雪舞い降りる

風神の袋開けると春の風

横浜市 川島良子

百態の個性 人間も人形も

春の七草脳トレによし暗記方

都会の雪 靴の踏み方転び方

あるがまま人生一度きりだもの

わたしにも判る池上彰の解説

人間はまああるくなって老いるのね

鳥取市 福西茶子

虫見ても土竜を見ても笑える日

百万回笑ったあとで参ります

穏やかに慣れて世間を避けている

ホラ元気だよ坂道登り父母の墓

ハートが軽い今日もいっぱい笑えそう

コンサート カイロ三枚貼って聴く

枚方市 栃尾奏子

幸せに気づいた者の勝ちである

ボクに恋してみませんかオジギソウ

小手鞠の白より白いままふたり

ひらがなのすきを束ねたレンゲ草

前を向きなさいと春が用意され

ふり向けば亡祖父母が笑う縄電車

西宮市 緒方美津子

止められぬ花の咲かない趣味だけど

いじめなど知らぬ友達はその風

一押し of 足りない息子まだ独り

歌合戦も昭和を遠いものにする

運転中夫婦げんかは我慢する

汚れるとは生きていること紙おしめ

鳥取市 岸本宏章

四冠へ藤井君とはもう言えぬ

昨日のこと忘れなさいと陽が昇る

腹の虫宥めすかせるのも修行

星座みな絵解きクイズのようにある

水のように人も易きに流される

反戦の思いが褪せることはない

吹田市 太田昭

本当に死んでしまった斬られ役

温暖化地球の荒い息づかい

継ぎ接ぎの帆で五十年夫婦舟

再生紙過去を忘れて生きている

矢が尽きたことは内緒にしておこう

まだ枯れてません折らないで下さい

倉吉市 牧野芳光

好きというだけで何でも受け容れる

好きなのか語尾がか細くなつていく

横にいるだけで空気が温かい

出会い頭のもしかもしかは果てしない

何もない何も浮かばぬ時もいい

赤も白もみんなまとめて私です

神戸市 敏森廣光

幾つになつても心はいつも迷い人

なんぼ飲んでも許してくれる三が日

除夜の鐘百八つ聞いたことがない

今年こそ自分を見つけたいのです
句会再開見なれた顔が見当たらぬ
新しい生命生まれて見る朝日

尼崎市 山田耕治

夕方の再配達に詫びを言う

玄関にわたしのための手摺付け

ただいまと言います誰も居ないけど

息災を祈る静かなお正月

いい脈をほめてもらいに医者へ行く

虹が出てると施設の姉のメール来る

阿南市 小畑定弘

余白には辞世の一句記すだけ

人流に弾き出された喫煙所

ペコペコとすっかり丸い石になる

棒読みをしない首相にホツとする

三年は生きるであろう日記買う

給油してどこにも行かぬ十二月

堺市 栗原道夫

本を嗅ぐために入った古本屋

希観本見てふーんふーんと思う

天金の書の天金に爪を立て

ライバルに先に逆立ちされていた

潮の香を充分嗅いだので戻る

ポストから二三歩離れ思うこと

ズルズルと音を立てればうまい蕎麦
駅裏の穴場の店は教えない
どこまでも脇役である霞草
淋しい目わたしのような寒鴉
爪を切る隙をいっばい見せながら
酒の量ついライバルと競い合う

尼崎市 藤井宏造

一万歩あるける足に金メダル
元旦のトースト軽く焼きあがる
凧に信号待ちの足を踏む
鍵を忘れ日暮の門で夫を待つ
湯豆腐の箸止めて聞く救急車
ふる里は今日もあしたも雪マーク

箕面市 中山春代

冬ざれに一鉢春を掘り起こす
わたしの目は前しか見ることができぬ
人間の森で人間ウオッチング
A Iの森には風の子がいない
雲に抱かれ風に任せてきた命
紫の吐息はゆるゆると昇る

富田林市 中村 恵

年賀の寅恐い優しいおもしろい
皆元気名前を書いた箸袋

豊中市 池田純子

いつになる鈴を鳴らして初もうで

湯加減は初恋ほどの温度です
白旗をあげて私の安息日
孫の夢広角レンズ越しに見る

大阪市 田中 ゆみ子

嫌われたくないので小さな声で言う
てのひらを温め老父の足さする
雑煮食う菌の衰えは言わぬこと
美容とはいえ娘の風呂の長いこと
この歌が好きで覚えたシクラメン
胃の腑まで一直線に寒の水

和歌山市 松原寿子

真紅の薔薇冬の誇りを抱きしめる
風花に耐えて地蔵はなお無口
友ひとり行方知れずの都市砂漠
忍の字を胸に畳んで流れ着く
箆で水掬い儂いドラマ織る
想いととは逆の言葉で場を満たす

鳥取県 斉尾 くにこ

目覚めたら二千二十二おめでとう
一年の計一日で忘れま

たんたんと前へ気張らず怠らず

聞き合って考え合って出ぬ答

カルタなら取り札は「ね」の寝正月

心身をあたたかくしてやすみます

藤井寺市 鴨 谷 瑠美子

時どきは空気を入れて弾みたい
日常をこなして冬そして春

水仙の香りに姿勢正される

当り前のことがこんなに難しい

頬杖をついても何も生まれぬ

別れなどないと思つていたわかれ

奈良市 大久保 眞 澄

GoToで五輪で基地で感染者

ステイホーム食べることしか用がない

手観音手洗いで日が暮れる

10年も値札をつけたままの服

洗い物ばかりしていた子の帰省

ほつたらかしの空き家の窓が開いている

高砂市 松 尾 柳右子

健康を寿ぐ米寿初日の出

咲き競う花は平和を暗示する

孫ひ孫集い正月大家族

無言の行気を引き締めて雑煮餅

コマ切れの餅肅肅と後期高齢

平凡が良い毎日のお献立

鳥取市 吉 田 弘 子

独り言聞く人居りそなた仏間

生きる音今日も元気に響かせて

子や孫の笛に踊つて恙なし

風呂好きに体力の要る冬が来た

我が庭がそんなに好きか鳥が来る

ひと晩の大雪予報裏切らず

河内長野市 中 島 一 彌

アクリル板挟み笑顔の母がいる

久し振り愛しい母の手の温み

雑煮食い箱根駅伝見る習い

三が日ナマケモノです飲んだくれ

血が通う人にぞ委ねたい政治

同じ星に飽食の国飢餓の国

西予市 西 田 美恵子

母さんは賞味期限に三日足し

お金さえあれば助かつていた命

ワクワクをいつもくれてた子に感謝

あなたにも米にも飽きた事がない

そこで線を引くから求めて来るのです

このときめきが消えないうちに逢いに来て

犬山市 関 本 かつ子

元旦へ始発電車の遠い音

祝成人ママの振り袖着て笑顔

日の丸を立てて平和なお正月

再会を果たせぬままにオミクロン

年賀状今年限りに慣らされる

真つ新な家計簿前向きに開ける

松山市 栗田忠士

スズシロと呼ばれ照れている大根
支持率という物差しの浮き沈み
名曲に産卵率が高くなる

国旗まで自粛したのかお正月
二刀流のすごさ人間味の深さ

松山市 古手川 光

殺し合うヒト科嘖っているコロナ
生き上手暮しのヒント見逃さぬ

歩道橋見上げて愚痴る爺となり

かぐや姫に会える日が来るだる未来
上を向いて歩こう唄おうこの世相

松山市 宮尾みのり

老醜になるプライドと気がつかず
押入れがあるから物が増えていた

煙草のけむり昔はサマになっていた
紅白にもう立ち位置の無い演歌

スマートに地味着こなしている若さ

松山市 柳田かおる

寄せ植えに目立ちたがりがい困る
好きだからあとひと押しを待っている

足元に火がついてからうろたえる
スマートにうつる試着室の鏡

若い若いと鏡に暗示かけている

今治市 永井松柏

減塩食がグルメのボクを攻めてくる
義務としてトイブードルが吠えてくる

ライバルのそのライバルはわが同志
いい人じゃないからもう少し生きる

イルミネーション無人の街をリフレッシュ
土佐清水市 辻内次根

色どりが欲しくて冬のプラントー
目の前を今日の時間が過ぎていく

表裏縦横老いの好奇心

一日の動く時間を凝視する
誰も知らない昨日がぼくの誕生日

東かがわ市 川崎ひかり

生死越え生命愛しき三分粥
ガン告知深い闇路を彷徨す

今は昔母のリユックは米と芋
檜穂高リユックが亡兄の夢語る

裸木も春の芽吹きが血が通う

熊本県 岩切康子

虎年は心ゆさぶる友の声
杖ついて大根一本抜いて来る

この年もルーベを伴に続けよう
旅の友忘れず賀状くれました

初詣で深夜を避けて相応に

熊本市 杉野羅天

冬至咲くハイビスカスに元氣受く

飛ばせない猪鹿熊の出る夜道

自然体に非ずコロナ禍息苦し

牡鹿の勇姿へ譲る 冬夜道

命懸け詩う一句に血が通い

北九州市 小松紀子

初日の出神しくてうれしくて

気も若い川柳作句のお陰かも

口角を上げれば氣持上を向く

普通というゾーンがとても幸せ

意のままに朝寝が出来てちよいうれし

唐津市 坂本蜂朗

通学は裸足学校では軍歌

原爆の生身に湧いた蛆を取る

敗戦の地獄を覗き生きている

ピンタ教師教科書に墨塗れという

少年期の餓えに食い意地育まれ

唐津市 山口高明

見れば見るほど陛下そっくり愛子さま

遠き日の少年一途白虎隊

隠し事出さない質で顔に出る

父ちゃんはギャンブル依存症だつて

逢いたくて会えば憎まれ口叩く

札幌市 小沢淳

中国は一人っ子から三人へ

尻尾たてがみ消えて宇宙へ行く準備

コロナ様有田ミカンの旨いこと

五黄の寅遠慮する人しない人

動物園の虎はよく寝る夜行性

塩竈市 木田比呂朗

オルガンの春の小川がふと浮かび

少年のように球春待ち焦がれ

巣ごもりの妻へ春色のカタログ

クスリのみ馬齢重ねる誕生日

無為無策ゴール刻々近くなる

男鹿市 伊藤のぶよし

さあ来いよ雪には負けぬ白マスク

飛び入りの下カ雪恨む腕と腰

喜びの味を分け合う写真展

年金の細い杖にもヤット喜寿

冬の虹令和にも出す強かさ

弘前市 稲見則彦

締切りを無視する人のお正月

父は背で僕はもつぱら舌の先

ふんわりとそんな優しい雪はない

さてどこをどうしたらいい歳にきく

返されたラブレターならここに

弘前市 今 愁 女

東京都 川 本 真理子

夜が明ける枕許には川柳塔
塔からは学ぶこと多人世を
窓のそと白一色の別世界

夢の中で春の芽吹きと再会す
地球からコロナが失せた笑顔かな

横浜市 菊 地 政 勝

百枚のマスク買うのも三回目
捨てられぬものに戸惑う大掃除
コロナ禍を忘れるようにふたり酒
止まる日を考えてないコマふたつ
ユーモアを混ぜ忠告のお節介

朝霞市 前 田 洋 子

老猫がよろける胸がドクンする
目の手術決めて検査の多いこと
新年を新しい目で迎え入れ
恥じぬよう自戒を胸に初鏡
初場所を寝惚け眼のネコとみる

越谷市 久保田 千 代

天運と続けておればある実り
世知辛い世を耐え抜いた眉白く
善人のまま衰えた記憶力
一日をまめに動いてすぐ寝つき
七十九歳誕生日は忘れよう

戸を開けるように絵本の一ページ
豆撒いて絵本の鬼はみな優し
大方のわがまま聞いて老保護犬
何歳になつても少しはしゃぐ雪
もう一つあつた気がする今日の用

八王子市 川 名 洋 子

年賀状友の元気を乗せてくる
切り落とされぬよう枝を太くする
独り居で戦っているビンの蓋
ホッとした間隙ついて第六波
あれこれと詮無いことは考えぬ

愛知県 早 川 遯 行

考えていては前へは進めない
戦いはまだこれからのオミクロン
会える日はいつになるやら会えぬやら
ときは深呼吸吸って家に居る
忘れられぬ為にミサイル撃ち続け

名古屋市 山 本 三樹夫

ランニングギャルに抜かれて歳を知る
お手盛りの赤字国債子が背負う
初日の出希望の船出照らす灯に
意地を張る歳でもないと思うけど
コロナ禍で疲れたままの寝正月

大山市 金子美千代

五歳サバよめるマスクの力借り

ついにここまで手書きはダメという募集

初対面ばかりなり紅白の歌手

二年振り息子も髪に目立つ白

あれこれと待っていました男の手

富山市 島 ひかる

子や嫁に話せて肩の荷が軽い

要介護嫁の助言で出る一步

共倒れしない元気を溜めておく

川柳という趣味がある友が居る

雪山を見ると元気が湧いて来る

可児市 板山 まみ子

新年がコロナコロナで始まった

まだコロナ夢も希望も持てぬ春

仲間にはLINEですます年賀状

おしゃべりが満開になる初句会

息子でも疲れるコロナの泊り客

和歌山市 柏原夕 胡

亡姉に逢えそうな気がする石畳

サクラサクラほんとの春はまだ来ない

ご近所があつて楽しい庭掃除

守らねばならぬ猫たちとおしい

だとしても謝る気にはなれなくて

海南省 小谷小雪

気ぜわしくさせてごめんね春曆

冬將軍少しあせつていませんか

お隣の猫も巣ごもりするらしい

松のうち去年と同じ服を着る

三が日帰ってくれて主婦休み

橋本市 石田隆彦

目一杯働き夕日褒めている

ぼーとしても雲は流れて時流れ

似た仕事思わず笑い暮らす老い

似た病話題広がる同期会

年とれど挑む気やる気枯らさない

京都市 清水英旺

名が変わるたび強化化するコロナ

ウィズコロナといつても敵には通じない

身一つをもてあましてる冬ごもり

がん術後五年の間恙なし

若い日の匂いかすかに古背広

京都市 藤井文代

熱燗・ワイン・ビールでもよし祝い酒

ポケットにユーモア入れて同窓会

完璧な言葉に欠けた温かみ

欲しい靴いつまで歩けるか不安

気力が先に痩せてきましたダイエツト

長岡京市 山田葉子

雪の朝見るものすべて新しい
ウインフィル現地で聴いている心地
話せるのは日にち薬が効いてから
宴会の気分で孤食ゴージャスに
最終の住所施設になるのかな

大阪府 米澤俣子

第六波また心配の年はじめ
貸す力ないが婆ちゃん知恵はある
今日のいのちは神さまにいただいた
ふと笑いひとり暮らしの独り言
良き師よき友ホッコリの新年句会

大阪市 石田孝純

初日の出尻尾に夢をぶら下げて
視界良好翔べリニューアルした翼
あの角まで冬と競歩をする日暮
爪先立ちして野良猫と探す春
春風に生まれ変わってみませんか

大阪市 磯島福貴子

恵方巻浪速で生まれ全国へ
しつとりと灰色の街冬の雨
三回接種待つ間もどかし第六波
子から孫へ女系見守るおひな様
湯たんぼのぬくもり母と重なりて

大阪市 井丸昌紀

微笑んだ父は病名知っていた
老人と子供が消えて荒む街
シーソーが沈む明日からダイエット
形にしたら愛はとつても高くつく
かごめかごめ後ろは誰もいない冬

大阪市 岩崎公誠

百までの予定を詰めて暦吊り
朝晩にトレーニングしてからだ維持
紙芝居拍子木の音なつかしい
バス始発常連の顔並んでる
賑やかが好きで部屋中花だらけ

大阪市 岩崎玲子

今年こそおさらばしたいコロナさん
年明けもこころ体もグロッキー
はんなりとした色を着て気分換え
断捨離で人の覚悟を計り見る
老いの技笑みとおとほけ二刀流

大阪市 内田志津子

母だけを見つめた亡父の深い愛
観光もなく静かな街に住む
木の香る机本棚亡父がいる
駅前の六帖一間僕の城
自転車初乗りまっすぐな眼差し

大阪市 宇 都 満知子

花柄タオル縫った雑巾でも咲いた

薄く描く眉今日は言いすぎないように

夢に亡母私もいつか子の夢に

百円の御籤で今年を占う

転けたっていい跳んでみる年女

大阪市 江島谷 勝 弘

コロナ様やはりリセットしましたね

あの店もこの店も閉まったままだ

パソコンの変換ミスに笑っちゃう

競走競走で今の子可哀相

しゃあないから負けるが勝ちで生きている

大阪市 榎 本 舞 夢

コロナに暮れコロナに明けたお正月

三ヶ日御屠蘇いただき賑やかに

四日目は気分ダウンで朝寝する

マスク顔やさしい瞳御目出度う

玉三郎正月疲れ癒やされる

大阪市 大 川 桃 花

山菜摘み周りの景色よう見いや

ダダダつと雪崩のように老い進む

あかんヤツやと嬉しそうに言う夫

兎小屋にも掃除ロボット幅きかす

両方が不馴れでスマホ四苦八苦

大阪市 奥 村 五 月

福袋好みの違う物ばかり

自宅勤午前さまにはなれぬ酒

夢と金長寿になつて減るばかり

二年ぶり帰省邪魔する新コロナ

大谷がたかが日本と言わせない

大阪市 小 野 雅 美

気が済むまでお泣きなさいと通り雨

散り急ぐ花に理由は問えぬまま

かすり傷これで深入りせずすむ

来客が減り大鍋も人を恋う

いい一年にしようカレンダーを吊るす

大阪市 笠 嶋 恵 美

つぎつぎと友居なくなる団地なる

五十年団地に住んで静かなり

嫁しゅうとめ仲良く出来る愛と愛

階段の途中で思う生と死と

孫娘どんどんきれいお正月

大阪市 川 端 一 歩

生きていて良かったと思う初春の酒

新しい歴史をつくる道をゆく

年度末国と同じで大赤字

まだあつた少女が席を譲り立つ

文化予算ドーンと増えた夢を見る

大阪市 古今堂 蕉子

列島揺れる富士のお山はどんと居ろ

気まぐれな身体と心大空に

新成人夢はと問えばケセラセラ

塩の値が気になる威勢 照強

メニユーだけ作れませんか永田町

大阪市 近藤 正

盤寿過ぎ平均余命まで生きる

コロナ禍におみくじを引く初詣

コメ作りメシ喰えないという農家

自滅した総理の椅子に岸田就く

認諾で改ざん事件チャラにする

大阪市 坂 裕之

初句会参加者多くほっとする

お互いにマスクをつけてご挨拶

気を遣うだけで意見も言えぬまま

何時もなら素晴らしい事する人が

疲れたら深呼吸して背を伸ばす

大阪市 高杉 力

まだ風を読んでる白いスニーカー

酔ったふり安全地帯右左

栗から始まる謎解きのゲーム

幸せのカタチに歯ブラシが二本

消えるなら今だゼロ番線ホーム

大阪市 高杉 千歩

断捨離も出来ぬ未練や車椅子

結婚記念日覚えてますか鬼遊さん

幼子の声をしばらく聞いてない

スマホ手に今日も何とか生きてます

百歳も夢ではないぞ車椅子

大阪市 田中 廣子

床の間の生け花やさし春の朝

七草粥嫁に伝えて皆元氣

夕焼けに主人の元氣祈ります

友からの長い電話で憂さ晴らし

捜し物二人で見つからず

大阪市 谷口 義

諦めの悪さは傘の雫ほど

どこに行くのか書いておいてほしかった

他人から見たら辛抱出来ること

一日の幕を下ろしてから映画観る

電話切るわ今から墓内土俵入り

大阪市 津村 志華子

陽の光分けへだてなくB団地

花手桶父母を偲べば目が濡れる

今日も無事守られましたリンを打つ

それぞれがドラマ秘めてるケアハウス

予定は未定花の浄土へ旅プラン

大阪市 寺本 実

お静かに始まつてるよエンディング

見ぬふりで家庭は平和妻のミス

愉快だと険しい顔で言われても

まだ履く日あるとせつせと靴みがく

ガソリンを買おうと警察やってくる

大阪市 中井 萌

今がいい今が一番 今がいい

雑煮餅ついに二つで事足りる

ちぐはぐな夫婦の会話が笑う

カレンダー誕生日には赤い丸

なあなあで暮らす二人に子が喝を

大阪市 原田 すみ子

お節完食三日の手間を胃に収め

福袋望みの半分ほどの福

トランプで勝つて笑う子すねてる子

和風洋風と遊ぶ子頬真つ赤

助走する距離がどんどん長くなる

大阪市 平井 美智子

○か×だけでは君を選べない

もう少し見てあげることできたのに

ポケットの中に言い訳二つ三つ

大声で明るく歌う淋しい日

楽しそうなのでこっそり付いてゆく

大阪市 平賀 国和

新走り息子と飲んで年を越す

新年も辛抱続くコロナの禍

初詣でみくじの吉に励まされ

何度観ても青春思う「蟬しぐれ」

中国への息子の赴任刺激あり

大阪市 降幡 弘美

すぐ下車をしそうな人の前に立つ

慣れた頃アップデートをするスマホ

手こずって行列でできるキャッシュレス

ユーチューブ使いこなせる三歳児

試着した時は似合って見えたのに

大阪市 宮崎 シマ子

初水割って遊んだ幼い日

年金日貧乏神にも酒をやる

涙流すのは私の勝手彼知らず

靖国の神となった彼手がとどかず

北国が寒いと大阪も寒い

大阪市 山本 加お里

今日もまた光り輝く朝がきた

初夢は好きだった祖母に会い

なぜ逝ったこれから好きにできたのに

百獣の王も老ゆれば向う岸

感動に出合う明日を信じよう

大阪市 横山 里子

正月の餅は格別美味しくて
日向ぼこ昔話で遊ぶ日々
通天閣溜息ついて衣装替え
リモコンがどういふ訳か冷蔵庫
くだらない話が鬱を吹きとばす

堺市 今井 万紗子

句会再開いつもの笑顔マスク越し
百九歳寅歳の亡母側に居る
お年玉五円も入れて福願う
神よ仏よ終わる気配のないコロナ
指を折る生きるわたしの応援歌

堺市 柿花 和夫

国民の口にチャックを強いる国
海馬から昨夜のメニューぬけている
新米に負けて二杯目玉子かけ
ジョークにも生徒笑わぬオンライン
いいんだよ友達なんかいなくても

堺市 源田 八千代

三家族それぞれに合う睨み鯛
孫ら皆素直に育ち来てくれる
末っ子孫も大学生となる今年
歯が生えて掴まり立ちもする曾孫
押し入れの雛も顔見世初節句

堺市 齋藤 さくら

頑張れと箱根駅伝茶の間から
賑やかな成人式も久し振り
デジタル化付いて行くにもやっこさ
そのうちに収まるコロナ三年目
公平に人生終わる慌てない

堺市 坂上 淳司

泣き虫もお客で乗せた縄電車
泣き虫を庇う番長居た昭和
竹馬の高さ競った男の子
家中でおじやみおはじき女の子
アスファルトの名画子ども蠟石画

堺市 澤井 敏治

玄冬の富士のお洒落は世界一
家族写真ことしはマスク外す願
マスク外せば少しはしゃんとなる背筋
簡単には受け入れ難いコロナの死
老いてゆく方程式がまだ解けぬ

堺市 内藤 憲彦

無事折り寅の干支置きお正月
書き初めは今でも僕は夢と書く
長男のおでこ親父に似て来たり
社名消えても創業の味守り抜く
大和川春の息吹に軽い足

池田市 太田省三

おみくじの女難注意に希望湧く
寒海苔の香りをつつむ握り飯
獅子舞が振袖美女を狙い打ち
初売りの威勢がひびく道の駅
リモコンを三つ並べる狭い部屋

貝塚市 石田ひろ子

自己流に生きアナログと仲がよい
走れなくなつて景色とお話を
正月の残り纏めてちらし
暖房の部屋で安住してゐる蜘蛛
夢一つ足して米寿の坂を越す

河内長野市 大島ともこ

波風の立たぬ夫婦でおもろくない
今行きますいつもの笑顔で待つて
憧れの人は仄かなレモンの香
弱いんです甘いマスクと巧い口
ブラットホームスマホ一斉前屈み

河内長野市 梶原弘光

なあなあにスパッと線を引く気概
混じりつ気ないと言うから信じていた
眼を合わせ覚悟の程を押し量る
長男のハンドル老いの墓まいり
心配はニト口を手放せない友

河内長野市 木見谷孝代

何年ぶり息子二人と初詣
下り坂ふんばる靴の底が減る
七草よりカレー催促されて出す
えべっさん残り福だね吉を引く
一人鍋日替りメニュー出汁キユーブ

河内長野市 黒岩靖博

コロナ禍で誰も帰らぬ二人膳
寝正月駅伝見ではビール腹
金剛山初冠雪で寒波来る
雪景色轍二本の道しるべ
逆境に負けてたまるか仁王立ち

河内長野市 辻村ヒロ

老いの知恵そこそこで手を打つておく
ちゃんづけで遥かな友の便り来る
ピツタリと寄り添ってくる老いの影
腹八分目通りこしてゐるラ・フランス
手も口も達者なのにと拗ねる膝

河内長野市 藤塚克三

難しい壁を越えれば真っ直ぐだ
老いたけど種火絶やさず灯してゐる
退院日朝日拝んで夢抱く
岩盤浴悩みじわじわ消えてゆく
もつたない知恵絞りたい牛ミルク

河内長野市 村上直樹

岸和田市 雪本珠子

オミクロン振り払うぞと縄のれん
サッチモに出逢つてからのジャズファン

免許返上これほど坂が多いとは

頑固一徹九条だけは守り切る

駆け抜けた人生そろり総まとめ

河内長野市 森田旅人

新しい景色探しに行く日の出

枯枝にみかんメジロのテリトリ

寒いよと言うに水浴びする小鳥

春を待つ糞虫のごとハンモック

私のリズム真冬のハンモック

河内長野市 山岡富美子

戦いは止まぬ形を変えながら

アルバムを開くと過去が饒舌に

賑わいが心に滲みるのも老いか

鏡とは不仲折り合いが付かぬ

頁繰る喜びがある五七五

岸和田市 岩佐ダン吉

正論を浴びて頷くだけになる

百分の一秒くらいと言いますが

劣勢の中だが道は外さない

何もかもロポットさんでいいですか

閉店の貼り紙にある涙あと

ときめいて華やぐことは今はない

古稀の坂いつも頑張らなくてよい

今の世はシャイでは生きてゆけません

エースではないが存在がある

風花が舞うと別れた人思う

高槻市 片山かずお

二年ぶり白髪が増えた友と会う

時は無情いい思いも消してゆく

探しています軋む夫婦に差す油

器用だと見入る百足の足づかい

口ほどに簡単じゃない捨てること

高槻市 島田千鶴子

あれこれと詰めてお節らしくする

寒いので近くで済ます初詣で

初売りも無縁になって出歩かず

亡母の歳越えても未だ母恋し

鬼平が去ってコロナが舞い戻る

高槻市 初代正彦

お正月でんてこ舞いという平和

取り忘れピツとレンジの指導受け

ふんふんと聞き手に徹しお茶を注ぐ

急増に子らも真顔になるマスク

黄シグナル誌上句会へ逆戻り

高槻市 富田保子

飾らない言葉の中にあるゆとり
試着室まだまだ刺激する鏡
ハラハラと散る中にいて落葉掃く
帰るなり土産並べて笑顔する
がまん坂夫婦でこえた土踏まず

高槻市 松岡篤

健康に感謝の賀状多くなり
第6波来ないかもとは甘かった
若者と一緒に歩き老化知る
大人って胸張れますか十八歳
北京五輪ワクワクなんて程遠く

高槻市 安田忠子

年明けて正月前と同じ日日
人ごとと思っていたの何食べた
右肩が痛くこんな不自由とは
こんなにも淋しい気持何故だろう
コンセント抜かぬようにと娘に言われ

豊中市 上出修

禁煙後体重計を避けている
百歳でも老後に備え貯金する
お飾りの名譽会長今日も来る
憧れの歌手と目が合うデイナーショー
マスク越し会釈したけど知らぬ人

豊中市 きとうこみつ

コロナ禍でみんなひっそり家族葬
保津川下り船頭さんで盛り上がる
つめ放題袋の口が閉まらない
川柳に使い勝手の良い6B
世間ではばあちゃんらしい62

豊中市 藤井則彦

待ち人が居るのは明日のある証し
断捨離をするなら先ずは薬断ち
礼状の一日延ばしました今日も
コロナ禍でこそ味わえる般若湯
往く人の心を満たす駅ピアノ

豊中市 松尾美智代

四階の居間から拝む初日の出
たまゆらの幸今年も友と待つさくら
マスクの顔で友と楽しむ昼ご飯
真っ直ぐ育ち真っ直ぐ老いてすぐ八十路
辛い事夕陽が消してゆく魔法

豊中市 水野黒兎

警官の影交番に無い師走
五音語音明日へと除夜の鐘響く
よく噛めと言われつ雑煮餅三つ
みかん置きようやく炬燵らしくなる
スマホ手にネット社会を浮遊する

富田林市 山野寿之

日記帳葉挟んである余韻

テレビ消し思い思いの老い二人

楽しんでのほほんと生き喜寿傘寿

上弦の月になみなみ酒を注ぐ

弁解の弁解が生む嘘数多

寝屋川市 川本信子

どっかりと坐り世間の風を読む

鯖缶と豆腐私の常備食

スーパ―とポストお決まり徒歩コース

コロナ禍も慣れて三度目接種待つ

落ちついた暮らしはきつと過去の汗

寝屋川市 伊達郁夫

腐葉土になって明日の命抱く

点滴の間隔にある無の時間

石仏を磨くと母の顔になる

悪人の素質か孫がよく眠る

飲むほどに孫の自慢がしたくなる

寝屋川市 富山ルイ子

娘古稀三度の食事ありがとう

息子古稀すぎ現役のバイロット

もう充分先に逝くのが願いです

一番は幸せの数だろうか

同居30年幸せな老後

寝屋川市 平松かすみ

仏前に夫の好きな雑穀

若い方ばかりの訃報気が重い

一泊ヘリユック何回チエックして

サービス券貰い茶席の高い付け

昨日の道を辿ればあったペン

寝屋川市 廣田和織

ほとんどが妻が正しいとは思

使い込みツヤが出てきた。ありがとう。

お若いと言われて背骨立て直す

全身で叫べば返ってくる答え

血液をドロドロにする妥協案

羽曳野市 磯本洋一

ノーベル賞気象変動一筋に

朝食後目的地なくベダル踏む

どん底も弾みで跳ねる時が来る

この餃子祖母のレシピは星二つ

天井の海老が重ね着威張ってる

羽曳野市 徳山みつこ

キスしたくなる二年振りの四歳

コロナ下で黒粋の義姉抱きしめる

景気どうあれ埋み火を絶やさない

八十路にもまだときめきの種袋

五百羅漢はさ迷う地球見てござる

羽曳野市 藤原大子

コロナ禍の殺風景になじみだす

いつ終る人とコロナの一騎打

初詣孫とお喋り弾む道

復調の兆し言葉に自信出る

傾けた耳へ小さな声届く

羽曳野市 三好専平

人生はくるくるまわる万華鏡

貧乏を知らない人が金を撒き

アフリカの地図もコロナでよく覚え

不信と恐怖でスマホ手放さず

パチンコと苦楽をともにした戦後

羽曳野市 吉村久仁雄

全員が揃っただけでもう愉快

ヒョウ柄のおばちゃんだけど巨人ファン

男の涙だつて立派な武器になる

三が日会いたい人のこと想い

覗いたらすぐ目の前にある地獄

東大阪市 北村賢子

使わない脳足退化するばかり

収束の望みを断ったオミクロン

生句会傘寿の春もまだ元気

行つたつもり旅の番組見て和む

一歩外に出れば広がる青天

東大阪市 佐々木満作

清々し新年祝う鶴の舞

大過なく傘寿迎えたのは奇跡

的を射る話に間の手を入れる

立ち話マスクがずれて二歩下がる

飽きもせず趣味にエンジョイする余生

東大阪市 西村哲夫

野良猫よ抱いてもらえず何処へ行く

野良猫を撫でてお前もおまえもか

花見酒猫はいつでも寝て候

温暖化猫は気にせず毛繕い

ご挨拶今日は返事もしてくれず

枚方市 谷英也

渋滞にイライラつる八十路過ぎ

霜柱踏む足どりも浮く心

孫台風元氣残して去っていく

空つ風躰に滲みる八十路です

陽だまりで膝に孫のせ元氣です

枚方市 丹後屋肇

風景のおめでたくないお正月

蠟燭が消えて睡魔に襲われる

寂聴尼と握手交わした左利き

勘亭流面影を恋う吉右衛門

目覚しの雀がいよいよ日々無聊

枚方市 藤田武人

姿見に写った魔女に嫉妬する
返信は絵文字並べて文にする
締切日試行錯誤の繰り返し
豪邸の換気扇から秋刀魚の香
未使用も無駄と思うな危機管理

枚方市 山口弘委智

雪溶けて色ごとく光得る
梅一輪道行く人に語りかけ
下萌えに生きよと言われ奮起する
心から笑える春がまつている
蒼き空たぐりよせてる風自慢

藤井寺市 太田扶美代

雲往き来わたしに冬がやってきた
笑わしてあげたが笑わせてくれぬ
針箱の中は女の万華鏡
うなだれて冬の深さを計つてる
笑い袋に涙を入れたのはだあれ

藤井寺市 鈴木いさお

不具合と折り合いつけて老いをゆく
賞罰なし目立たぬように生きている
疎まれているのは承知しています
忘れたいことあり少し濃い湯割り
お喋りな阿形と寡黙な咩形と

箕面市 大浦初音

ちょっと待ち言いたいことは明日言う
振り向かず前をみつめて歩くのみ
良いことだけ聞いて長生き遠い耳
いい夢を見たくて枕変えてみる
コロナ明けいろんな夢を盛りこんで

箕面市 酒井紀華

本当はしあわせでした古写真
笑い合う仲間はいいな同い歳
紳士淑女老いを楽しむ旅のなか
心から笑える友にありがとう
裸木に一夜あければ雪の花

箕面市 出口セツ子

年の暮れ知人の娘さん急死
医者行かず仕事優先して急死
泣かないで話す強さよ友案じ
慰めの言葉が出ない立ち話
たった2日で逝く信じられない話

箕面市 広島巴子

皆揃い元気な笑顔至福なり
新年も聡太気になる王将戦
みかんお茶夫婦炬燵でうとうと
世の中が変われど私マイペース
急拡大コロナ六波に冬眠へ

八尾市 寺川 はじむ

酒の勢いついつい本音喋ってる

前代未聞何とあつ晴れ二刀流

人生の歩みしばしば頓挫する

上品な喋り敵とも味方とも

巢ごもり続きやばい出不精癖がつき

八尾市 村上 ミツ子

値段そのままステルス値上げお手上げだ

買物メモを見ながら買って買い忘れ

早過ぎた値引きシールが貼ってない

シール貼るまでもうひと回りしてこよう

楽しいこともいっぱいあったけれど

神戸市 上田 和宏

案の定読み応えない元旦紙

不思議がる子の眼の奥の柔らかさ

高齢者事故聞くたびに金縛り

断捨離はあの世へ行ってからにする

関東大震災まだ百年が経ってない

神戸市 奥澤 洋次郎

初雪に初日を迎え令和四年

仙人の真似はできない作句帳

孤立社会今日も火災が起きている

下町を嫌う女のさみし過去

拾う人いるから愚痴をこぼしてる

神戸市 輿水 弘

来る時はくる今日も痛みとじゃれている

目元すっきりコロナで呼称目力に

ふと亡父の生きざま探しアルバム見

弾んだ夢を見たいもんだな今朝転ぶ

思い出怒とう凜の姿の友が逝く

神戸市 近藤 勝正

日記帳今日も日付と天気だけ

外は晴れ心はくもり一時雨

カレンダーしゃべった日には○印

独り住み淋しいとこにシップ菓

過疎の郷我が家跡地も草茂る

神戸市 斎藤 隆浩

まな板と包丁消えてレンジだけ

退職金ドツと株買いパツと散る

レトルトとメモ置き妻はイタリアン

団体の側でガイドを只で聞く

湯上がりのカピバラどこか艶っぽい

神戸市 富永 恭子

愚痴不満説教みんなお断り

人間が人間評価する苦悩

八代亜紀男無口がいいと言う

大声で怒鳴れる八十の肺活量

ルーティーンをちよつと崩して気が晴れる

神戸市 能勢 利子

ウイズコロナ ルール守ればこわくない

オミクロンで来月はまた投句会

長生きの秘訣笑顔でマイペース

歯が痛くてもアンパンは食べれます

ショートステイ好き家はもつと好き

神戸市 松倉 正美

男女別で競う紅白もう古い

横文字が矢鱈と多い歌合戦

丹波から黒豆届きお福分け

通販のお節誉められこそばゆい

呆けぬ内和製横綱早よ見たい

神戸市 山口 光久

だらけないように時々唐辛子

悩みごとお地藏さんは聞いてくれ

縄跳びが出来なくなつてゆく怖さ

口笛を吹けば昔が蘇る

スーパードペちゃくちや脳の活性化

神戸市 山口 美穂

むかえられた新年感謝掌を合わす

この脚が頼り今年もよろしくね

なるようになるさ考え中止する

おうちからテレビでできた初詣

断捨離を気づけばすでに余力なく

神戸市 山崎 武彦

家中をまあるく掃いてお正月

人ひとり救うアドリブなぜ出ない

ここだけの話に耳朶火照りだす

ワイシャツの紅にアドリブ狼狽える

虎のしっぽ今年は振つてくれないか

明石市 梶谷 和郎

徳利の底で巡らす謀

スイッチの入らない日はゴロ寝する

雨天曇天脳にちらちら鬱が降る

戻らない過去に色付けしたくなる

ファーストは何かと問うている五輪

芦屋市 竹山 千賀子

無病息災目指して社寺をはしごする

幸せは君の笑顔と出合うとき

目覚しに明日の無事をかけて寝る

孫と合う少し派手目な服を着て

新製品身に付くまでの大葛藤

尼崎市 近兼 敦子

発熱に弱気になった三日間

わかっても覚悟しても揺らぐ軸

うっかりと乗った話が長かった

上手いことトイレ掃除をさせる母

洗車にはポリシー強く持つ夫

尼崎市 永田紀恵

泣く事もない毎日は幸せか
斜め読みする癖付けた政治面
乾杯を待てずビールをちよいと飲み
勝負より懸賞金の束を見る
山茶花が散るのを横で待つ椿

尼崎市 羽奈和子

水の下メダカはじつと生きている
左右から仁王が睨む点に立つ
おぼちゃんの三人連れと四人席
引越しの挨拶どおり寄つてみた
鼻たれもしもやけもない令和の子

尼崎市 藤岡りこ

散歩に誘い小躍りするはポチだけだ
連れ合いを亡くした姉の弱音聞く
ふつふつと堪忍袋に火がついた
事故ニュース怪我人無しにホツとする
青春は心の中で生きている

尼崎市 藤田雪菜

取り敢えず元気ですかと聞いてみる
落葉かさこそ赤い絨毯散歩道
薬より笑ってなおす気の病
五千歩の翌日百歩足痛む
風の音冬將軍が来る合図

尼崎市 山田厚江

アメンバー来世は何になりたいか
千円の苺を一個ずつ食べて
言語教室「ら」の音だけで一カ月
骨壺もピンクで逝つた沙也加ちゃん
孫の守あと二日だとふるい立て

加西市 山端なつみ

ベッタンボン搦き手合いの手五十年
餅搦き器買えと腰痛歳かしら
搦き立てを千切りきな粉にあんこ餅
五軒分孫も上手に餅丸め
コロナ禍はもう終つてははずだった

川西市 山口不動

鬼ごっこ園児の孫に叱咤され
十八の大人の孫にお年玉
自画像はこの裸木のたたずまい
三箇日過ぎて嵐は去りにけり
裸木は幹の太さを自己主張

三田市 足立つな子

返り咲きたい花も実もある五十代
人生のしまいごとには手間かかる
顔あげて背筋のばして歩くこと
生真面目な手抜きがへたで疲れでる
一言が傷をつけたり癒やしたり

三田市 稲角 優子

あでやかな母の深さよ曼珠沙華
まだ他人しばし余韻の傘たたむ
独りだち積んできたものすてたもの
ひとしづくこの温もりをこぼすまい
日向ほこ素敵な夢を編みながら

三田市 上田 ひとみ

計算はあなたに適うはずもなく
福袋やつぱりひとつ買いました
顔ぶれは少しずつまた変化して
いいのです私はいつもこんなふう
この居間に欲しいものなら全部ある

三田市 大西 重男

愛嬌を振り撒き顔がもどらない
爺ちゃんにデザート聞くとお茶がよい
願い事ひとつにせよと神の声
二位飽きた優勝してよタイガース
ひと仕事終えて至福の酒を飲む

三田市 尾崎 一子

令和四年こころ新たに陽を拝む
子が仕切る猪鍋ほんに亡夫に似る
墨の香にこころを洗う筆はじめ
いろはカルタ囲む正月なつかしく
つつましく生きて平和の灯を点す

三田市 九村 義徳

緩やかな流れに乗ってゆく余生
明日という白いページにある希望
肩書きが取れて眉間の皺も取れ
コロナ禍でじっと我慢の子であった
GPS付けてみたい税金に

三田市 住吉 美和子

積雪で都心の脆さ見せ付ける
カレンダー書き込み増える春を待つ
古い二人背中丸めてお茶啜る
寒い日はマスクがピタリさまになる
お隣のばあば可愛い認知症

三田市 多田 雅尚

ミカン剥き人それぞれの作法有り
七十歳超えれば皆んな同じ顔
土曜消え締切り日だけ追って来る
酒粕は要らぬ生酒の方が良い
マイナンバーカード笛吹けども踊らず

三田市 中山 昭美

今女子の一人焼肉羨まし
ダイエット成功させた恋病
退院に淡いリップを重ね塗る
提灯に手招きされる道それる
朝刊の隅に見つけた今日のネタ

三田市 堀 正和

スタンプを三つも押した年賀状
後期へと戦後生まれも辿り着き
本日もトップニュースはまたコロナ
ガンバレとテレビ体操見えています
蛇口から今朝も湯が出るありがたいとう

三田市 村田 博

喜寿という節目に先ずは吟醸酒
向かい風大樹を盾にまわれ右
ドラマーの貧乏揺すり止まらない
ファックスに頼る日本の骨密度
間の抜けた猫だ塀から下りられぬ

宝塚市 丸山 孔一

賀状止め友が電話で生きてるか？
黄泉の国往復切符無いものか
暗闇の奥で閻魔が手で招く
コンビニで酒買い二十歳超えてます
階段を下りたが何しに来たんやろ

丹波篠山市 北澤 稠民

正月も一人寂しく酒相手
飽きもせず黒豆作りに夢をかけ
寂しいね怒ってくれる人もない
人生を間違えたまま終りそう
定命に急ぐ正月またも来る

丹波篠山市 酒井 健二

仁王さま今日はやさしい目で睨む
ザックリと近頃小銭数えない
人生は徒食暮らしが一番や
渡り鳥えらいぞそつと手を合わす
凡庸な日々も平和であればこそ

丹波篠山市 長谷川 善輔

流れのままに年来たり去り老いだけ残る
あと何年読めぬ年読み新年迎え
暖房いっぱい暖冬めかしてひなたほこ
息子の気配びくつきながら夜更かしテレビ
チョコちゃんに叱られないよに無難に暮らそ

丹波篠山市 藤井 美智子

ワクチンも安心出来ない第六波
深呼吸今日のスタート老いに喝
二十年亡夫の面影抱いて来た
夢に出る恋人きつと亡夫だらう
気がつけば身内でトップ長老に

西宮市 亀岡 哲子

冬眠の尻尾伸ばして春がきた
福耳はしかと受け継ぎ三代目
亡き人のカラオケ聞こゆお正月
寅年の亡父おわせば百二十
三浪まで粘った母のパート代

西宮市 福 島 弘 子

思い切つて身辺整理義理も久く
五歳とはいつもアドリブ面喰う
息子の家に保護猫までも増えている
耳学問ネタに困らぬワイドショー
耳が痛い事を今では娘から

西宮市 福 田 正 彦

こだわりを溶かしてくれる窓の月
寄り道に隠れていたよ知恵袋
些と辛い四角四面のアドバイス
狙つてる痛が我が身を知り尽くす
流星も地球の憂い避けている

南あわじ市 萩 原 狸 月

耐える妻いい子らが居てダイヤ婚
ありがたいメスの入つてない体
極楽へ足らぬ修行を積む八十路
極楽へ路銀不安な貯蓄額
極楽と言えどもあの世行きとない

奈良県 安 福 和 夫

自由満喫香港時代なつかしい
ローカルのスタツフ達の身を按ず
台湾を視野に香港抑えつけ
香港旗北京五輪で何とする
ああ飲茶香港の味は何処へ行く

奈良県 谷 川 憲

マスクでも笑顔が分かる散歩道
「ハイ」にある微妙な変化妻の乱
心の医院襲う悪魔の無惨
老化との折り合いつけて日向ぼこ
郷里から旬が届いてお裾分け

奈良県 中 堀 優

悔しいがじつと耐える耐えるんだ
弱点はどんな人でももっている
美味しないやはり料理は妻のもの
勤めてたビルの灯じつと見つめてる
社長さん石垣である人切るか

奈良県 長谷川 崇 明

令和四年期するものあり今八十路
アイデアの錆び付く音に知る傘寿
任せなさい干せば雑魚でも味が出る
共白髪でもね華やぐお正月
甘味料よりも私に要る薬味

奈良県 渡 辺 富 子

老い二人違う景色を見ています
なりゆきに任せて猫と日向ぼこ
まざまざと老いを感じる影法師
愛と憎見事に調和して夫婦
罅線をはみ出す想い抱いて冬

奈良市 宇賀史郎

蠟梅の香りたらずに年が明け
お正月滅多に褒めぬ人が褒め
今年また差出人のない賀状
爪を切る音やわらかくやわらかく
古い二人会話オハヨウとオヤスマ

奈良市 加藤 江里子

頂いた袖子を浮かべて至福の湯
たたきごぼう作つてくれたお嫁さん
恙なくみんな揃つたお正月
いつもより早く家出る初句会
試練もまた青年の眼を深くする

奈良市 高橋 敬子

十二月八日知っているかと孫に聞く
柿すだれ勢揃いして日向ほこ
通販の御節見た目を競い合う
去年より低くなつてるしめ飾り
八十八寺一円ずつの願をかけ

奈良市 辻 内 げんえい

孫保育責任もなく遊ぶだけ
オミクロン句会再開消していく
神仏へコロナ退散大合唱
オー寒いリハビリ歩きスーパード
人出見て氏神社今日も止め

奈良市 山本 昌代

寒風に犬もマフラーして散歩
小一時間取留めない電話口
指先に力 不安との闘い
若く若くおしゃれおしゃれのコマーションシャル
ばあちゃんのお膝でほっとしてくれる

奈良市 米田 恭昌

リアル句会コロナ疲れの顔と顔
人間の怠惰を狙うオミクロン
オミクロンはびこる寒い基地の町
疑心暗鬼またまた今年こそと虎
十五年共に学んで暮下ろす

生駒市 飛 永 ふりこ

寅年を寿ぎまずはお屠蘇から
志望校絵馬に念じる受験生
お雑煮も小さめそり喉を越す
羽根突きの弾み昭和を回顧する
凧揚げの手作り皆のアートです

香芝市 大内 朝子

新春の朝日希望の矢を放つ
みかん剥く輝ピリリ母偲ぶ
ウオーキングサボるとちゃんと呼けが来る
気が付けば年に甘えているはずばら
綿帽子かぶる椿の愛らしい

香芝市 山下 純子

五黄の寅やさしさ増して年女
七十二歳日の出拜みに二上山
二上山のように寄り添うわたしち
和洋中ミックスおせち神迷う
二人三脚時々換える結びひも

和歌山市 上田 紀子

逃げ足の早いチャンスを捕まえる
人生の今どあたりちぎれ雲
人間の住めぬ地球となる未来
長いものに巻かれてついた粘り腰
終章に向かう足腰鍛えてる

広島市 岸本 清

福寿草初日を浴びて花咲かす
正月は年に一度の妻の酌
困窮者へ活かせぬものかフードロス
温暖化大地を砕く音がする
人類とウイルス永久のサスペンス

三原市 鴨田 昭紀

哀しいがホップステップする記憶
定年になって自由に翔べる日々
歳月が治癒するひび割れたハート
流れ弾避けて低空飛行する
人生のパットラインが読み切れぬ

三原市 笹重 耕三

声のデカイ方へ入れる募金箱
訪日を済ませ居座るオミクロン
宝くじやっぱり駄目だったペンツ
うす味を崩さぬ妻の処方箋
デジタルと言われてもなあ戦後っ子

岩国市 上村 夢香

新年の誓いは旅の予定だけ
木漏れ日を背に受け登る雪道を
葉室麟ステイホームにちょうどいい
ネットサーフィンついつい本を買い過ぎる
ちよつとだけ声聴きたいといいながら

防府市 坂本 加代

CO₂名もない草に浄化され
年賀状店じまいしてこもりびと
見てほしい見てほしくない心の句
押入れに移動するだけ大掃除
大波のオミクロン来る立ちすくむ

鳥取県 門村 幸子

十二月の雨淋しさを連れてくる
無理せぬよう途切れぬように老パワー
ウォーキングねばり強さを身上に
よしやるぞ今朝も好物ゆで卵
議員でもないにすっかり記憶もれ

鳥取県 竹 信 照 彦

山陰に生まれ陰陽無く生きる

鳥取の知事は駄洒落とギャグが好き

風紋を消して真つ白大砂丘

人生の先輩ガンに勝てず逝く

穏やかで慈愛に満ちたデスマスク

鳥取県 細 田 裕 花

大雪が正月プランぶっ飛ばす

ふるさとに空家バンクが出来ました

眠そうな大臣日本は平和

コタツ中とろとろ寝てる思考力

虫食いリング大逆転は鍋の中

鳥取県 本 庄 ひろし

残り福願って祈る我が息子

迷わずに決めた相手が僕の妻

自画像をほめるのは誰私だけ

浮き沈み何とかなるよ人生は

乗り越えた壁がいくつも有って今

鳥取県 山 下 節 子

靴下を吊し夢見るクリスマス

ペアカップ朝のコーヒーほんのりと

マスクはいいあくびをしても気づかれぬ

お互いにもうあせるまい老い二人

昨晩の献立を聞く脳検査

鳥取市 池 澤 大 鯨

酔い回り体ほかほかしい気持

もふもふの犬はほかほか尻尾ふる

ほかほかの御汁すすって胃をなだめ

一年生ほかほかの時ありました

穴を掘る燃えない小物埋めている

鳥取市 奥 田 由 美

二十五軒の区長を選ぶあみだくじ

住み慣れた町が嫌った老独居

返信が無くて再度のさようなら

散歩行こうにアクビの返事するペット

自営業がサンダルで来る申告日

鳥取市 加 藤 茶 人

雪国の冬に似合わぬ雨宿り

日本の花鳥風月四季愛でる

優しさに甘えて付いた皮下脂肪

すぐ匙を投げ第三者委員会

付き合いいも見栄も断捨離して手酌

鳥取市 岸 本 孝 子

冷めてから飲むコーヒーの味覚え

膝小僧なでてはいつも亡母思う

温泉と蟹三味でおもてなし

急かされてペースが狂う台所

前かがみで歩けば歳が加速する

鳥取市 倉益一瑤

鳥取市 永原昌鼓

微熱あるうちにひと肌ぬいでおく

笑い声聞こえOK出たようだ

回り道楽しい夢をたんと見た

懸命に生きた証が何も無い

ふる里の風に会いたくなくて冬

鳥取市 田賀八千代

スクラムを組んでコロナと戦する

明日描く色を捜せば君がいる

交差点曲がると母の顔になる

診察券違えポイントカード出す

また明日最後の言葉なるなんて

鳥取市 棚田大

大雪も好かれ嫌われ去って行く

お正月大雪降るもおめでとう

あいさつに名句発して喝を入れ

仕事中携帯が鳴り大慌て

スキー場大人ばかりで寂しそう

鳥取市 谷口回春子

失敗に勇気を貰うこれも俺

孫と寝る川の字いつも氾濫す

頬染める孫のほっぺに牡丹雪

孫と指す挟み将棋に待ったする

亡父語る時はいつでも北の空

一年に一度誰にも来る祝日

一人だがテレビが相手してくれる

指紋まで老いて証拠は残さない

最良の葉だ笑顔絶やすまい

ピアノスト夫婦奏でる駅の午後

鳥取市 中村金祥

ご先祖が命つないで僕がいる

失言の波紋が消えぬ世が狭い

ブランド時計狂ついても腕にはめ

毎日の努力閻魔は見てござる

いつまでも脳がイキイキ五七五

鳥取市 副井ゆたか

柵を断ち切り目指す新境地

節酒せよ家族一同声合わす

古里に竹馬の友が居る安堵

肘痛くラケット振れぬ日々哀し

句作りにスマホを連れて一人旅

鳥取市 前田楓花

直球だけで生きてゆくのは肩が凝る

おみくじにスロースローと書いてある

節くれた指で指輪が外せない

週一で温泉に行くのも仕事

食卓に駅弁並べ旅気分

鳥取市 山下 凱柳

福は内心の窓を開けて待つ
老いていく脳と身体を持って余す
聞く力言うなら庶民の声を聞け
寅年だ優勝頼むタイガース
夢の対決ビッグボス対タイガース

鳥取市 吉田 孔美子

孫いっぱいでも年玉弾む筈だった
落ちそうでも猫にはこち良い斜め
もやもやと斜に構える反抗期
椅子に納まらず足は斜交い
師はいずこ白壁格子崩れおり

倉吉市 大羽 雄大

良き夫優しい父の三ヶ日
婦省子のあか抜け顔が美しい
長風呂に鼻歌もれてひと安心
寅年もマスクグータッチが続く
行動の年だと寅が吠えている

倉吉市 岡崎 美知江

恋風にのってラララと廻り道
生きている十指それぞれ演技する
リハビリの指やつと広げてジャンケンポン
最終の旅の衣装は決めていて
手の平の雪だんだん温くなる

境港市 藤原 久直

我が夫婦苦楽を共に五十八年
じつくりと心を磨き丸くする
八十の手習い折り紙に夢中
川柳塔いつも音読呆け防止
没が続いても白旗は上げない

米子市 池田 美穂

お年玉十万円に負けている
新年の客は無くても酒は減る
雪かきも嬉嬉ととしている街の孫
厄除けに年末ジャンボ買っている
年末に行きつけの店閉まってた

米子市 伊塚 美枝子

今日の晴れ予報ハズレてもうけもの
予報通り大雪となり家ごもり
ばあちゃんは雪に負けずに医者通い
休眠のコロナ目覚めて来たらしい
初笑い孫がいる内笑いだめ

米子市 後藤 宏之

身辺を掃き掃除してカムバック
肝胆相照らすおいおまえの友
そしてから長い話がまだ続く
幕引きの準備はちゃんと出来ている
口論が終り一変雪見酒

米子市 後藤 美恵子

赤い実を鳥に攫われ庭沈む
恋しい人冥途の宿に待たせてる
大掃除へそくりやばい隠し場所
八十路半ば「ちゃん」と呼び合うクラス会
議員バッジ飾りじゃないよ期待する

米子市 竹村 紀の治

本日は晴天ですが引き籠る
ストレスも肥満も僕のパートナー
泣きどころ知っているから続く酒
好きな人嫌いな人もいて平和
劣等感あるから少し努力する

米子市 中原 章子

突然の腰の激痛うろたえる
生きていることが仕事の歳になる
黄昏の文字がちらつき離れない
餅食べる用心をして細切れに
年賀状の曾孫かわいくてしかたない

米子市 成田 雨奇

視力弱る自分を褒めてばかりいる
金と寿司妻を元気にする薬
元旦に三年前の日記読む
水鉄砲逃げる猫には届かない
ピクピクと動いた眉が嘘を吐く

米子市 野川 宣子

気をぬくと猫背に戻る老いふたり
人の波戻り出番の招き猫
家飲みの手は猫がしてくれる
高級な枕に変えてから不眠
元気だな十二違いの妹だ

島根県 伊藤 寿美

修理した補聴器で聞く春の音
デジタルに挑む三元号生きた皺
孫婚約のメール飛び込む新春の朝
わたしがわたしに傘さしかける最終話
遺書も書いた延命拒否もしておいた

島根県 伊藤 玲峰

松竹梅飾り息災を祈る
松の緑冬に耐えなきや春が来ぬ
太陽が恋しいありがたさが募る
白梅が恋の芽生えかほつと咲く
墓参り大きな虹は母さんか

松江市 石橋 芳山

雪どけの川をむさぼるように春
日溜りのふわりと生まれたての春
遺失物だろう一円玉と俺
発言を控えて今は焼うどん
雨宿り波の裏から見える街

松江市 藤井寿代

豆挽いて至福の時がつづくよう
愚痴もおだても包み込むオムライス
デジタルに囲まれアナログに生きる
ヒロインになった気がする夜明けまえ
ポジティブに生きると決めてキミ許す

松江市 松本知恵子

爪磨く小虎と冬は炬燵番
山育ち凍結防止ぬかりなし
諸人に福の波届く母白寿
母白寿新し好きで心配性
第六波面会の春待ちましょう

出雲市 岸桂子

鳴り砂は地球の鳴咽かもしれない
ふる里の星の自慢はゆずれない
心まで売らぬと決めて四面楚歌
追憶の星の一つは胸にある
すんなりとここまで来れた訳でない

岡山市 高岡茂子

「陰性」でもどれた孫と祝う餅
重箱の煮メ黒豆家の味
電話ではゲームしてたと言わぬ孫
冬帽子髪のみだれを隠してる
マスクした島田も座る大相撲

岡山市 田中恵

眉きりりまだ負けられぬ初鏡
探し物夫に尋ねる癖がつく
なみなみの屠蘇でコロナを退治する
照強土表に降らす牡丹雪
マスク越し知ってるようでもず会釈

岡山市 藤澤照代

恙なく定位置に吊る初暦
わたくしにエールを送る初日記
恙なく今年も食べる雑煮餅
またひとつ歳を重ねる鏡餅
老いの身にパワーをもらう初日の出

岡山市 大石洋子

晴れ着は大事ババもちゃっかり華やぎます
終息のコロナ世見たい生き延びる
川柳に元気の言霊さがして
シンプルライフ身体にいらぬ肉つけぬ
年重ね五官大事に生きていく

岡山市 丹下凱夫

勝ち負けを語るおろかな性がある
やすやすと雑煮十個を平らげる
初夢に壇蜜を見て畏まり
一波から六波だんだん高い山
餅を焼きミカンを焼いて日が暮れる

岡山市 永見 心 咲

一泊はまだまだ怖いプチ旅行
虫食いの高速道はまだ無料
ご近所に内緒の旅で荷が軽い
自粛続き激んだ脳に風入れる
マスクから解放された 夢だった

岡山市 前田 恵美子

五十回目のお節も詰めてお正月
元旦は集金日です「お年玉」
マスクして眉きりり描きさあ散歩
畑巡り野菜たちにも「おめでとう」
保育園もうとんど焼き七草日

笠岡市 藤井 智史

エコバッグ地球に頭撫でられる
愛を語るにもお腹が減っている
パスワードリストで愛をこじ開ける
お惚気な句です「こちそうさまでした」
川柳塔誌友を増やせ Twitter

(前月分) 高知県 小澤 幸泉

この道の向こうボンヤリ神の国
子から孫サツカーボール受け継がれ
一パイのコーヒー甘くほろ苦い
コロナ禍を生きる倅せ妻が居る
妻と二人褒めも文句も分けあえる

(前月分) 岡山市 田中 恵

ふる里の話しよう茜雲
コロナ封じ開けてみようか玉手箱
歳月の流れで変わるそれも好し
庭園の松は得意なポーズ取る
梅一輪わたしにほしい句読点

第38回渡辺銀雨賞 すすむし全国誌上川柳大会

課題者 「音」(2句詠・字結び・詠み込み可)
15名共選

高橋みつちよ・高瀬 霜石・若林 柳一
坂下 清・松代 天鬼・矢沢 和女
古谷龍太郎・寛のぶなが・渡辺 松風 他
一〇〇〇円(郵便小為替)何口でも可

投句料 ※参加者 全員に参加賞呈
所定用紙・便箋用紙・原稿用紙

賞 住所・氏名(雅号・本名)・郵便番号・電話明記
大賞(1名) 入賞句入りブロンズ像・すすむし誌
12か月分・自然薯うどん特大

準賞(2名) 入賞句入りブロンズ像・すすむし誌
6か月分・自然薯うどん大 50位まで賞あり
4月30日(土) (消印有効)
「川柳すすむし」誌6月号

締切表 発句先・問合せ先

〒018-1724 秋田県五城目町東磯ノ目一丁目7-11
湖東印刷所内 すすむし全国誌上川柳大会係 宛
電話018-1853-2430
川柳すすむし吟社

川柳塔の

川柳讃歌

上方芸能評論家 木津川 計

読めるけど書く気になれぬ「ウツ」の文字

小松 紀子

「鬱という字を考えた人の鬱」と詠んだ川柳家がありました。正しくそうです。この漢字メーカーはよほど鬱々と過こしていたのでしょうか。二千年も昔の中国に憂鬱な人物がいたお蔭で漢字の空白が埋められたのです。あるとき、興味を示した小学生の孫娘にこの難しい漢字の覚え方を教えました。「リンカーンはアメリカンコーヒー三杯飲んだ」と。この覚え方を編みだした人の鬱でもあります。紀子さん、この覚え方で書く気になってください。

豪邸に似合わない人住んでいる

岩崎 公誠

嫁さんが亭主より大きい蚤の夫婦も居れば似合いのカップルもいる。美男子に美女の組み合わせならいいが、この無細工な男になんてこんな美人が? と思わず二人には違和感がある。物事には釣り合いがあるのだ。だから

ら豪邸には、無念だが相似つかわしい人しか住めない。さりながら、長屋に似合わない有名な人も住んでいるのだ。現代詩の最高峰にして、大阪文学学校の校長だった小野十三郎は終生長屋に住んだ。公誠さん、住む所構わずです。

妻というガードレールが在る暮らし

藤塚 克三

妻と二人で逼塞して私は暮らしているから行動半径は狭い。書きもの読書も居間でするように、いよいよ狭くなった。ステッキに頼るほどに脚力がしだいに衰えてきた。老化は一般に男が早いから「妻というガードレール」なしに暮らしくくなった。こんな筈ではなかった、と思うもののレールに乗れば安心でもあることに気づいた。老後はことに妻のサポートなくしては暮らせない。克三さん、奥さんを大事にされることです。

白い壁孫の落書き宝物

中井 萌

ええー!? こんなところに落書きしてえ、と幼なかつた孫のいたずらを叱ったのはなんねん前だったか。まっ白な壁に落書きされたのだ。消すこともできないまま落書きから目をそらしてきた。いまになって思う。消さなくてよかった。こんないたずらをした幼い頃の有難い宝物と思えてきたのだ。成長の貴重

な記録である。萌さん、そのお孫さんはいまいくつになられたのでしょうか。落書きを見るたび、恥ずかしい。

記憶には無いと確信がいう

竹村 紀の治

絶対この人物が犯した故の確信犯である。状況証拠も証拠物件もあがっている。にもかかわらず否定する。そんな人物の常套語は「記憶にはない」である。なんと便利で都合のいいことばであろう。自分にも上司にも不利、政権の権力者にも不利だから否定する。だが、みんな見抜いている。そう言う人物こそ犯人だと。政権にかかわって「記憶にはない」はこれからも出てくる。紀の治さん、その人物は記憶していると確信することにしなすう。

ふる里の映るテレビに涙ぐむ

大内 朝子

懐しいふる里は高齢化にさらされているのです。学校へ通う子供の数もうんと減りました。わたしたちの頃は、手をつなぎ、歌をうたいながら、あつ、いま映つてゐる道を歩いて学校へ行つたのです。「うさぎ追いかの山、小ぶな釣りしかの川」は本当です。うさぎを追いましたし、小ぶなはなんぼでも釣れました。そのふる里を映してくれて……ありがたう、涙が出ます。朝子さん、よかったですね。

白選集

小島蘭幸

ピアノにバレエ孫よ個性を大切に
神よりも僕を味方につけなさい
起き抜けの一步厳しくなってきた
木洩れ日よ今度はオミクロンですか
鈴木誠也が抜けたカーブは夢がある

千の波

八木千代

親の死を知るかのように千の波
魔物みたいに次々襲う波頭
喫水線ぎりぎり観念したことも
折り合つて過ぎた風の日も数多^{あまた}
水平線の果ても波路は同じこと

居谷真理子

スーパームーン凶と見上げる性を持つ
行間がチラリと赤い舌を出す
独り来た野原で凍て蝶に会った
胸元に染み多くして年暮れる
改ざんの書類に止まぬ猛吹雪

冗談が言えるまだまだ惚けてない
逆転のチャンスを狙う削除キー
きれいごとはかり並べる観光地
卵とじ何を隠しているのやら
用もないのに振り返る癖がある

北野哲男

真夜中に鬼の霍乱救急車
急性の胆管炎のあぶら汗
初体験ありがたくないお年玉
平常に食欲だけが戻らない
春までは充電期だと自重する

木本朱夏

カコサイタサイタとサクラには非ず
オミクロンに肩を叩かれないように
人流へマスク2枚で防御して
人のことばに飢えております一人鍋
湯豆腐の白さは人を恋うしろさ

新家完司

皿回しには負ける南京玉すだれ
文鎮の代わりにブタの貯金箱
天気予報ほどは当たらぬ株予想
贅沢は敵だアブラムシを食おう
本名も雅号も休み日向ぼこ

川上大輪

高瀬霜石
春雨じゃ濡れて参ろうーとはいかぬ
憧れたものさ猿飛・霧隠れ

初恋は東映城のお姫さま
花粉症の人は忍者になれません

平成の役者の殺陣の下手なこと

竹治ちかし
五七五詠んで余生に付ける彩

明日の晴れ約す地球の良い寢息
子と同じ校歌を歌えない不幸

朔日も晦日も同じ時刻む
望んでも望まなくても来る明日

津守柳伸
なんとなく日暮れが早いお正月
三ヶ日女の城は守るべし

たまさかに性格悪い柳箸
生き甲斐を探す賀状をじっくりと

郷愁の七草雑煮亡母おわす

西出楓栞
風に散る落葉に似る身昨日今日
二三時間間を置き腹の虫鎮め

物思い暗い方へと向く冬日
軽い命へ二重にマスクして自嘲

ドライアイなのに涙が出る不思議

仁部四郎
春はあけほのしらがが少しふえました
春だから4B2本買ってきた

春が来たラベルはなんだ缶ビール
春だから例の四人で呑むことに
行く春をローカル線に乗りに行く

平田実男
杵で搗く餅が本當の餅の味
行くところは老人会と医者四つ

曾い孫へ財布の紐が緩みがち
句会にも勝負パンツを履いて行く
心までスッピンにするクラス会

福士慕情
椎間板なれと傘寿にきた試練
激痛に耐えて寝返りばかりする

針の山生きで地獄の責めに遭う
加齢とや診察券がまた増える
温かい寄せ書き胸を詰まらせる

藤村亜成
喜寿と古稀夫婦出直す歳迎え
不出来な夫婦だから補い合えてきた

絶対にあれより先に逝くな妻
父親と同じ巡りの緑内障
眼が痛む失明前の亡父想う

松本文子

山本希久子

一日一日その日のために耐えている
老いの辛さ認知症で楽になり
心の花咲かす努力をしています
大空を仰ぐ、メリット湧くように
哀しみを消して令和の雪が降る

三浦強一

板尾岳人

富士の初日テレビで拝す外は雪
総入歯完成ビフテキを食らう
コロナ奴が変えた老後の設計図
オンライン右向け右が恐ろしい
本日のボカを数えて歳を知る

村上玄也

寝違えときつくり腰で寝正月
お年賀も減って淋しい三ヶ日
食っちゃ寝る癖ついてたコロナ禍中
難病を抱え頑張る友が居る
難儀抱えても友達しき哉

森山盛桜

日本酒を攻めるマッコリ紹興酒
消えそうな六等星に鉤括弧
隙の無い卍構えのような人
哲学の道には傾いたベンチ
搦め手で来たぞ損切りされそうだ

残り福待つ八十七歳春

友達のぬくさふところあたたかい

日傘雨傘マスクに守られて生きる

記憶薄れて色褪せてゆく過去よ

隣国と折り合いつかぬまま余寒

敗戦の怒りポストの底で耐え

杖ついて白寿へ歩む影法師

猫の髭抜いて結論考える

石軽く蹴って夫婦になる兆し

ゴザの上でやさしい音で散るさくら

麻生路郎語録

豆秋が風のようにやって来て、「もうお目にかかれぬかも知れぬので暇乞いに来ました」という訳を訊けば、友だちに鰻を食べさせられ、今晚の十二時までが危ないと聞きましたからという。それからもう一年余りになる。

★

余儀なく鰻を食べさせられた艸染が一月半も過ぎて、怖々からだをひねってみて、「アア痛た、まだ生きてるらしいぞ」

（「川柳雑誌」昭和12年3月号「川柳横町」より）



句集の森

川柳句文集『地球の塵』

黒川紫香

旅はいいな いっぱいリンゴ生っている
 冬の寺子供四、五人遊んでる
 赤トンボ行きも帰りもついてくる
 石段の一步一步で紅葉踏む
 勝ったなど思うひと鞭当てながら
 三寒四温それぞれ出向く用があり
 夕焼けがきれいで土手に駆け上がる
 下町は屋根から笑い声がする
 橋渡る音で乗り越したなと思う
 寶石をいっぱい持っている宇宙
 春包むれんげたんぽぽハンカチに
 仁王さんの周りを蜂が飛んでいる
 すし巻いて母も出る気になっている
 立ち読みをしててくすつと笑う本
 遠雷にときどき山が浮き上がる

(平成11年2月10日 発行)

温故知新

田中正坊川柳句文集『ペンシル』から

進退は自分で決める硯箱
 敗戦忌カンナひまわり夾竹桃
 墓穴にも似た蛸壺を掘った日々
 蝸牛ひとすじの道遠くとも
 権力が常に恐れている事実
 王様の噴水が好き夏の雲
 王様の部屋には鍵がかからない
 玉碎の島を囲んで碧い海
 どこからか子供が湧いた夏休み
 惚けかけた兄とひととき血の絆
 戦前の物価 老母の記憶力
 虚飾には遠い神父の黒い服
 征服が押さえつけてる腹の虫
 美しすぎて花輪にはならぬ花
 遠き良き時代に酔うている寮歌
 曼珠沙華けんらんとして秋の章
 枯れ姿見られたくない曼珠沙華

水煙抄

川上大輪選

青森県 月波 与生

影までが妖しい仮面舞踏会
沸点に届かぬ愛が疼きだす
机上の空論追い掛けて楽しむ

大阪府 奥野 健一郎

卒業しますか爺さんでいますか
マスク取る中途半端な笑顔だな
まぐれすらない人生の飛型点
遡上せぬひとりぼっちの回遊魚
女房に好きな死に方など訊かれ
自己採点甘い辛いを生きている

大阪市 岡田 恵子

もう誰もガンバレなんて言ってこぬ
老いの坂みんな初心者初体験
運命にすべてまかせば気も休む
男なら出た所勝負わるくない
よく言うね世話女房にしつこいと
白だけがどんな色にも勝ってる

広島市 常國 喜好

ババ抜きのパバが私を離さない
孫からのテレビゲームの果し状
待ち受けの母の笑顔が常備薬
喜寿白寿めざし母娘の赤いバラ
生きる事飽きたと駄々をこねる母
御神籤は凶神様は知らんぶり

山口市 中前 幸子

裏切ったまま浮上せぬ深海魚
今更に虚構の家が懐かしい
消えそうな虹は渡らぬ偽善者よ

まわれ右したいと思う試験の日
すぐ答えられる人など信じない
街角のピアノが語る人生譜
妻の目のキラキラ光るときが好き
コンビニへ使い走りをする深夜
英雄の後に無数の人柱

明石市 瀬 島 流れ星

老域の時間はあつと二倍速
百態を演じ仮面の終電車

たればを並べ責任言い逃れ
久々の呼名呂律が回らない

酔ってない酔ってないぞとからみ酒
駄句だけど活字になると佳句に見え

門真市 坂 本 星 雨

精一杯生きて笑えと初日の出
善人の仮面が並ぶ初詣

ラーメンとカレー独りの三が日
線香の煙まつすぐ今日は吉

癌転移なし死神が遠ざかる
一つ捨て二つ捨て明日だけを見る

大阪市 阪 井 恵 子

初鏡映る素顔の福笑い
静かですあなたのないお正月

ひと恋し夕焼け小焼け口ずさむ
三日月が凍れる胸に突き刺さる

好き嫌いようやく言える今が好き
やつと得た自由はちばち歩き出す

尾道市 村 上 和 子

卓袱台を囲んだ頃の家族の和
美しい日本語がへんてこりに

母さんの声が聞きたい凹んだ日

人情が深入りをする島暮らし
独り居を支える産土の情
もう好きに生きてゆきます後期です

佐賀県 真 島 久美子

指先の一キャラットに軋むもの
柔らかい唇なにを間違えた

擬態するときの一途を月明り
隕石に値段がついている寒い

人間の食べ残しなど食べぬ犬
貧しさに虹が二色の国がある

大阪市 森 廣 子

新年の風深々と透き通る
デスタンス犬が私を誘い出す

跳びあがり乗れたらいいねふわり雲
飾るから心の会話通じない

しつかりと後ろの蝶子は巻いて置く
アサリのあぶく蝶のひらひら自己主張

伊丹市 延寿庵 野 鶴

愚痴いわずしかと支える土踏まず
地球儀の四季を剥ぎ取る温暖化

思い切り笑えなくなるデスタンス
美意識の所作に溶け込む矜り口

ほころびをつくらつているみつをの詩
命果てるまで私を演じ切る

松江市 中筋弘充

笑った日も泣いた日もあり介護終へ

口だけの親孝行も意味がある

どん底で押しももらった車椅子

バレバレの嘘も信じてくれた母

耳鳴りが大声出せと指図する

安来市 原 徳利

十個づつ輪ゴムで止める嘘の束

嘘つきの舌に舐めさすリトマス紙

不自由な自由ポツンと一軒家

棺から聞こえる母の子守唄

樹が育ち杜になるよう樹木葬

瀬戸内市 宮 宅 比佐恵

温暖化心の根雪溶けぬまま

許すこと覚え心に温い風

今すぐと脅迫のようコマーシャル

マスクとり弾むお喋り待つばかり

早すぎた切り札影が叱咤する

美作市 岡 本 余 光

衰える五感衰えない五欲

弱くなる五感補う第六感

大寒をぶり大根でひと休み

珈琲と匂集独りも悪くない

お守りの代りをさせる丸い石

広島市 小畑宣之

小事なら成行きまかせそれが良い

あれやこれ忘れて気楽ハッピーに

日々新たな尽きぬ疑問と好奇心

太り過ぎ野性忘れた猫が増え

人生は右往左往し前向きに

広島市 田 桑 恵 子

駅ピアノ音符が足を連れに来る

介護日誌呼び覚まされる母の影

席譲る勇気の声にありがとう

大岩で一服山の指定席

旅プランブレイキかける変異株

府中市 岸 田 武

お祈りをしない聖夜のケーキです

不覚にも寝ておりました除夜の鐘

参道に仕事始めの鯛焼き屋

待つとなく待っていましたこの賀状

やあやあと戯けたようなグータッチ

山口市 兼 崎 徳 子

食べる事さえつまらない独りぼち

つぶやきで波紋広がるネット界

冬雲に負けぬ気合いの受験生

副反応代理がいたら頼みたい

危機回避本音を隠すオブラート

松山市 郷田みや

せつかちも静かに待っている日の出

偏差値は五十でいいと柿を干す

会えないね会いたいねえとライン来る

会えるまでに温めておく予約席

いつの間にか定位置になるみかん箱

福岡県 本田 さくら

のど自慢あの歌わたし若かった

上手だね 絵をほめ孫は得意顔

さあ川柳熱いコーヒー飲んでから

りんご食う育てた人の顔うかべ

戦とはこうもむごいと孫たちに

宮崎県 恵利菊江

喧騒が都会の夜を締め付ける

冬のバラ生きる姿は負けてない

金魚の死いのちを学ぶ子供たち

嘘吐きの話日替りメニュー出す

割烹着着ると女は母の顔

宮崎県 黒木栄子

退院の母へ祝いのお赤飯

あくせくと気付いてみれば高齢者

後ろからページをめくる癖がある

長らえる命に感謝屠蘇を飲む

神様へ良き年ねがう老い二人

弘前市 小山内 真由美

雪雪雪止まらない雪かたづけ

一日中雪の話題で時埋まる

大変だね仕方ないよねついで笑う

ごくろうさまでも置いてかないで固い雪

九十歳が目の前なのになんのその

黒石市 石澤 はる子

ひとことに柔軟剤が染みている

寝返りを打つたび悔いが甦る

未知との遭遇丸ごと老いを受け入れる

年毎に雪は重さを増して降る

雪国に否応もなく鍛えられ

黒石市 北山 まみどり

宝物なんです趣味という手綱

足腰がよろける母と比べれば

齢とはこんなにもろいものなのか

母の身を案しながらもまだ頼る

いつまでも娘のままです

石川県 堀本 のりひろ

ほうれい線隠しきれない愛娘

玄関に花嫁ノレン笑顔撒く

涙腺がゆるみっぱなし披露宴

嬉し寂しうるうる霞む嫁姿

白無垢が滲んで見える末娘

岐阜県 喜多村 正儀

ひと仕事終えてやさしくなる利き手

終電は尻尾をだしたまま眠る

白線で走り出す人止まる人

弱くても攻めの形は崩さない

踝の高さで分かる幸福度

横浜市 加藤 佳子

3年目の恋ならいいがオミクロン

未だやれる雑事こなしてお正月

この人もそろそろ止める年賀状

第六波来ぬ間に祝う初句会

二年ぶり振袖跳ねる二十歳

名古屋 市 富田 末男

場の空気思い心で独り言

スマイルが風になっている場の空気

お手上げの前に力を足してみる

母さんの助言が更になる力

目的があるから夢に真向き合う

大阪府 大浦 福子

産声にさあトキメキの幕が開く

良かったと言える今年になるように

始めるに遅いことなど何も無い

ウエディングベル今日から君と繰るページ

始まりと終わりに世話になるオシメ

大阪府 高木 道子

風と共に改札を出る山の駅

雪は降る何も喋らず喋らさず

御守りより紅葉マークが効いてくる

背の丸さ似たり寄つたり同級生

分相応の諭えが好きな寺の寄附

大阪市 東 敏郎

新聞を広げる車内俺ひとり

アナログは息を継ぐには丁度良い

ワクチンの予約電話で日が暮れる

我輩は生きながらえた蟻である

一円が不足で戻るラブレター

大阪市 今村 和男

一年中おんなじ靴を履いている

温かい窓から覗く寒い街

だるまさんが転んだように沈む月

降る雪に唇合わず雪女

行く雲に一つはぐれて帰る雲

大阪市 大沢 のり子

娘から煮物のコツを仕込まれる

子の頭なでるいいことあるように

蛇口からぼとりさみしくなりました

古い二人静かにテレビ見えています

悩みなど何にもないと見栄を張る

大阪市 中村 峰子

派手好み地味に暮らして日がくれる

毎日が寄せては返す波のよう

寒くつていじけた暮らし夢しほむ

愚痴だらけ これじゃいけない出かけよう

新年だ笑い袋と大笑い

大阪市 樋口 眞

無事息災七草粥に願ひ込め

初釜の準備で妻は若返る

よく動きよく語らつてよく眠れ

無職だが気が多いので忙しい

水鳥も北風避けて岸の陰

泉大津市 助川 和美

マスク生活丁寧に描くアイシヤドウ

駄菓子屋で幼きころの自分知る

免許返納不便になった墓参り

鬼コーチャれば出来るを叩き込む

そうやねえ言うときばほほうまくいく

泉佐野市 樫葉 良子

叱らずに涙隠した亡母でした

素朴だが母の味する卵焼き

喧嘩して投げた言葉に眠られず

ショーウィンドウ憧れだけを持ち帰る

助手席でいつも居眠りするタイプ

柏原市 神崎 江

沈まないように自分に花を買う

初日の出日付け変わったただけなのに

運勢は大吉だったはずでした

淋しさの理由ほんとはわかつてる

走つてくれど姿は歩いてる

河内長野市 坂野 澄子

通い合う心に温い笑み交わす

丸い石蹴つても絡む悔いの文字

夢描き春待つ子等のランドセル

背筋伸び母百歳を生きぬいて

無一文それでもいいと燃えていた

河内長野市 穂口 正子

マスクマスクなんとシユールな世が続く

時空超えお話紡ぐ夢ん中

週末がのつべらぼうで歌わない

若い頃の余る熱量今あれば

溺れるほど飲んで騒いだ夢の様

豊中市 齋藤 奈津子

お礼参り気持弾んでお賽銭

気遣いが過ぎて迷惑お節介

近隣の知らぬあいだの家族葬

CMを待つて我慢のお手洗い

覗かれて平気なことを書く日記

豊中市 松田 蟻日路

凡庸で良かった好きに歩き行く
ジヨグの身に沁みる師走の通り雨
蕎麦食えば鐘が聞こえるテレビから
何が目出たい生きてりゃ年は流れ行く
出で立ちは速そに見えるスロージヨグ

寝屋川市 長尾 千賀

サイフォンの香に読みかけの本を閉じ
不都合は聞こえない振りメール打つ
想い出より思い出したくない話
煮凝りのようには溶けぬ蟻り
出かかった本音呑み込み茶を啜る

八尾市 田邊 浩三

恐いのはコロナか酒か妻悩む
除夜の鐘撞いてもコロナ出てきます
曾孫が押す車椅子で初詣
初詣馴染みの飲み屋皆休み
新年会孫に年玉もらう身に

神戸市 城戸 誓子

訪問にバツと笑顔の母可憐
もう一度しゃべりたい傾眠の母
消えそうに揺らぐ炎を繋ぐ母
元日も母は晴れ着に割烹着
物思い車窓過ぎ去る降りる駅

神戸市 米田 利恵子

静けさが似合わぬ焼き鳥の店主
おでん屋の味を真似てるつもりだが
欠席の返事三密から抜ける
疲れた日の鏡に何と母がいる
余命表を思うコロナの二年間

神戸市 みぎわ はな

十までは続かぬ老母の数え唄
無私の愛底無しの愛母の胸
子に詫びる亡母のようにはなれぬ母
わたし見て瞬かぬ星母の星
子ら知らず父と母との物語

神戸市 村松 久江

思い出を崩さぬように積み上げる
気のせいに出来ない事の多すぎて
溜息で心の内をそつと掃く
躊躇する夫の背中ドンと押す
時は今全速力で駆け抜ける

尼崎市 宗和 夫

払うほど煤も積もらぬ老いの家
年頭の誓いは何処 飲み納め
老い二人テレビゲームで年を越す
パソコンのモニター越しに屠蘇祝う
出さずとも届く賀状の有り難さ

伊丹市 岡村風琴

決断のたびに人間でかくなる

よく動くこの手この足感謝する

置き時計今日もだまって時刻み

やんわりとところが和むハーブティー

座禪草春の足音ひそと待ち

小野市 田中辰夫

みの虫のゲームに暮れる引きこもり

来年の運勢いかに新暦

どたばたと朝に指折り出る句会

一年の無病に感謝除夜の鐘

新カレンダーまずは記念日マーク付け

三田市 馬場貴美江

プライドを捨てて身軽に老いの旅

プライドをチョッピリ残し今生きる

どなたさま母の一言嘸然とす

雪の夜トナカイ待った幼き日

買い忘れ再びゆけば二割引き

三田市 森玲子

集合写真マスク外して皆笑顔

リタイヤ後今だ夢でも仕事する

出来た事できなくなつたこの辛さ

娘から頑張り過ぎず手抜きせと

これからも世話を掛けずに世話をする

三木市 山口ヨシエ

雑談に心ほぐれる旅の膳

音高く夜明けを走る小舟追う

小半時海を見つめる穏やかさ

今日もまた小さな波に身を委ね

風に揺れ情けに揺れて迷い道

和歌山市 北原昭枝

日本語をきれいに飾る五七五

友の顔思い浮かべる冬の雲

したたかに生きて女の丸い背

鍛えられ消しゴム丸くなってゆく

人生の節目ドラマはまだ続く

和歌山市 倉橋悦子

今を盛る器大きい方がいい

ふるい立つ程の刺激にまだ会えず

仮の世の港この身の置きどころ

主婦にない卒業証書定年日

夕焼けを見ながら今日を振り返る

和歌山市 定松宏枝

長生きはご免と言いつサプリ飲む

老体を騙し騙して日々過ごす

ビール飲む知らず知らず小指立つ

オミクロンまた出不精に輪をかける

マンネリの食器を替えてリフレッシュ

和歌山市 佐藤 まき

若見えにマスク一役お気に入りに
新春の願い日常取り戻す

炬燵から手も足も出ぬ今日の冷え
しょうがない猫と炬燵で丸くなる
あと少しの余生に夢を無くさない

和歌山市 西川 千鶴

ありのまま曝け出したら馬鹿を見た
遺産分け猫も杓子もしゃしゃり出る
名無し草どっこい今日も根を伸ばす
旅行には誘われません雨男
雨しとど心にきのこ生えて来る

和歌山市 まつもと もとこ

プライドが素直に負けを認めてる
天国にちよいと知ってる人がいる
モツアレラチーズは伸びて主張する
天国か地獄の二択なのかしら
定年を決めずに生きる感謝して

奈良市 東 定生

すぐ来ると世間を揺する地震予知
実習生に支えてもらう野良仕事
収束は任せてくれと吠える虎
モノクロの景色に似合う寒椿
徘徊と靴だけ違うウォーキング

生駒市 饗庭 風鈴

髑髏の目生きてたころは笑つてた
目が合ったばかりの心をわしづかみ
一枚の絵一本道のその向こう
帰ろうか遠くて近いあの星に
ふるさとは地球あなたはどちらから

鳥取市 上山 一平

門松の葉牡丹脇で纏め役
水溜りひよつと飛び越え九十坂
作つても病に勝てぬ未来地図
淡雪に南天跳ねてわが世界
悔るな雪は鉄路も麻痺にする

鳥取市 大前 安子

寅年を元気に生きるスクワット
ぐっすり寝初夢どこかいつちゃった
ありのまま見せてもいいね子は育ち
集まればそれぞれ回る走馬灯
いつの間にはるかな八十路身に宿る

米子市 川本 美津子

雪道は足跡だけがついて来る
良き思い出は豊んでしまう胸の奥
成長期孫の古着をバアが着る
美人に見える鏡があれば買いに行く
散歩道なじみの犬がしつぱ振る

松江市 相見 柳歩
なわとびだシヨパンの曲が終わるまで

楽しいよ君と出逢えてからずっと
人生の波紋もやがて夢となる
散ることは当然知っていて咲かす

今治市 安野 かか志

五分刈りの禊で風をやり過ごす
議員さんの復活劇を見る比例
自由形で定年後をやっている
寒風をまとう同行二人旅

津山市 高橋 由紀女

コ罗纳禍の計画倒れ返す波
外出を控えた靴がきつくなる
一杯の水平常心を取り戻す
逢えぬ子へ積もる話の長電話

広島市 松尾 信彦

良い噂尾鰭をつけて送り出し
断捨離へ風水もどき口を出し
巢ごもりで父の奥儀が光りだす
内定に弾ける笑顔LINE飛ぶ

尾道市 小川 道子

手に馴染むペン一本の幸せ度
読み書きの中にヒントが見え隠れ
ためになる話の好きな膝小僧
たいていは答をくれているスマホ

三次市 伊藤 寿子
一番の客が他界をされていた
命あつての体と愛でて生きるだけ
声も出る暗算はやいまだ出来る
長生きの金魚お前も生きてくれ

竹原市 若年 幸子

眉きりり描いて弾む退院日
雪しきり戻れぬ子等へとぶライン
和箏笛へ二十歳の希望眠つてる
値上がりの続くキッチン思案顔

竹原市 土井 輝恵

奨学金返済虎の子が走る
まん延防止がんじがらめの小槌なり
幼馴染み二通混ざりし年賀状
この額の満期来るまで死ねないぞ

高知市 三谷 松太郎

手鞠やめもうお帰りよ良寛爺
業平氏都鳥見てまた涙
蕪村おじ長い堤をのたり行く
これ蛙それ跳び込めと筆をもち

大洲市 花岡 順子

ふところにもっと喋らす鉛を持つ
目立つから標的にする青りんご
訂正の出来ぬシナリオ生きている
はずむ弾むまだスキップが止まらない

唐津市 前田 廣幸

株式も右往左往させる変異株
ふるさとの山は猪放牧地
何欲しい慌てんぼうのサンタさん
心まで灯るイルミの十二月

沖縄県 禰 毛モト

新年はスマホメールとスタンプを
渋滞に巻き込まれ我が家遠き
物事は議論するより実行を
フクローの首回し真似出来ないね

沖縄県 宮 すみれ

青空をぐっと引き寄せあのねのね
手入れた庭の神様えびす顔
つらすぎて亡き夫にも小言言う
良い風にいまだいまだとフラ踊る

富士見市 中島 通則

半分はあまり知らない流行語
何もかも不要不急で過ぎた日々
さつきまで出ていた名前出てこない
終活でも始めてみよう暇だから

横浜市 巖田 かず枝

コロナ禍に子等はおせちを持ち帰り
節分に大笑いして鬼払う
恵方巻き額と入れ歯にご用心
書き残す事の多くて悩ましい

東京都 高岡 弥生

食べ物で身体の変化実感し
量よりも質にこだわる歳になる
手料理も今度は野菜育てるか
骨盤の歪みはずでに六十年

豊橋市 小松 くみ子

悪いもの疑いあれば即除く
たればの話はしない過去のこと
測るたび増える体重減る背丈
朝ドラの時間経過が早すぎる

豊橋市 西郷 紀美代

劣等感足に絡んで進めない
やりたがりやらせてみせる好奇心
検査値に一喜一憂するくらし
肩凝りにこづかいで釣る肩たたき

京都市 北野 クニオ

オミクロン世界経済かき回す
古里に着けば昔の顔となる
師走入り妻に急かされ窓掃除
年賀状今年限りと書いて置く

八幡市 武田 悦寛

取り替える避難袋の缶ビール
負の記憶見え隠れする日記帳
断捨離を忘れ煩惱顔を出す
一日の悔しさ丸め洗濯機

大阪市 尾崎 文子

マイナンバー信用出来ぬ国の策
オミクロン油断の政府すりぬける

戦闘機何があっても買う政府
初詣除菌しました良いですか

大阪市 折田 あきこ

たっぷりのお湯で瞑想一時間
君が待つ世界へ壁をつき抜ける
自慢話聞きたくなくて洩らす咳
天国へ行く階段はここですか

大阪市 阪本 秀子

下戸だからおでんに熱燗はいらぬ
凜と澄む夜空の星をラッピング
真実に辿りつけないからへたる
胸奥に天の父母生きている

大阪市 前川 善之

老人は誤嚥注意のお正月
介護風呂入れば心イキイキと
障害者努力大事と精を出す
新年もおせち食わずにカップ麺

大阪市 松田 聡

筋力は落ちる気合はあるけれど
チンと鳴るトーストの香朝を呼ぶ
微積分何かの役に立ったかな
岩田帯今も昔も戌の日に

堺市 古川 光雄

悪筆のラブレターでは恋もさめ
国政も好きか嫌いで人事決め
ごった煮の能書きばかり決めぬ国
ミスをしてべろを出してもマスク中

ネットには詐欺師うようよお怖い
苦い過去肥やしに伸びてくる新芽
人間の力引き出す褒め言葉
薄味に慣れて素材の味を知る

池田市 上山 堅坊

赤ちゃんはお腹で歩くちよろちよろと
絵手紙のかほちやの横に風邪ひくな
腹の虫老いたら時刻狂い出す
惚れた弱味敷かれたままで四十年

池田市 倉本 一弥

吊るし柿日々小さくなる老母のごと
花柄を着て会いに行く月命日
月命日二日違いの父と母
エアベッド極楽やわと母は逝き

交野市 山野 双葉

寒い夜豆腐の湯気であたたまる
年賀状面倒だけどやめられぬ
正月に溜めた栄養腹まわり
お重並べ朝から飲めるお正月

吹田市 岩口 のぞみ

吹田市 西沢 司郎

難聴の耳が待ったを繰り返す
待ち伏せに遭って戸惑う長話
知らぬ間に先進国の落ち零れ
家までは送ってあげる酔ってても

高槻市 鳥居 宏

涸れてゆくグラデーシヨンの茜雲
長長と思ひ出話コロナの夜
人間の悲しい業かいがみ合い
虎にしては力の抜けた年賀状

高槻市 三谷 白黒

三千円大金持の夢を見る
寝てるのがラジオ体操よりもい
人生に遅過ぎることはありません
アンコ餅ギョウザみたいになりました

寝屋川市 坂本 ミヨノ

寅年息子弱気で困る強い母
金銀枯葉親子で踏んですべりこけ
ケーキ並べ極楽家族楽し笑い
あつあつおでん玉子大根夢でうま

羽曳野市 黒木 ひとみ

落葉し身軽になつて山眠る
息災を願う柚子風呂呂香も清し
凧にペンギンの如歩く人
餅つきの声賑やかに年の暮れ

東大阪市 秀 彦

コマージュル見たくないのでまたビデオ
ラインでも建前ばかりの本音です
古稀過ぎてどうしてないの厄年が
虎年もフィーバーしないタイガース

兵庫県 太田 としお

一日を感謝で終えるありがたさ
年末は喪中ハガキが束になる
老い進む父母の苦勞が分かり出す
選挙戦政治は常に動いてる

神戸市 石川 克美

お年玉あげて若さをもらい受け
水仙の香りゆかしく迎春を
咲く花にきれいなねと声かけてみる
初夢はいつになったら見れるのか

芦屋市 荒牧 孝子

思いやり足せば会話も丸くなる
本音を言えば文句いっぱいありますよ
足し算より引き算するも生きるコツ
感謝状あげたい母はもういない

芦屋市 新阜 義明

腰痛も作る川柳負けはせぬ
今日もまた値引きシールへまっしぐら
一票の重みとこで何グラム
生きて行くなくてはならぬ川柳が

尼崎市 清水 久美子

アウトドア派にはしんどい引き籠り

ささやかで精が付かない一人鍋

手土産の有無で待遇決められる

独り者同士引っ付き虫になる

三田市 幸田 厚子

よき日本四季があつてのカレンダー

がらがらばん幸先うれし赤い玉

乗車すぐスマホ猫背の並ぶ席

田舎町銀座はあるがネオン切れ

丹波篠山市 河南 すみえ

輝いた時があつたね嫁いだ日

なぜか好き荒れ地に咲いた鬼あざみ

郷愁をさそう夜汽車の軋む音

年寄りが寄ればこの村好きという

丹波篠山市 澤 良子

関節の曲がりをかばう守り指

歯の治療次から次へ渡り虫

テレワーク机とバック気にしつづ

豊作の柚子ジャムみなに分けました

西宮市 高橋 千賀子

丹波まで黒豆そばを買いに行く

除夜の鐘きこえなくても年明け

万札で開けてがっかり福袋

孫受験だあれも来ない寝正月

西宮市 藤原 みよし

赤飯を一人炊きつつ誕生日

新米におかわり三度菜はなし

長生きは嫌と言いつつスクワット

前空き家 後も空いた次は何処

和歌山県 三枝 眞智子

少年の視線に大人うろたえる

心には余裕のなさが見え隠れ

堂堂とふるさと訛りUターン

悪口をいう後ろめたさへ向かい風

和歌山県 鍋嶋 澄子

赤くあかく水平線へ夕日おち

リング剥くきれいな肌に嫉妬する

おいでやす呼ぶよコスモス花さじき

解つてる止どめの言葉加齢です

和歌山県 福島 一雄

豊作のみかんのおかげ医者いらす

寅年だ吠えるぐらいはやれそうだ

10円で神に延命祈る欲

少子化で日本が徐々に衰える

岩出市 村中 悦男

落葉炊き通りがかりも仲間入り

青い地球濁色にするコロナ株

ホームの妻を偲びながらの一人酒

妻の新年ヘルパーに初電話

奈良県 室田 行久

終電車ガタンゴトンの子守歌
字余りにスマホで探す同類語
肩書を会社に返し一里塚
生き甲斐はテレビとベット妻元氣

奈良市 尾畑 なを江

雨降ると私も猫もねむくなり
人生も運と不運が織りまざり
冬の庭紅さざんかが咲きほこる
グータッチも良いがおじぎさまになる

生駒市 児玉 規雄

アマビエも効かぬコロナの第六波
鮮やかにバトンタッチの新コロナ
通院の予定が目立つ新暦
末は医者子の夢よりも親の夢

鳥取市 山野 すみれ

同じ空カラスもサギも羽広げ
面会の時計の針が走り出す
ワクチンを打って続きの夢を見る
無駄遣い時には自粛憂さ晴らし

倉吉市 伊藤 嘉昭

あの橋をこえれば僕はおじやま虫
愛してる言葉なくても眼でわかる
花の咲くその日はいつに妻の病室
春がくる笑い上戸に僕もなる

倉吉市 堀 かずこ

悩むまいひと夜ねむれば明日は来る
頑張った今は歩けるリハビリで
誰でもが今年こそはと辛願う
今日の日を大事に生きる笑顔でね

倉吉市 若松 由紀子

毎日を全力投球生きる老い
人生に忘れる事も生きる道
友と行く湯の宿若き日に戻り
八十路坂笑って喋る友がいて

倉吉市 宮田 風露

あの世から酒所望する夫の声
正月はあの世も年をとりますか
唇がたまには紅が欲しいとか
初日の出雪に邪魔され拌めない

境港市 中井 虎尾

寅年は虎の賀状のコンクール
お互いに元氣ですかと賀状書く
可愛いと虎のかわりに猫なでる
空晴れて気流と遊ぶ初トンビ

ひとこと募集

一行15字 25行まで 採否は編集部に一任の事

西尾葉句集『水鶏笛』くいなぶえ

コート着てからまた話しだす女客
誘惑にのりたしヒモが怖いなり
女連れ一人 はなれた器量よし
女連れよう肥えたのがボスらしい
女連れたけのこで行く打ち合わせ
知らん顔して毛糸編みつつけ
ゆうべ来たらしい吸殻捨てている
訴訟などおこして妾老けている
おだやかに話して御寮人良い度胸
シヨップガール大阪辯が出てしまい
袖丈に娘時代をなつかしみ
剃刀沙汰の女が通る春の雨
良縁かどうか嫁ぐ身がいつち知り
かき眉毛みみずくという顔になり
占いにわてもわてもと女連れ
二号と後妻貯める話しに馬があい

独占したかったとB・G穴をあけ

挨拶は指のダイヤを見のがさず

夢のような話に女ついてゆき

これが義務ですがなど女嬉しそう

「恋」

レジスタープロフィールだけの位置におり

恋人が中風筋とは面白し

それからの言葉手摺りで待っている

恋人は刺客のようにより添うて

会うたのも中の島別れたのも中の島

愛人として角砂糖の数も知り

四十の或日の恋は落葉踏む

相聞歌さてさて七十三とかや

四十の恋は手形を割って逢い

逃げ腰で四十の恋をしてるなり

暇と金 金と暇とが食い違い

折あらば隙あらばと中年のいやらしく

萬葉は綺麗に妬いているのなり

英語 de Senryu ⑫

麻生路郎句集 『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代 Kim Horne

凧あがりきつて 親子が 口をきき

after the kite rises up

father and son

start to talk

ナフキンを 小さく畳む女客

a lady guest

folds her napkin

impossibly small

kite 凧 rise 揚がる start 始める talk 話す guest 客 fold 折りたたむ
napkin テーブルナプキン impossibly ありそうにない small 小さく

～リバーウィローのため息～ ⑫ 蕪村編『俳諧玉藻集』に収録された遊女の句(1)

前野良沢、杉田玄白による『解体新書』が刊行された安永三年(1774)に、伊勢園女、大津智月ら古今の女流俳人118名の発句449句が蕪村編『俳諧玉藻集』に纏められました。中には尼の句、人妻の句、遊女の句らも加えられ、序は加賀の千代尼、抜は江戸の田女が記すなど、当時の女性の文芸活動が見聞される資料です。今回はその中の遊女の句を選び、「英語ハイクを楽しむ会」所属の小泉裕子氏と英訳を試みました。

色紙や色好みの家に筆はじめ	利 生	
<i>colored paper, / fellows like goats use /</i>	<i>New Year's writing</i>	<i>Riu</i>
我のせて廓を出よいかのほり	た ま	
<i>flying kite, / take me out of / this red-light district</i>		<i>Tama</i>
おもふこと伏籠にかけて朧月	のざと	
<i>my wish hidden / over the basket for incense burning, / hazy moon</i>		<i>Nozato</i>
柳まげ去年の男のとつた髪	唐 士 (土)	
<i>hairdo of Yanagi topknot, / my love last year / used to comb</i>		<i>Karato</i>
恋死なば我塚でなけ郭公	奥 州	
<i>if my love ends / chirp at my grave / dear cuckoo</i>		<i>Ohshu</i>

なくしたものの得たもの

八木千代

寒気団が下りているので、今夜は冬のように寒々とした部屋にいます。縁の戸を開けても虫の音もなく、虫たちも残りの日々を知って昼のうちから枯葉の下や柔らかい土をさがして眠りの支度にとりかかっているのでしょうか。過ぎてきた夏や春をなつかしむように、こんな夜は来し方が偲ばれてくる、そんな秋の灯といいます。

ずいぶんとなくしたものも多かったような気がします。四十代くらいまでは足し算ばかりとも思いますが、ついでに、引き算の峠にさしかかった別れ道ばかり。岐ればかりでなく、体力その他すべての私の外装は剥がされて、皆ひとつ残されることもないと思いつめたのもその頃でした。

そして今、こうして書きならべてみても、じっくり考えてみたら、失うべくして消えたものばかり。ただ認識が足りなかったのと、見つめるものをみつめていなかったただけだと思いつているのです。

年齢的には、晩秋ともいえる今の私の季節。つらいと泣

き明かしたあの頃の重荷の数は、その荷に耐えて負いつづけてきたことで、却って若いときにはなかった力を感じさせてもらい、心の髪を深めることになったようです。

一歩、一歩、衰えてきた足を曳きずりながら旅をつづけているうちに、四十より五十の坂で、実りのある風景がひらけてきたような実感をつかまえることができました。

ありがたいものですね。神さまは老いというきびしい冬の視野のかわりに、大切なものを大切にすることができるといふ素晴らしい眼を下さいました。

かたちあるものはみんな減びてしまうのですが、時間をかけていっしょけんめい旅を続けているというだけの毎日ののに、一夜眠り、何こともなくふつうの朝を迎えるたびに、いのちの深まってゆくのがわかります。心がやわらかくなつてゆく途中だということも感じられます。この感触を六十過ぎてはじめて握ったのですから、この先、七十になつても心を耕してさえいれば、掌から放すことはないだろうと思われれます。

それにつけても、私のような我儘な者に辛抱強くこたわつて、行先の明りまでくださろうとつき合つて頂ける「川柳さん」。その愛に応えて、残りも明るく生きてみるつもりです。

(平成元年十二月号 目次下より)

誹風柳多留一二篇研究 19

伊吹和男・高野範雄

山田昭夫・小栗清吾

細井龍夫

清 博美

146 たはこ屋じやないかといふとけさич切

高野 「煙草屋」は、煙草屋に装束して、吉良家に入入りした赤穂義士間十次郎のこと。「袈裟に斬り」は、一方の肩から斜めに他方の脇の下に向かつて斬りおろすこと。

句は、吉良の家来が間十次郎の姿を認め「お前いつもの煙草屋じやないか」と、思わず声をかけると、間十次郎は、吉良の家来を袈裟斬りしたというのである。

雨譚註は「吉良の家来」。

うぬめ八昼の煙巾やと渡り合 五〇10

本望さ間が鐘は赤穂也 五〇31

小栗賛。いづれフィクションだろうが、間十次郎は、たばこ屋説の典拠が知りたい。それまでは、間十次郎の句とはしない。

細井 「江戸川柳で読む忠臣蔵物語」（北嶋広敏著・グラフィ社）に、「……十次郎が煙草屋になりすまして吉良家に入入りし、敵状を偵察したといわれている」とあり「それを裏づける確かな証拠はない」とあり、フィクションだとしておけばいいでしょう。

清 同。フィクションに過ぎない。

144 泣なからまなこをくばるかたみわけ

高野 「目を配る」は、注意して方々を見る（日国）。

見た目は悲しそうに泣いてはいるが、目は形見分けの品定めをしているというのである。

かたミ分ケなき出スやつがたと取

明元松 4

なきくも能方を取るかたミわけ

天二327

山田 賛。人間の心理をよく突いた句ですね。清 賛。

145 はやりいしや乗ってにけるてひんがよし

高野 「流行医者」は、よくはやる医者はい

うが、流行医者かならずしも名医・良医ではなく、

流行医者世事敬はくを二味加へ 一五九23
匙で調合することよりもお世辞や愛嬌をふりまき、病人や家族の機嫌を取らなければならぬ。流行医者になるのも楽ではない。

流行医者が見立て違いをして患者を殺してしまつても、駕籠に乗つて堂々と帰るから品よく見えるというのである。

逃るにも四枚でかける流行医者 一四四12

乗物へきつい山師とゆびをさし 明元鶴 1

山田 賛。そしてますます流行るのです。

小栗 賛。はやり医者が駕籠で走り廻るとい

うパターン句の一つ。逃げる時も駕籠とい

清 賛。

147 もふちつといのると塔は又たおれ

高野 「浄蔵法師」は、平安時代の三善清行の第八子……伝説にとむ人物で、天曆年中に京都八坂寺に泊まった時、八坂の塔が傾くのを見て、呪術で元に戻したという（川柳大辞典）。

句意は、浄蔵法師の折りで八坂の塔は元に戻ったわけだが、もう少し折ると反対側へ傾いたであろうというのである。

寐る新造浄蔵貴所が祈ッても

八四三五

浄蔵は塔のねむりもよくさまし

九四四

山田 賛。雨譚註「塔」。

清 賛。

148 取りかちとよばつてお手をく也

高野 「取り舵」は、船首を左に向けるようにする時の舵の使い方。転じて左舷（「広辞苑」）。

句は、船頭が「船が左に曲がるから手を出していると危険ですよ」と、船頭が客に注意している光景である。

とりかちをしなとおとり子声をかけ

安元松4

とりかちだべらほうめがとちよきゆるる

安元松2

山田 賛。ただこの「取かじ」にはナゾが込

められているように思います。つまり、柳橋から大川へ、又、大川から山谷堀へはいずれも「取かじ」で、この舟は吉原へ行く猪牙舟ということを示しているのではないか。

小粟 同右。大川から左折して山谷堀に入り、舟を岸につけるので、手を出していると危ないよといっているのだと思う。

清 同。猪牙舟で山谷堀へ。

149 江戸のまん中へきんそつ二人り出る

高野 「金創」は、切り傷。刀傷のこと。金は刀のこと（川柳大辞典）。「江戸の真ん中」は日本橋のこと。

処刑者の晒し場は高札場の正面、日本橋南詰東方の空き地にあり……特に心中未遂者は、その男女を縛めて、刑場の苦小屋の前へ敷いた藁の上に正座せしめ、三日間晒した後、人別帳から削られ、非人頭の手に渡されて、いわゆる小屋者（非人）に落とされたのであった（「江戸文学地名辞典」）。

句は、刃物心中で死にきれなかった二人は、日本橋に晒されるといのである。

日本はしばかをつくしたさし向ひ

明六松2

死すべき時にしなされハ日本はし

安一智1

清 賛。

150 和哥の家とて御預ケも十七字

高野 大石義雄以下十七名が細川家に預けられた事をいう。和歌の家とは歌人細川幽齋の子孫であるからということであつたのである。

発句ほと仮名を預ケる和哥の家

三三三

血たるまを十七人か寄てほめ

安六仁一

山田 賛。細川幽齋は古今伝授でも知られる。

清 賛。

151 そのくらさ早太さくらにつつかゝり

高野 「早太」は、源頼政の家臣。紫宸殿に出没した怪物鶴を取り押さえたことで知られる。「鶴」は、源三位頼政が南殿で射落としたという怪物。頭は猿、体は狸、尾は蛇で、手足は虎のような獣。「平家物語」〈巻四〉に詳しく描写がある（川柳大辞典）。

句は、黒雲一むら立きたり、御殿の上にお

ほひたりという真の闇、紫宸殿の前の左近の桜、右近の橋とあるが、左近の桜に突き当たつ

たであろうという想像句。

清 賛。

愛染帖

新家 完司 選

(投句262名)

対向車疲れてますね大欠伸
(評) 倉吉市 大羽 雄大

せずに休みなさいよ!」と伝えられたらいいのだが。川柳で鍛えた観察眼が捉えた一句。
西予市 黒田 茂代

美しく見える姿勢はくたびれる
(評) 顎を引きスツキリ背筋を伸ばした、年齢など感じさせない美しい姿勢。ずっと維持したいのだが、これがなかなか難しい。

心臓に異状はないが気は弱い
(評) 豊中市 松田蟻日路

だが、すぐにドキドキするのは心臓ではなく、少年のように優しいハートの所為らしい。
和歌山市 まつもとともこ

魂は歳をとらずにいるらしい
(評) 肉体が経年劣化するのはやむを得ないが、臓器ではないハートは、心がけ次第で百年経ってもブルブルのピッカピカである。

裾上げとボタン付けならまだ出来る
(評) 高槻市 島田千鶴子

とそれさえ出来なくなる。炊事洗濯そして裁縫など、細かい手仕事は総てボケ防止だ。
尼崎市 宗 和夫

正直に生きると他人を傷つける
(評) 正直は美德ではあるが、言うべきことと押し殺すべきことを心得ていないと、他者の傷を暴いて悲しませることになる。
福井市 伊藤 良一

取り敢えず先に笑おう初対面
(評) 初対面で緊張するのは持つて生まれた防衛本能。笑顔はその警戒心を解いてくれるが、ニタニタ笑い過ぎると怪しまれる。
貝塚市 石田ひろ子

自粛して昨日揃えたままの靴
(評) コロナ禍の所為で自粛続き。玄関に揃えた靴も寂しそう。たまには人通りの少ない裏通りとか公園に連れて行ってやろう。
鳥取市 副井ゆたか

ワクチンで老いの進行止まらぬか
(評) ウイルスに対抗するワクチンなどではなく、iPS細胞による老化防止策。しかし、二百年も生きる飽きてくるのではないか。
大阪市 高杉 千歩

人生の放課後車椅子がソファ
(評) ドラえもんの「どこでもドア」もい

いが、人生の放課後にある「どこでもソファ」も魅力的。体験者の実感は説得力がある。
堺市 坂上 淳司

「フロメシネル」こんな無口が居た昭和
豊中市 齋藤奈津子

伝言板あった昭和の待ち合わせ
松江市 中筋 弘充

正月は兎追つてた昭和の子
箕面市 中山 春代

初詣で人には見えぬ紅をひく
寝屋川市 長尾 千賀

肩並べ願ひ別々初詣
米子市 伊塚美枝子

お賽銭はすみましたと神に告げ
仙台市 月波 与生

賽銭に今年も札は投げられず
池田市 奥園 敏昭

祖父母近き小振りになった鏡餅
鳥取県 門村 幸子

餅太りしてもかまわんお正月
三田市 尾崎 一子

猪鍋を囲む正月悪しからず
羽曳野市 黒木ひとみ

年神に屠蘇を供えて幸願う
神戸市 敏森 廣光

元日にお尻のネジを巻いておく
鳥取県 斉尾くにこ

新しい暦にまずは予約済み

朝ぼらけ小豆も芋も粥にする
神戸市 富永 恭子

豪雪に手足心が痛くなる
倉吉市 岡崎美知江

寒いときに死なるといって笑い合い
尼崎市 山田 耕治

温かさ感じるために冬はある
神戸市 城戸 誓子

肉と魚交互の鍋で冬を越す
奈良県 渡辺 富子

午後からは雨うどん粉をこねている
大阪市 大沢のり子

乱切りの大根と煮る寒の餅
弘前市 高瀬 霜石

嬉しいとグラスがスツと前に出る
できちゃった婚に賞品あげましょう
大阪市 折田あきこ

うわさ話広げてまわるゴムボール
豊橋市 小松くみ子

鳥たちもすっぱいミカン食べ残す
府中市 岸田 武

サングラス似合うお方で元女将
腹立ちが笑顔になれば要注意
交野市 山野 双葉

三月ぶりジャケットを着て転送す
出戻って来たたとナースにからかわれ

初夢は宇宙旅行のくじ当たる
東大阪市 佐々木満作

去年よりカラフル孫の年賀状
海南市 小谷 小雪

神様へ小銭ある時まいります
芦屋市 竹山千賀子

頼られて俄然張り切る年男
米子市 野川 宣子

暖かい部屋で見る雪美しい
鳥取市 岸本 孝子

ピギナーズラックは最早期限切れ
大丈夫ブルトップなら開けられる
三田市 堀 正和

戒名はあるがお父ちゃんお母ちゃん
からつぽの会話続けるテクニク
榎原市 居谷真理子

面長にあこがれている丸い顔
香芝市 山下 純子

だんだんと演歌が好きになって古稀
福磊落落ほくのことだと思えます
岡山市 丹下 凱夫

三が日過ぎたころから二日酔い
鳥取市 田賀八千代

背中にかイロ貼り合う時はいい夫婦
退職すれば孫のお抱え運転手
大板市 島田 明美

三つほど聞き逃したか除夜の鐘
柚子風呂で母を洗えば柚子になる

何あろうと底抜けに明るい夫
奈良市 加藤江里子

飼い猫よ今年もどうぞよろしくね
唐津市 坂本 蜂朗

病院と妻に生かされ積む馬齢
背伸びした計画ちよつと痛む腰
弘前市 小山内真由美

ため息を聞かれそうです今日も雪
鳥取県 竹信 照彦

大雪も子や孫が居て楽隠居
佐賀県 真島久美子

唐揚げのことなど思う半跏趺坐
川西市 大坪 一徳

寝る前に明日一日を予習する
西宮市 福島 弘子

誘われて調子に乗ってフラダンス
横浜市 菊地 政勝

喋らずに居れぬ十万当たりくじ
大阪市 岡田 恵子

百歳が雀卓囲むケアハウス
鳥取市 谷口回春子

農道のスーパーカーは軽トラだ
岡山県 田中 恵

夫婦間愚痴が流れるだけの溝
札幌市 三浦 強一

物忘れあつたりまえと歳が言う
明石市 梶谷 和郎

日向ぼこ漉を拭いて今日終わる

三原市 鴨田 昭紀
遺伝子が描いたそっくりの輪郭

神戸市 能勢 利子
ジグザグに歩いてやつと一万歩

堺市 村上 玄也
感情移入し過ぎて聴きづらい十八番

東京都 川本真理子
はぐれたらじつとしてと子の教え

三原市 笹重 耕三
貧乏のなんとかなるに要る覚悟

河内長野市 穂口 正子
夫退院ちよつと仲良くするつもり

豊中市 水野 黒兎
壁や柱スポンはくとき頼るもの

岡山市 大石 洋子
身構える性分猫に嫌われる

唐津市 仁部 四郎
お仲間猿の名残りでボスが要る

大阪市 大川 桃花
地図見たら余計に迷う地図音痴

米子市 竹村紀の治
プライドを捨てると治る偏頭痛

松山市 柳田かおる
どう向きを変えても正直な鏡

藤井寺市 鈴木いさお
忙中に閑爪を切り鼻毛ぬく

大阪府 大浦 福子
ミニマリスト想い出邪魔しはかどらぬ

大阪市 江島谷勝弘
チン料理日に日に進化旨くなる

大阪市 森 廣子
理想とや ままにならない目玉焼き

松江市 石橋 芳山
アバウトでいいのに肉の焼け具合

土佐清水市 辻内 次根
一本が千円蟹の脚を食う

豊中市 きとうこみつ
身体に悪い競技たくさんある五輪

神戸市 興水 弘
夫婦カレッジ卒業式は永遠に来ず

和歌山市 柏原 夕胡
ゴミはみな自分の家に捨てなさい

川西市 山口 不動
カルチャーに黒一点でやめられず

大阪市 内田志津子
今更とこれからでもが聞き合おう

寝屋川市 廣田 和織
ニワトリと卵みたいな人と神

鳥取市 倉益 一瑤
ひるあんどんみたいになって生きている

松江市 榎瀬みちを
土性骨少し落ちて骨密度

大阪市 宇都満知子
今日の夕陽はピカイチのアーティスト

弘前市 稲見 則彦
ロウソクとマッチはいつも非常用

大洲市 花岡 順子
マネキンになれぬスタイルでも試着

大阪市 小野 雅美
モデルと同じユニクロ買ってみたけれど

奈良市 大久保真澄
絞めつける下着で無呼吸になった

熊本市 杉野 羅天
同じ場所同じ枯木に同じ鷹

箕面市 酒井 紀華
あきもせず恋していますマイウエイ

唐津市 山口 高明
父上に見せてご覧と父を立て

沖縄県 禰 モモト
花園を終の栖と逝く卒寿

鳥取市 岸本 宏章
歳だけは誰も辞退はできません

大阪市 磯島福貴子
防寒着まとったベット着心地は

高槻市 片山かずお
ほうとそれをでを連発させて喋らせる

鳥取市 山野すみれ
居心地のいいこたつにはいつも負け

神戸市 山口 光久
泥船もあなたとならば心地好い

柏原市 神崎 江
知りました真の空腹断食で

大阪市 平井美智子
賞味期限切れてはいるが大丈夫

越谷市 久保田千代
尖閣を虎視眈々と紅い旗

大阪市 樋口 眞
敵基地の攻撃だけで済みますか

沖縄県 宮 すみれ
海人も多量軽石四苦八苦

大阪市 奥村 五月
宇宙では飛び降り自殺浮いて無理

豊中市 上出 修
クオーツに負けない僕の腹時計

鳥取市 前田 楓花
「おいしい」とマグロを語る小学生

大阪市 田中ゆみ子
今日一日誰にも会わず目刺焼く

八幡市 武田 悦寛
本棚にポロポロ順に並ぶ辞書

三田市 多田 雅尚
常用漢字だけしか読めぬ語学力

大阪市 山本加お里
元旦にまず川柳で気合い入れ

羽曳野市 山岡富美子
賞味期限伸ばしたいから句を捻る

大阪市 古今堂蕉子
子に孝行食べて歩いて句を作る

京都市 清水 英旺
恐れ多くも哲学の道で川柳する

東大阪市 北村 賢子
しみじみと川柳してて良かったわ

富田林市 山野 寿之
武器のないコロナが挑む世界戦

羽曳野市 吉村久仁雄
生き急ぐ癖をコロナにつけ込まれ

吹田市 西沢 司郎
勲章を受けたつもりでする接種

大阪市 岩崎 玲子
出来ぬ事みんなコロナの所為にする

河内長野市 辻村 ヒロ
自粛中人恋しくて長電話

防府市 坂本 加代
終息の期待外れてオミクロン

西宮市 福田 正彦
地団駄を踏んでも消えぬオミクロン

塩壷市 木田比呂朗
まだ出るなジツとしてろとオミクロン

高槻市 初代 正彦
オミクロンのいけず日程わやにする

広島市 岸本 清
円満の秘訣ソーシャルディスタンス

岩国市 上村 夢香
カラオケの披露はまたも無観客

米子市 池田 美穂
診察日換気が効いて風邪を引く

西宮市 高橋千賀子
口ほどは物は言わないマスクの日

河内長野市 梶原 弘光
マスク慣れたらうか取ると恥ずかしい

米子市 成田 雨奇
正月は韓国を食べ酒を酌む

和歌山市 北原 昭枝
呑兵衛に七草粥が胃にやさし

高槻市 松岡 篤
午後6時晩酌という定期便

三田市 上田ひとみ
子等と飲む思い出話アテにして

笠岡市 藤井 智史
カラカラな愛にビールを流し込む

豊中市 松尾美智代
熱燗おもしろステロール忘れてる

明石市 瀬島流れ星
エリートの話題が壊す酒の味

奈良市 尾畑なを江
家籠もり銚子二本の呑み心地

奈良県 長谷川崇明
ガン封じ寺にお参り酒を飲む

鳥取県 本庄 汪
同じ米飯より旨いにごり酒

八王子市 川名 洋子
一合で仮面がとけて寅さんに

富士見市 中島 通則
思い出を箸でつまんで一人酒

尼崎市 永田 紀恵
酔いたいと思う時には酔えぬ酒

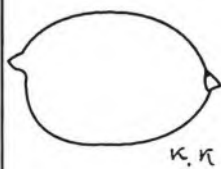
神戸市 上田 和宏
休肝日ぐい呑みに白湯くすり飲む

共選欄

檸檬抄

(薰風書、カットとも)

(投句316名)



「名残」 栗原道夫選

雪の中見送る老母の影滲む
燃え残る追慕へ傘の雫切る
久びさの帰省に名残つきぬ朝
口尖らす癖は幼き日のまんま
青い空に名残の白い雲一つ
おせちには母の名残の品があり
昭和一桁計算尺が使えます
田園の名残住宅地の地蔵
廃校の机昔のまま並ぶ
もうええわ十年も着た形見分け
名残雪から見え隠れする雷鳥
もう一度振り向いてから曲がる角
手離した風船を追う青い空
身辺整理恋の名残がしゃしゃり出る
病んだ母案しながらも帰京する

神戸市 みぎわはな
和歌山市 松原 寿子
箕面市 大浦 初音
大阪市 石田 孝純
大阪市 宮崎シマ子
三田市 堀 正和
神戸市 上田 和宏
貝塚市 石田ひろ子
神戸市 奥澤洋次郎
鳥取市 吉田孔美子
尼崎市 清水久美子
榎原市 居谷真理子
豊中市 きとうこみつ
奈良県 渡辺 富子
宮崎県 黒木 栄子

「名残」 久保田千代選

握手から名残伝わる愛おしさ
冬の名残を雪解け水の音に聞く
東京へ江戸の空気を吸う旅行
夢千代の名残尋ねて湯の街へ
しみじみと名残を惜しむ紅葉谷
露地の灯が名残尽きない法善寺
熟演の名残拍手がまだ響く
デュエットの余韻そのまま持ち帰り
名残雪なかなか消えぬ春はまだ
どんと降るこれで終わりか名残雪
アカペラで歌うイルカのなごり雪
若い日の名残妻とは同志愛
吉だろか梅の小枝に残る籤
関が原耳を澄ませば武者の声
昭和残像戦の恐怖はからしき

生駒市 飛永ふりこ
大洲市 花岡 順子
高槻市 松岡 篤
川西市 大坪 一徳
防府市 坂本 加代
豊中市 松田蟻日路
大阪市 岩崎 公誠
塩竈市 木田比呂朗
大阪市 中村 峰子
吹田市 太田 昭
藤井寺市 鈴木いさお
羽曳野市 吉村久仁雄
男鹿市 伊藤のぶよし
尼崎市 藤井 宏造
札幌市 小澤 淳

飲み足らぬままお開きにするマスク	犬山市	関本かつ子
ポストコロナ顔にくつきりマスク跡	札幌市	三浦 強一
コンサートしばらく余韻残し出る	伊丹市	岡村 風琴
丁寧の名残惜しんで髪を梳く	奈良市	米田 恭昌
別れ際またね 何度も念を押す	鳥取市	岸本 孝子
子どものころに見たことがある虹の橋	弘前市	高瀬 霜石
わんぱくの名残消せない傷の痕	男鹿市	伊藤のぶよし
さようなら幼馴染のピロリ菌	岡山県	田中 恵
雑然と静寂残し孫帰る	奈良市	宇賀 史郎
戦いのゲームに名残などはない	松江市	相見 柳歩
あの時の染みだとわかる好きな服	可見市	板山まみ子
母の服着れば私に母を見る	神戸市	城戸 誓子
孫の鼻私の嫌いな父の鼻	松江市	梅瀬みちを
古い趣味グサイ本立てだけ残る	美作市	岡本 余光
お開きの幹事手酌のコップ酒	河内長野市	梶原 弘光
生酔いのまま居酒屋の早仕舞い	米子市	竹村紀の治
デュエットの余韻そのまま持ち帰り	塩竈市	木田比呂朗
仕事明け名残の月に癒される	和歌山市	西川 千鶴
連休の名残か仕事はかどらぬ	米子市	伊塚美枝子
夕空に名残つきない彩を塗る	三木市	山口ヨシエ
断捨離ができない亡夫の釣り道具	西宮市	高橋千賀子
床の間に父の名残の経机	三田市	九村 義徳

ケモノ偏の名残とどめる尾氈骨	今治市	永井 松柏
猿との縁切れぬ名残の尾氈骨	明石市	梶谷 和郎
絶景の名残で揺れる枯すすき	今治市	安野かか志
捨てません名峰踏んだ登山靴	大阪市	樋口 眞
名残雪溶けて残した青春譜	岐阜県	喜多村正義
名残雪老いた背中に降り積もる	寝屋川市	廣田 和織
ふる里に育てた果樹のある名残	橋本市	石田 隆彦
往時の名残とどめる生家朽ち果てる	鳥取市	山下 凱柳
区画整理名残の街の名が消える	堺市	村上 玄也
再建へあなたと植えた梅香る	西宮市	亀岡 哲子
枯れ木立余韻を抱いている微熱	寝屋川市	伊達 郁夫
寥誘う秋の名残の子守柿	西予市	黒田 茂代
拉致の子へ名残つきないままに逝き	宇部市	平田 実男
プラットホーム名残惜しんだ跡がある	藤井寺市	太田扶美代
振り向けば手を振る母が遠くなる	岡山県	田中 恵
花束の名残つきない別れ酒	安来市	原 徳利
別れのテープ切れて尾を引く波まくら	香南市	桑名 孝雄
尾灯消え名残惜しさの虚脱感	岡山県	藤澤 照代
立ち尽くすテールランプの消えるまで	松山市	栗田 忠士
さよならの点になるまで立ち尽くす	富田林市	山野 寿之
さよならが言えそう夕焼けがきれい	大阪市	高杉 力
燐光は名残のカタチ「逢いたいな」	岡山市	永見 心咲

亡き父の名残の紅梅雪が舞う

西宮市 福島 弘子

残り香や秋篠寺に舞う紅葉

島根県 伊藤 寿美

髪型に若さの名残とどめてる

山口市 兼崎 徳子

かたくなな僕に残っている昭和

岡山市 丹下 凱夫

カズノコを嘔めば昭和のお正月

奈良県 長谷川崇明

「沸きましたよ」と昭和の声を出してみる

大阪市 島田 明美

処分した昭和の服が今流行る

神戸市 富永 恭子

顔付きも昭和に戻るシャッター街

河内長野市 穂口 正子

アナログを残す地方の小京都

高槻市 松岡 篤

廃線の錆びた線路に雪が舞う

大阪府 米澤 俣子

旅に出て名残つきない宿の月

大阪市 田中 廣子

さよならの決意にぶらす名残雪

尼崎市 藤井 宏造

フアッションに敏感 婚活の名残

笠岡市 藤井 智史

青春の名残ときどき疼く疵

鳥取市 倉益 一瑤

消えるまで顔埋めてる抱き枕

枚方市 藤田 武人

冬の名残を雪解け水の音に聞く

大洲市 花岡 順子

路地裏に落ちている昭和の名残

三原市 鴨田 昭紀

市になった村の名前の橋がある

唐津市 仁部 四郎

見えないが転ぶと痛い尾氈骨

鳥取市 福西 茶子

退化した尻尾の名残むず痒い

鳥取市 前田 楓花

翼の名残が肩甲骨にある

大阪市 宇都満知子

電話口少女の頃のしゃべりグセ

香芝市 山下 純子

夕焼けのなごりか髻られた水面

松山市 柳田かおる

「花は葉に」一筆箋にある未練

阿南市 小畑 定弘

左様なら言つて光つた冬の月

土佐清水市 辻内 次根

永遠の別れ名残が絡み付く

広島市 羽城 裕子

捨てられぬ恋の欠片が胸を突く

和歌山市 西川 千鶴

この世への名残か蟬が鳴き止まぬ

鳥取市 岸本 宏章

この世との名残おしくてまだ死ぬぬ

大阪市 笠嶋 恵美

むかし神重いまは楽しい飲み仲間

弘前市 高瀬 霜石

お銚子を振つて最後の名残絶つ

池田市 上山 堅坊

ご先祖の名残を残す低い鼻

鳥取市 前田 楓花

人間であつた名残の喉仏

佐賀県 真島久美子

あの時の染みだとわかる好きな服

可見市 板山まみ子

裕ちゃんの被つた帽子飾つてる

大阪市 江島谷勝弘

処分した昭和の服が今流行る

神戸市 富永 恭子

髪型に若さの名残とどめてる

山口市 兼崎 徳子

顔付きも昭和に戻るシャッター街

河内長野市 穂口 正子

懐かしい昭和と出逢う路地の町

尾道市 村上 和子

カルピスの響きも味もまだ昭和

高槻市 初代 正彦

脳みそに昭和の名残留めてる

黒石市 石澤はる子

恩讐の彼方名残の月が出る

尼崎市 清水久美子

儂さが名残の中で甞する

名古屋市 富田 末男

名残惜しむことすら許さないコロナ

松山市 宮尾みのり

昼ごはんカレーうどんに汚されて	尼崎市	近兼	敦子
小学校跡に石段桜咲く	鳥取県	竹信	照彦
庭石に父の名残が見え隠れ	河内長野市	辻村	ヒロ
廃品に出す寝枕にそつとハグ	奈良県	安福	和夫
赴任地よさらば真つ赤な駅ピアノ	芦屋市	上野多恵子	
駅ピアノノ熟年が弾くなごり雪	羽曳野市	吉村久仁雄	
栄転へ名残の梅も淋しそう	河内長野市	村上	直樹
系図などないが名残の蒙古斑	堺市	澤井	敏治
父の部屋だった壁には天地真理	枚方市	栃尾	奏子
ひな人形五大家族で居た記憶	堺市	内藤	憲彦
なるほどね名残の月も酔っている	大阪市	井丸	昌紀
別れ際曇りガラスへI LOVE YOU	伊丹市	延寿庵野鶴	
繁栄の名残でしょうかシルクハット	黒石市	北山まみどり	
さよならが言えずプツンと切る電話	高砂市	松尾柳石子	
さよならをお国訛りで聞く旅情	岡山市	藤澤	照代
ハンドルを握って啜うなごり雪	岩国市	上村	夢香
笑い声聞こえたような天気雨	東京都	川本真理子	
正月の名残笑い声はわん	河内長野市	森田	旅人
秀句			
あんなに愛した名残のペアカップ	大阪市	森	廣子
ヴィーナスであった名残の壺を持つ	鳥取県	斉尾くにこ	
さよならが言えそう夕焼けがきれい	大阪市	高杉	力

コロナの名残そう言える日を待っている	高槻市	片山かずお
令和三年なんの名残もない師走	芦屋市	上野多恵子
振り返りみんな愛しい影ばかり	三木市	山口ヨシエ
青春の名残ぎつしりセピア色	大阪市	岡田 恵子
恩師の訃アルバムめくる三箇日	川西市	山口 不動
青春の足跡探すクラス会	香芝市	山下 純子
亡母に持たせた名残の鈴が鳴っている	堺市	今井万紗子
携帯に優しい母が生きている	寝屋川市	川本 信子
ちゃん付けて呼ばれる母の七回忌	奈良県	長谷川崇明
蔵書から父の名残がしのばれる	横濱市	菊地 政勝
寂聴の名残の法話読む長夜	鳥根県	伊藤 寿美
強烈な名残を撒いて散る寂聴	枚方市	藤村 亜成
逝く父の口に一匙なごり酒	大阪市	平井美智子
青春の名残ときどき疼く疵	鳥取市	倉益 一瑤
履歴書に若気の至り鎮座する	三田市	村田 博
ヴィーナスであった名残の壺を持つ	鳥取県	斉尾くにこ
遠くから眺めてこそその名残雪	河内長野市	村上 直樹
たそがれの刻を映している余白	橿原市	居谷真理子
秀句		
かたくなな僕に残っている昭和	岡山市	丹下 凱夫
生きぬいた名残と思う笑い皺	堺市	澤井 敏治
名残みな吹き渡らせる千の風	奈良県	渡辺 富子

「オフレコ」

(投句 210名)

佐々木 満 作 選



オフレコだったはずの恋からファンファーレ
 オフレコを条件にして打ち明ける
 不都合は残さぬようにシユレッダー
 顔色を値踏みしながら聞くマル秘
 妻の愚痴オフレコになり攻めてくる
 恋はオフレコ 夕陽が燃えただけの事
 オフレコをしばしば洩らす風の罪
 オフレコになれば本音を出してくる
 オフレコの話が飾る人生譜
 オフレコと耳打ちされてからの乱
 オフレコの秘密を知った仲になる
 オフレコが洩れ議事録を墨で消す
 オフレコに花咲かして更衣室
 内緒だと言えば話はよく弾む
 オフレコを聞いて株価が先動く
 オフレコは鍵の穴から洩れて出る
 オフレコで緩め黒塗りで締める
 オフレコの約束記者は守りぬき
 オフレコの特ダネ巷駆け巡る
 オフレコに今日のスクープ盗まれる

大阪府	島田	明美
鳥取県	山下	節子
松山市	栗田	忠士
堺市	内藤	憲彦
奈良県	渡辺	富子
岡山市	永見	心咲
三原市	笹重	耕三
松山市	宮尾	みのり
熊本市	杉野	羅天
大阪市	内田	志津子
津山市	高橋	由紀女
豊中市	水野	黒兎
貝塚市	石田	ひろ子
神戸市	山崎	武彦
堺市	澤井	敏治
大阪市	津村	志華子
河内長野市	梶原	弘光
唐津市	仁部	四郎
奈良市	米田	恭昌
明石市	桃谷	和郎

オフレコがオンレコになる節の穴
 記憶にはごさいませんと消去キー
 オンレコにしてねと胸の内話す
 オフレコに大きな翼付いている
 オフレコが回り回って雪だるま
 おおかたはオフレコにするプロポーズ
 オフレコの話は蜜の味がする
 オフレコへあれこれ酒の無礼講
 オフレコの苦しい恋に甘い恋
 オフレコの身の上話 風に乗る
 オフレコが尾鰭を付けてやって来る
 ぼくが行くところはみんな星みつつ

佳 句

オフレコと逃げてでもベンが許さない
 箱口令敷いてもなぜかすぐ漏れる
 オフレコの威令が届くうちが華
 約束をした舌先にあるモラル
 オフレコへ文春のペン切ってくる

人

赤木ファイル命を懸けた直訴状

記録には残さぬ機密費の不思議

恋はオフレコ 冬ざれの木守柿

軸

この機密洩れると国家危機起こる

土佐清水市	辻内	次根
神戸市	みざわ	はな
西予市	黒田	茂代
大阪市	石田	孝純
札幌市	小澤	淳
海南市	小谷	小雪
札幌市	三浦	強一
明石市	瀬島	流れ星
富田林市	山原	寿之
和歌山市	柏原	夕胡
堺市	今井	万紗子
弘前市	高瀬	霜石
宮崎県	恵利	菊江
藤井寺市	鈴木	いさお
神戸市	上田	和宏
佐賀県	真島	久美子
伊丹市	延寿庵	野鶴
大阪府	大浦	福子
弘前市	富士	慕情
大阪市	平井	美智子

「単純」

(投句 218名)

前田 楓 花 選



単純が服を着ているわたしです
 シンプルにこの世を生きる難しさ
 単純に見えて浮き世はややこしい
 一日の疲れに酒があればよし
 単純でくすり二粒風邪治る
 眠ったらさほどでもない悩み事
 富岳富岳と騒ぐが中身ゼロとイチ
 シンプルな暮らしに少し欲を足す
 塩味だけの母さんのにぎりめし
 単純な件ややこしく説くメデア
 単純に信じてました褒め言葉
 単純なくらいで丁度いい此の世
 単純に一步踏み出すのも若さ
 単純なことですウンはつかぬこと
 バスツアーお薦め品をすぐに買う
 流行にすぐに飛びつきすぐ飽きる
 昔から好きと言われりやすく惚れる
 単純なガラケイだから手放せぬ
 お返事はイエスカノーのどちらかで
 自分より他人信じて騙される

弘前市 稲見 則彦
 三原市 鴨田 昭紀
 今治市 永井 松柏
 丹波篠山市 澤 良子
 高槻市 島田千鶴子
 大阪市 小野 雅美
 池田市 上山 堅坊
 美作市 岡本 余光
 倉吉市 大羽 雄大
 豊中市 松田蟻日路
 西中市 黒田 茂代
 大洲市 花岡 順子
 弘前市 福士 慕情
 米子市 後藤 宏之
 尼崎市 近兼 敦子
 神戸市 富永 恭子
 大阪市 岩崎 玲子
 鳥取市 岸本 孝子
 奈良県 長谷川崇明
 鳥取市 門村 幸子

百均で爆買い王様の気分
 冬は湯豆腐 夏は奴で杯重ね
 単純な質で褒めればよく動く
 赤と白日本チームのユニフォーム
 丸描いてチョンそんな生き方してみたい
 単純に生きて円周率は3
 大丈夫医者の言葉がよい薬
 真つ直ぐに走って直角に曲がる
 好き嫌い顔に出るから嫌われる
 裏を読む智慧がないので愛される
 一本の糸です織って下さいな
 砂時計ただそれだけの生き方で
 年寄ると泣いて笑うて単細胞
 老後のくらしはシンプルイズベスト
 単純に見える名句に深い意味
 しあわせだなあ痛いところなんもない
 単純を囁む沢庵の深い味

佐賀県 真島久美子
 羽曳野市 吉村久仁雄
 高槻市 片山かずお
 可児市 板山まみ子
 明石市 糀谷 和郎
 大阪市 平井美智子
 枚方市 山口弘委智
 倉吉市 牧野 芳光
 宝塚市 太田としお
 鳥取市 福西 茶子
 橿原市 居谷真理子
 岩国市 上村 夢香
 岡山市 丹下 凱夫
 藤井寺市 鈴木いさお
 神戸市 松倉 正美
 弘前市 高瀬 霜石
 富田林市 山野 寿之
 青森県 月波 与生
 豊中市 水野 黒兎
 東大阪市 佐々木満作

人
 ジャンケンで決まるとみんなホッとする
 時計描き免許更新する傘寿
 天
 単純に仕切っただけの避難場所
 軸
 単純がいい取説のちさい文字

初歩教室

題 — ほっこり

高瀬 霜石

これを書いているのが、1月の下旬。

地元のFM局で「霜石のやじうま川柳」という番組(月曜日から金曜日まで、毎日、午後3時から15分程度)を放送して、丸22年。

なにせ、週に5日もだから、回数もはんばじゃない。デルタが少し下火になったので、2月中旬に、5555回になるのを記念して「リスナー感謝祭」なるものを企画した。ほしたら、今度は、オミクロンの襲来だ。

2月までとても待つてはられないと、先日、「緊急リスナー感謝会」オミクロンが来る前に」と題し、感染対策をバッチリで、30人限定で開催し、大いに楽しんだ。これが活字になるのは3月。その頃、列島はどんな具合になっているのか。想像もつかない。3回目のワクチン接種の進み具合は？

合は？

飲み薬は？ 国産のワクチンは？

①まずは恒例、上下を入れ替えてみる。

(▼は原句。▽は参考句)

▼炬燵でみかんほっこりと老い二人 和子
ここはリズムを優先して、

▽老い二人炬燵でみかんほっこりと

▼縄のれんおでん三品燗酒と 厚子
▽燗酒とおでん三品縄のれん

②言葉の順番を入れ替えたり、別な言葉に置き換えて、よりドラマチックに仕立てる。

▼赤ちゃんのふわり笑顔に包まれる 誓子
▽赤ちゃんの笑顔にふわり包まれる

▼ほっこりと冬至の柚子風呂に浸る 風露
「落ち」は後ろの方に持ってきたい。

▽ほっこりと浸る冬至の柚子風呂に

▼西日射す縁側わたし指定席 えい子
この句、作者の苦勞? がよく分かる。

「西日射す縁側——つまり、あんまり居心地の良くない場所。でも——わたしの指定席なのだという作者の思い入れ。誠に結構。実によく分かる。でも、川柳にした場合、

ブツブツ切れて美しくない。縁側だと、リズムがよくないので、あえて、やむなく、

こう脚色。

▽西日射す窓辺わたしの指定席

▼わだかまり捨てて二人して蟹喰らう 双葉
上五で、その関係が分かるので、二人は

カットします。「喰らう」がいいか、「を食う」がいいかは、作者のまったくの好み。

▽わだかまり捨てて仲良く蟹喰らう

▼私にはほっこり時代はいつだったっけ(薄良)子
とつても面白い句だが、リズムがなんと

もねえ。ここは、あえて、リズム優先で、

▽わたくしのほっこり時代いつだったっけ

今回のような場合、句に題を詠みこむか、詠みこまないかで、関東と関西では違うということが、ずーっと議論され続けている。

僕は、一応、生まれは関東の所屬(青森県だが)。でも、関西の川柳に惚れて関西の吟社に属している関係上、半分関東、半分関西の半魚人みただから始末が悪いのかも。

で、何を言いたいかと言うと、僕の好みは、こういう場合に限っては「詠みこまない」方が、上品だと思っただなあ。

▼方言で語る口調にほっこりと さくら

「方言」という温かい言葉が出れば、あえて「ほっこり」と書く必要はないでしょう。

▽方言で語る口調に癒される

▼焼芋にするとはっこり紅はるか 紀美代
これも一緒。焼芋とくれば「ほっこり」
はいらない表現。誰でも知っていることだ
から。

▼焼芋になるとバツグン紅はるか

▼寒い冬こたつでみかん昭和の日(團良)子
冬は寒いのが当たり前だから「寒い冬」な
んでえーのは、当たり前前すぎてつまらない。

▼冬到来こたつでみかん昭和の日——とか、
▼さあ冬だこたつでみかん昭和の日——とか。

▼寒風にイシヤキイモ声届く 行久
いいですねえ。でも、あえて、もう一声。

▼寒風にイシヤキイモ声響く

▼焼き芋をほおばり和むひなたほこのりひろ
前述したように、焼き芋をほおばれば、
和むのは当たり前。当たり前前のコトを書い
ても、しょうがない。なので、こは、あえて、
▼焼き芋をほおばる午後のひなたほこ

▼ほっこりと日だまり選つてまるい猫 閑
これはこれで、一枚の絵。でも、僕は、
個人的に、それじゃあつまらない、つまり
「観察」だけではつまらないのだ。句には、
作者がそこに居て欲しいのだなあ。

▼ほっこりと日だまり選つて猫とほく
▼またあした子供に言われほっこりと 弥生
▼またあした子供に言われほっこりす

▼鍋物の湯気の魔法で皆仲間 不二夫
この句の肝は「湯気の魔法」。いいです
ねえ。でも、せつかくだから、鍋物なんて
いわずに、もっと具体的な鍋にしたい。下
五の「皆仲間」も漢字ばかりで、固すぎる。
▼寄せ鍋の湯気の魔法でみんな友
▼ほっこりと心和ます言葉かけ ひとみ

この句は、言葉をかける側からの句だが、
あえて逆の、かけられる側の方からの句に
した方がいいのではと、僕は思う。

▼ほっこりと和ます言葉かけられる

今回は題がよかったのかなあ、いつもよ
り佳句が多かった。

(○は佳句。◎は優秀句)

○ほっこりとしたくて歩く裏通り 和夫
○焼芋のほっこり湯気がたまらない 一平
○朝刊の隅にほっこりする漫画 通則
○思い出す父のあぐらの温かさ マユミ
○それぞれ「裏通り」「湯気」「漫画」「あぐら」
と、言葉の選択が楽しい。

○新米が届いた里の馴染みから 蟻日路
○「里の馴染み」のほっこり感が伝わる。

○赤い実にむく鳥群れて戯れて 智恵子
○「む」のジャブが、読後にズンと効く。

○ほっこりとする家あればグレなんだ 秀斧
おっと、それは昔の話。今は、川柳と出
会って、臍は曲がっても、道は真つすぐ。

◎先生あのね結婚してねボクと 風鈴
五七五じゃないけど、リズムがいいんだ
なあ。それもそのはず、七七三、合計十七
音だ。

◎昼下がり猫とこたつと再放送 令位子
再放送が効いている。「鬼平犯科帳」かな。

◎バス停に誰かが置いた椅子一つ 次郎
夕暮れ時のバス停。一枚の写真だ。

今月の卒業生は、鳥取市の太田睦子さん。
睦子さんはまだ新人なのかな？ というの
は、テクニク(比喩など)を用いないから。
それなのに、あえて卒業させたのは、そ
の真摯な姿勢。3句とも、下五が「ほっこ
りす」で、平凡だが、1句、1句、焦点をちゃ
んと変えているところが立派。テクニク
なんぞは後から自然についてくるもの。大
事なのは、その視点。ゆるゆるやりましよ
う、睦子さん。

○並んだがレジの笑顔でほっこりす睦子
○昔々がテレビの猫でほっこりす 睦子
○仏壇の亡母の笑顔にほっこりす 睦子

睦子

睦子

睦子

睦子

睦子

睦子

睦子

睦子

睦子

睦子

睦子

睦子

睦子

睦子

睦子

睦子

川柳塔鑑賞

同人吟 平井美智子

— 2月号から

嘘少し入っているが楽しそう

坂 裕之

爺ちゃんの武勇伝はちよつと大げさだし、友人の恋の話も眉唾物。でも良いではないか。他愛ない嘘は周りを楽しませたいという優しさの表れなのだから。

電車中向かいも指を折っている

江島谷 勝弘

電車等で真向いのおじさんが575と指を折っていたりすると私も嬉しくなってくる。但し、指を折っているイケメンの兄ちゃんにはなかなか出会えない

バイキング孫は綿菓子食べている

羽 奈和子

我が家の息子はバイキングに連れて行くくと焼きそばばかり食べていた。子供は正直。値段は関係なく食べたい物が一番の御馳走なのであろう。

亡き妻のエプロンをする台所

藤井 宏造

「妻の匂いがするなんて、そんなロマンチックなものではないですよ。シャツを汚すと面倒ですから」と照れている宏造さん。ホラ、奥様が笑ってますよ。「もう少し丁寧に濯いで下さい」って。

ご相談次第とやって来た笑顔

柿花和夫

表現の面白さに足が止まった一句。泣くも笑うもあなた次第。あなたが、どんな生き方をするかと言うことですよと作者。

深追いはしない浅瀬で待っている

久保田 千代

私などは深追いをして溺れてしまふか、待つのが、じれったくてさっさと諦めてしまふか。凜とした大人の女性の一句。

永遠の謎解き君からの文句

西村 哲夫

謎解きゲームの中で一番難しいのが女性の文句。そう、女心は複雑。最も謎が解けてしまえばゲームセットになるかも。

交差点ななめに行くとき時間切れ

太田省三

広い交差点は足早にならないと渡り切れない時がある。斜めだと尚更だろう。川柳の種は何処にでも落ちている。

一三個は食べるたこやき焼きながら

高杉 力

力さんに見られていたかとドキリ。私も立派なキッチンイーターである。日常を川柳の目で掬い上げた楽しい一句。

頑張ったと自分に褒美だし過ぎる

原田 すみ子

ご褒美は幸せの小道具、出し過ぎることはありません。因みに私のご褒美はケーキですが、すみ子さんは何でしょう。

落ちてはいる外れるはずのないマスク

前田 洋子

ゴミ箱ならまだしも時々、歩道で見かけるマスクは、落としたのか捨てたのか。(外れる筈がない)と穿ちの効いた川柳。

マスク忘れて取りに帰って家にいる

村上 ミツ子

忘れたマスクを取りに一旦家まで帰るともう一度出かける気力も買物意欲も無くしてしまふ。日常の憂鬱を上手く表現。

ちぐはぐな会話ゆかいな老妻といる

吉村 久仁雄

よく黙っていても通じると言うがやはり会話はあった方が楽しい。たとえそれが少しずれている会話であっても笑顔が補ってくれるはず。久仁雄さんの愛妻賛歌。

親ガチャといわれる親はボクのこと

片岡 かずお

どんな親の元に生まれてくるかは運次第という意味の親ガチャ。今度、言ってみようよ「子は親を選べないかもしれないけど親は子を選ばないよ」って。手を上げて言うべきだった会終わる

成田 雨奇

「ご意見はありませんか」の声に一同押し黙ったままで散会。言うべきことを言えなかったのは、心が老いてきたからではないかとちよっぴり悔いる雨奇さん。

巢籠りの部屋からみてる昼の月

小畑 定弘

行楽や外出を避けて自宅で過ごす日が続き、身体も心も持て余し気味の日常。窓に目をやると昼の月がブカリ。夜の月と違つて存在感はないが、月にとつてはそんなことは些細な事なのだろうな。

毎バフエ類張る夫は隙だらけ

藤澤 照代

仕事人間だった夫はスーツの似合う隙の無い人だったが退職した途端、穏やかなスィーツ男子になってしまった。でも隙だらけの男も可愛いですよと照代さん。

追い風のときは決まつて蹴躓く

竹村 紀の治

向い風の時時は緊張して足を踏ん張つているが追い風になると気が緩んで足元不如意。順風の時こそ手綱を締めなければと人生の達人・紀の治さんのメッセージ。5円よりちよっとお洒落なエコバッグ

内藤 憲彦

有料になってから、ほとんどの人がマイバッグを持参し、今までは当たり前だったビニール袋も今では少数派。自前のエコバッグが個性の花を咲かせている。

レジ係の仕事を増やすセルフレジ

大久保 眞澄

最近、支払いのご自分で計算機に入れて下さいという店が増えているが私のような馴れない者の為にレジの人が説明に立ってくれる。説明するより直接お金を受け取つてくれた方が早いだけとねえ。

凄い手品だ笑顔の花を咲かせてる

伊藤 のぶよし

凄い手品つて何？と読者を引きつけておいてのどんでん返し。巧みな表現の一句。笑顔の花を咲かせる手品はなかなか習得できそうも無いが私にも笑顔の種を蒔くことくらいはできるかもしれない。

ごたごたの過去ひつさげて現在地

藤原 大子

多かれ少なかれ色々な事がある人生。その出来事の一つ一つが、その人の豊かさになり、思いやる心を育てるとか。(引つ提げて)と言う言葉には大子さんの生きて来た自負心が感じられます。

懸命に生きてきたのは確かです

安土 理恵

夫を助け家を守り懸命に生きて来たが、今はもう自分の身体の機嫌を取ることです。精一杯。家事さえも中途半端な生活だが、真っ直ぐに生きてきた人生。悔いはない。

霜柱持ち上げたのは露の臺

中原 比呂志

ほらほら、凧に負けないで露の臺が芽を出しました。春は必ずやつて来ますというように。

水煙抄鑑賞

—2月号から

奥澤 洋次郎

白い杖渡り切るまで見届けろ

齋藤 奈津子

そうですね。それが大切で、それでいいですよ。恥かしながらの私も少しは見習おう。

なんでなの お偉いお方だからなの

室田 行久

全くです。名も無い者は無視をされるし。あかんたれ同盟でも作らねば。

ピエロでいい決めた我が道ただ一途

上山 堅坊

自分の道ですものね。悔いの無いようこの覚悟。私にもその思いはあつたのですが、遺憾ながら志が低過ぎました。

化粧して鏡に気合い入れる朝

榎葉 良子

ヨシ！ 私はキレイ！ 今日も一日頑張ろう。朝の気合いは一日を決めます。

善人に一瞬戻る除夜の鐘

坂本 星雨

ふと気持が改まる。除夜の鐘には、自分を呼び戻すものがあるようです。

また来るね頷く母の目に涙

中島 通則

母の涙を見るほど、淋しく辛いものはありませんね。次はいつ来られるか。

不器用に生きておんなの仕舞風呂

坂野 澄子

損得はうまく生きられぬ不器用者。仕舞風呂で、これでいいと自分を慰め、明日も不器用を生きてゆくのです。

カタカナ語増えて字引きも役立たず

みぎわ はな

その通りで、調べるのに難儀します。

台所に転がっている不発弾

吾郷 天遊

厄介な不発弾ですね。何時爆発するかの所でも転がっています。

コナ禍を誰にも会えず逝った友

幸田 厚子

面会禁止のまま逝かれた方が多くおられるようです。何でこんな目に遭わされるのか。無念のうめきが聞こえます。

目覚めればホームの妻の空きベッド

村中 悦男

「おはよう」と言いかけて、そうかホームか。いろんな思いを振り払って、今日が始まるのでしょね。

聴診器当てたまま医師おし黙る

東 敏郎

一時の沈黙。覚悟せねばいかんのか。どのような言葉が返ったのでしょうか。

幸せを追う家族にはくたびれる

常國 喜好

幸せも追いかけると、尻を叩かれて大変です。目の前の今に、幸せがいっぱいあるように思うのですが…。

君だけが風景だった外野席

喜多村 正儀

眩しかった君がいた外野席。今は乾いた風が吹いているだけです。

へとへとになつてから知る鐵づかい

妹能 令位子

やれば出来ると言われるが、へとへとになつてのことでしょうね。

散る覚悟できて真つ赤になる紅葉

岡田 恵子

真つ赤に紅葉して、私もそう逝ければ。



ジェンダー・フリー

子どもの頃、女の子と口喧嘩したときに「女のくせに！」などと言った覚えがあります。また、逆に「男のくせに！」と言いつ返されたりしていました。その「女のくせに」という意識の下には「女はしとやかで控え目であるべき」という考えが刷り込まれていたのでしょうか。また、女子には「男は寡黙で遅くあるべき」という意識があったのでしょうか。

絶滅の危惧しとやかで黒髪で

お化粧が早く才女の資格あり

金持ちの女美人にみえてくる

御飯いつ作るパチンコ打つ女性

たいていは喋らなければいい女

右の句それぞれ面白いのですが、「女性はしとやかであつてほしい」とか、「お化粧は要領よく」とか、「食事の支度は女性の役目」。そして、「女性はお喋り」という男性から見た「女性はどうあってほしい」という想いが感じられます。

男とはこうあるべきかジャンプ傘
涙もろい男で連れて歩けない
いい男黙っていれればいいのに
おビールという彼が嫌さようなら
コロッケになつてしまった男たち

また右は、「男はバリツと元氣良く」とか「男は寡黙で遅くあるべき」など、女性サイドの意識が感じられます。

水野 黒兎
仁部 四郎
小澤 幸泉
小川しんじ
田沢 恒坊

瀬戸まさよ
白石 恵子
中井 アキ
宇野 幹子
真島久美子

このような「性」によつて「こうあるべき」という考えは常識として育まれてきましたので素直に受け入れてきました。上記いずれの句にも違和感はありません。しかし、近年「性同一性障害」という問題が取り上げられるようになって、改めて読み直してみると、そのような障害を持った人たちにとっては、ちよつと辛いのではないかと気がつきました。

「性同一性障害」を辞書で引きますと「身体の器官の性と自己認識としての性とが一致せず、強い違和感や不快感が生活する上での困難になっている状態」。そして「ジェンダー・フリー」とは「社会的・文化的に形成された性差別の克服を目指す考え」（いずれも広辞苑電子版）と記されています。

ジェンダーの議論ようやく日本でも

遅れ馳せジェンダーギャップ浮きあがる

ジェンダーフリー柴刈りに行くおばあさん

ジェンダーフリー「たかが女」は死語になる

ジェンダーフリーな紅白歌合戦

性別欄やがては消えてゆく令和

このようなジェンダー・フリーの流れの中、昨年末の紅白歌合戦では「白組紅組」の区別はせず総合会社とし、「男女の戦い」という設定を払拭していました。しかし、そのような改革に対して、「合戦は遊びでありシヤレ。ジェンダー・フリーに迎合し過ぎるのは野暮」という意見もありました。

私たちの「川柳」もまた「たかが女」とか「男のくせに」という古い意識での作句は避けなければならぬでしょう。しかし、男女の性差が存在する事実に対して、上に挙げた作品の突つ込みぐらひは許されるのではないかと思います。

多田 雅尚
宇都満知子
大久保眞澄
片山かずお
月波 与生
藤井 則彦



(投句193名)

数少ない趣味の一つに美術鑑賞があるので、前に比べて閉館する美術館は減って来たものの、予約制、なんてことを多くの美術館がやるようになりました。

明日は時間があるから行ってみよう、とフラリと寄るのがいいのであって、「何月何日の何時に来て下さい」と決められてまで行きたくないと思うのは、わがままな私だけなのでしょうか。予約の要る美術館は行かない、恵方巻は食べない、と意固地を通しています。では、ナビを。

草履虫二丁前に影が有る

神戸市 松倉 正美

(評) 一寸の虫にも五分の魂、ってことです。草履虫でも影も有ればココロだっけしつかり持っているんだから。

百生きて浦島太郎郷降り

三田市 尾崎 一子

(評) 玉手箱を開けてしまった百年後の

浦島太郎、想像もつきませんけど、意外と若々しかったりして。

豊中市 藤井 則彦

お隣の拍手はどうもトラのファン

(評) 去年は、いや、去年もザンネンでした。大声も出せず、ひたすら拍手するだけの応援でも分かるものですね。

佐賀県 真島久美子

軽石が雪が触って確かめる

(評) 有り得ないことが起こっても不思議ではない世の中になってしまいましたね。でも、軽石降ってきたらコワイ。

大阪市 平井美智子

少しだけ不幸な振りが受けている

(評) 人の不幸は蜜の味、なんて考えるだけでもイケナイことですが、あまりに幸福な人を見るのもちょっとイヤ!

三田市 大西 重男

国税の一部支える酒を飲む

(評) 日々こんなに税金を納めなくてもなあ、と思いつつ飲んでしまうものなんです。お酒って。

和歌山県 三枝真智子

合格の日から神棚ほつとかれ

(評) 笑ってしまうほど正直なお方、好きです、こういう人。だって、もう用は済んでしまったんですもの。

大阪市 山本加お里

古日記今頃役に立ちました

(評) あやふやな頭の中の記憶より、文

字で書かれたものほど確かなものはありません。日記を付けていければの話。

松山市 宮尾みのり

その時の覚悟は出来ている独り

(評) これは厳しい一句です。覚悟を胸に秘めていればこそ、その時までの日々をより楽しく過ごしたものだです。

和歌山市 まつともこ

活のいいボンボン菓子になった米

(評) 今もイベントなどで見かけることはありますが、あの機械(?)の音が怖くて耳を塞いでいた昔が懐かしいです。

大阪市 田中ゆみ子

他所の灯はみんな幸せそうである

鳥取市 山下 凱柳
足元をしかと踏みしめ歩む若い
石橋 直子

雪ちらちら熱燗追加ハイハイと

枚方市 山口弘委智

風の中明日へ明日へと春つぼみ

大阪市 宇都満知子

銀世界あすは子どもと雪だるま

米子市 八木 千代

徒歩5分のチラシで買ったマイホーム

青森県 月波 与生

卒婚と離婚は違う影ひとつ

東京都 川本真理子

今はただ真一文字に噛みしめる

唐津市 坂本 蜂朗

雪国で先ずゴム長を買わされる

神戸市 富永 恭子
 はたん雪時に詩人にしてくれる
 大阪市 石田 孝純
 笑つてはなりませぬ男のロマン
 尼崎市 藤田 雪菜
 運動をしるよと神が雪降らす
 東大阪市 佐々木満作
 卒寿まで住宅ローン残るああ
 箕面市 大浦 初音
 左遷地で足どり重く帰る道
 藤井寺市 鴨谷瑠美子
 携帯で探しています春の声
 和歌山市 上田 紀子
 冗舌の口から洩れる浪花節
 黒石市 北山まみどり
 ゆっくりでいいんだ待っているからね
 松山市 柳田かおる
 ためらっているからいつも出遅れる
 明石市 糍谷 和郎
 汚染土を清めて欲しい銀世界
 奈良市 山本 昌代
 独りじゃないひとりじゃないと口遊む
 松山市 栗田 忠士
 雪催いちよこつと寄るか繩のれん
 土佐清水市 辻内 次根
 雪が舞う男一匹立ちあがる
 富田林市 山野 寿之
 雪の夜の頭の中はおでん鍋
 松山市 郷田 みや
 後戻りしないと決めた一人旅

池田市 上山 堅坊
 大雪や田舎のばあばかわいそう
 樺原市 居谷真理子
 我が家へと六甲嵐さかのぼる
 弘前市 福士 慕情
 雪の日は早く帰って熱燗だ
 松江市 石橋 芳山
 放浪のいたるところで作る友
 神戸市 みぎわはな
 母の手をやつと離して一人立ち
 大阪市 江島谷勝弘
 思い出すダークタックスハーモニー
 岡山市 永見 心咲
 誰だっけ星屑の町捨てたのは
 箕面市 出口セツ子
 雪しきり私はノラになりました
 吹田市 西沢 司郎
 星空に出かけてどうも留守らしい
 熊本市 杉野 羅天
 温暖化雪がまあるくなりました
 大阪市 古今堂蕉子
 おばあさん榎山行きを決定す
 尼崎市 永田 紀恵
 孤独にも慣れて楽しむゆとり出来
 鳥取市 福西 茶子
 好きだとも言えず遠くで見えています
 河内長野市 穂口 正子
 寂しさが積りわたしは雪だるま
 尼崎市 近兼 敦子
 応援隊今日も我が家で待っている

堺市 内藤 憲彦
 カピバラに生まれたかった寒い朝
 奈良市 中堀 優
 焼きイモを頬張りながらつく家路
 宝塚市 丸山 孔一
 持ち家の夢が段段遠ざかる
 和歌山市 柏原 夕胡
 午前様カーアチャンの角コワイなあ
 豊中市 きとうこみつ
 私の嘘をすっかり覆う雪景色
 南あわじ市 萩原 狸月
 また一人大志が村を去る四月
 高槻市 富田 保子
 願掛けて買った馬券が吹雪の日
 朝霞市 前田 洋子
 雪に紛れダイヤが降って来ないかな
 倉吉市 牧野 芳光
 いがぐり坊主どんな大人になったやら
 鳥取市 谷口回春子
 青い鳥やつと見つけた足下だ
 尾道市 大本 和子
 コンビニへ妻の使いでチョコアイス

5月号発表
 (3月15日締切)



(平本 霧石人 画)
 柳箋に2句

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 わかやま 吟社	13日(日) 14時10分締切 兼題=大丈夫・誰・ウイルス 課題吟=電柱	和歌山商工会議所 4階 和歌山市西汀丁36 兼題 〒649-6253 岩出市紀泉台366 藤原ほのか 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 柴原道夫
西宮北口 川柳会	14日(月) 14時締切 席題・口・飾る・きびきび 自由吟	西宮市立中央公民館 6F 講堂 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「プレラにのみや」 〒663-8141 西宮市高須町2-1-31-830 福田正彦
川柳 さんだ	休会	連絡先 〒669-1545 三田市狭間が丘5-10-19 谷 祐康
川柳 たちばな	19日(土) 13時45分締切 午後1時開場 席題・天・うっかり・自由吟	園平コミュニティホール 阪急「園田」駅 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
岸和田 川柳会	19日(土)14時 道・鍛える・まばら・デジタル	岸和田市立福祉総合センター 南海電鉄「岸和田」駅東へ徒歩5分 〒596-0076 岸和田市野田町2-13-19 中岡香代
川柳塔 みちのく	19日(土) 17時締切 家事一切・くねくね・式	会場未定 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛 TEL0172-36-8605
川柳 ねやがわ	20日(日) 席題・愚痴・ドラマ・楽しむ 自由吟	寝屋川市民会館 京阪寝屋川駅から徒歩15分 または京阪バス市民会館前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳 藤井寺	20日(日) 14時締切 風評・ネタ・席題共撰	藤井寺市生涯学習センター・しゅらホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0007 藤井寺市林5-8-20-303 鈴木いさお
南大阪 川柳会	21日(月) 14時締切 続く・辞書・プラス・雑詠	大阪市立住まじ情報センター 5F 研修室 メトロ谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒569-1116 高槻市白梅町5-15-1008 松岡 篤
豊中 もくせい 川柳会	21日(月) 13時50分締切 粒・洗う・いつか・自由吟	豊中市立中央公民館 3F 阪急宝塚線「曾根」駅 徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5-26 初代正彦
川柳塔 すみよし	26日(日) 14時締切 丸・来る・さっぱり	住吉区役所内 住吉公民館 2F 〒580-0026 松原市天美我堂3-130-2-404 森松まつお
はびきの 市民会 川柳	27日(日) 投句句会 波・果たす・ユニーク	〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
川柳 ふうもん 吟社	27日(日) 13時～ 自由吟・曲線・汗・空耳	県民ふれあい会館 4F 鳥取市扇町21 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
和歌山 三幸会 川柳	30日(水) 13時15分締切 書く・短い・匂い	和歌山商工会議所 4階 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。
★上記は年初の予定。諸般の事情のため、詳細は各柳社にお問い合わせください。

3月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な	3日(金) 誌上句会 陽気・はらはら・当たる	〒636-0341 磯城郡田原本町薬王寺150-21 中堀 優
城北 川柳会	5日(土)14時締切 先ず・グータッチ・偉人・自由吟	旭区老人福祉センター 3F メトロ谷町線「千林大宮」駅③番出口を左後側 投句先 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
川柳 とんだばやし 富柳会	5日(土) 誘・無駄	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0066 富田林市錦織北1-14-6 中村 恵
倉吉 川柳会	5日(土) 14時締切 ゴロリ・教える・ほとほと 席題一題	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 まつ 吟社	5日(土) 13時30分締切 新・太陽・走る・歌	投句先 〒690-0034 松江市古志原7-19-19 中筋弘充 会場 雑貨公民館
おりひめ☆ ひこぼし 川柳会	7日(月) 新人・ハラハラ・桃源郷	投句先 〒573-0095 枚方市翠香園町2-7 『おりひめ☆ひこぼし川柳会』 藤田武人 TEL・FAX 072-395-5453
ほたる 川柳 同好会	8日(火) 13時30分締切 坂・笑う・折菊み・の・お	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール蛭池 蛭池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
川柳塔 さかい	8日(火) 投句句会 うっかり・長い・手紙 折句:い・と・う	〒599-8122 堺市東区丈六77-4 斎藤さくら
川柳 あまがさき	8日(火) 14時締切 集める・靴・きつと・自由吟	尼崎市女性センター・トレビエ 2階 阪急武庫之荘駅南へ5分 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
あかつき 川柳会	11日(金) 14時締切 行列・きびきび・敵・時事吟	大阪保育運動センター (新谷町第1ビル2F) メトロ「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒543-0013 大阪市天王寺区3-6 木村ビル2階 あかつき川柳会
川柳大阪	12日(土) 14時開場 くすり・地震・眠る	投句先:〒534-0021 大阪市都島区都島本通り4-11-6 山崎珠生
六甲 川柳会	12日(土) 14時締切 毎日・そのまま・立つ・自由吟	六甲道勤労市民センター 5階 E室 JR「六甲道」駅南隣 メイン6甲内 〒657-0011 神戸市灘区鶴甲4-11-11 上田和宏
川柳塔 打吹	12日(土) 13時30分締切 鳥・眠る・とほとと 席題	倉吉市上灘町9 上灘コミュニティセンター 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局
八尾市民 川柳会	13日(日) 14時締切 他人・ほっこり・祈り・雑詠	八尾市安中町3-5-1 洪川・安中集会所 JR「八尾」駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之

冬心ゆづり

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようお願いします。
編集部

和歌山三幸川柳会

西川 千鶴報

逆風が負けじ魂呼び起こす

取り敢えずこれ飲んでけと医者が出る

風唸る夜は独り居の母思う

和解した帰りは風がやわらかい

転んでも夢追いかける向こう脛

全身の筋肉緩む里の風

うつさない大和心の素晴らしさ

いい夢を見たぞ未来に羽撃こう

たそがれの坂で聞いている風の音

外連味のない芸風が座を沸かす

エコロジー自負して凜と立つ風車

夢を盛る両手はいつも温かい

風下で拾うまさかの残り福

粹なコメント苦勞話で笑わせる

敏照

昇

俣子

菜摘

幹子

宏枝

一雄

准一

昭枝

碧

純子

富香

八重子

理恵

切手まで選び届けど彼の人へ

太平洋ひとりぼっちが夢である

じつくりと聞くと小言も役に立つ

朝の窓に風が季節を連れて来る

病院へ行く為体調整える

秋の風ノルマを終えて鉄洗う

正夢が今日の予定を狂わせる

ああ僕が光源氏になった夢

再起への夢は手すりの黒光り

パンの耳夢を語っていいですか

無風地帯わたくしの湿気が溜まる

三度の食事薬飲むため食べてます

置き薬期限切れでも飲んでる

追い風に天下無敵と有頂天

入院の特効薬は母の顔

百薬の長と名を変え飲み続け

句作りは老化予防の薬です

風読まず愚直に生きて明日は晴れ

美人の湯うちの風呂もと妻が言い

褪せぬ夢あつて余生が忙しい

ヒト科にもあつたらいいねジェネリック

和子

保州

起世子

まき

ひろ子

悦男

眞智子

義泰

あき子

明子

知香

和美

彦弘

康則

孝雄

宏美

弘子

満喜子

俊介

幸

千鶴

もて男恋の始末はお手のもの

冬日の前庭のかたづけ終わらない

遺産などなにもないので揉めません

後始末出来て笑顔の三才児

酒飲みは始末に悪い虎になる

思い出を楽しみながら後始末

始末書も一度書いたら慣れてくる

政治家の始末にプロの秘書がいる

身の始末まだまだですと先延ばし

始末終え後のワインの旨いこと

もて過ぎの恋の始末は逃げるだけ

錦秋を袋に詰めて庭じまい

底なしの始末の悪いデルタ株

火の始末だけは気遣う年の暮れ

身の廻りに山積みしては物さがし

認知テスト始末が悪いあがり性

ああ津軽雪の始末に明け暮れる

マンネリに始末をつける旅に出る

結局は正論が勝つ会議室

後始末できりゃおいらもひとり前

あと始末秘書に任せる永田町

木漏れ日は諫める気配かもしれないぬ

噴水は高さ定まるまで上がる

飛び出した釘は打たれて丸くなる

英子

澄子

規子

ふさゑ

慕情

真由美

柳子

隆樹

孝子

和香子

のぶよし

ひろ

風来坊

重虎

久美子

洋子

美鈴

初枝

霜石

則彦

ひとし

黙人

花峯

為

六ヶ所の風車の群れが威圧する
 蟬シャワー般若心経聞くように
 壮大なドラマ生み出すにこり酒
 次つぎと五体が病んでゆく焦り
 くさび打つ理屈一つが動かない

川柳打吹(鳥取) 齊尾くにこ報

ヤクルトが決めたが俺は飲んでない
 いざ決める白か黒かとグレーです
 奇跡など無いと信じて四股を踏む
 不用意に決めて広がる貧富の差
 借金をようやくゼロに祝い酒
 欲を捨てようやく薬になりました
 脱炭素ようやく尻に火が付いた
 ようやくと夫婦と思う五十年
 ようやくに生きているだけ皮ひとつ
 大國になったら核を持ちたがる
 正義派を気取る男の喋り過ぎ
 困ったものだ中国式の民主主義
 角まがる度記憶が去って困ります
 プレーキとアクセル踏みは紙一重
 窓ふきを明日明日とのばしてる
 大掃除出来たらしたい脳のごみ
 そろじする気だけ満々年の暮れ

一 呑 義明 吹喜 きよし 呑舟
 義人 紀子 節子 重利 清 岳人 陽之助 紀美恵 滋 芳光 余光 完司 美知江 照彦 悦子 龍枝 裕子

大掃除いんごりまんごり邪魔だよね 貴恵
 宇宙ゴミ掃除はほうき星まかせ 玲坊
 部屋よりは車の掃除忘れな 紀の治
 片付けのニガ手な家の生れです 富隆
 掃除機がゴミ屋敷にも置いてある 芳光
 鼻の穴真つ黒にして大掃除 三津子
 掃除せい掃除をせいと桜の葉 石花菜
 ジェンダーフリーひとつになったお手洗い くにこ

竹原川柳会(広島) 古田比呂子報

夕焼けが瀬戸内海に彩をつけ 節夫
 人生の彩り句碑ひとつ遺す 敬子
 金平糖彩り豊か星の砂 弘子
 休日になるとわたしの彩になる 昭紀
 人生の彩を重ねる深い道 栄香
 原因は加齢ですネとささり言い 白狐
 朝起きてさりとと出ましたあの一句 節生
 秋はさりととつべんに柿ひとつ 蘭幸
 不祥事をさりとと消した永田町 夢香
 曾孫にオモチャ売場が目止まり 初音
 老いたので今年最後と来た賀状 慶子
 孫達に言われりや止める酒たばこ 宣之
 チンブイ痛みが止まる不思議 和子
 止めるのはよそうカルガモのワルツ 笑子

山崎武彦選

トランクと雲を映して小津映画 重利
 春を待つようにあなたを待っている 小鹿
 許したらちがう世界が見えてくる ダン吉
 明日が見たくて一番高い木に登る 美ツ千
 ライバルはまあまあ勝てる奴にする みちを
 点滴はゆつくりカーテンはブルー 瑠美子
 リモートで折りに参加する法事 正美
 今日は無事やれやれとブルトツ引く 和郎
 さまよっていますたつぷりある時間 ひとみ
 病院へ行く為体調整える ひろ子

佳句地十選

(2月号から)

倉益一瑤選

大切なこともシャボン玉になった 芳光
 一回のチャンス代打で打つヒット 史子
 私のおアシスわたしの潤れる日に枯れる 理恵
 残照よまだ励ましてくれますか 小雪
 ユーモアを足して許した処世術 瑠美子
 変化球かわす力を蓄える すみれ
 しつかりと未来見据えた子の着地 満作
 初恋は沸点知らぬまま終わる (池)純子
 たつぷりと有った時間が逃げてゆく 紀華
 月に住む前は地球に住んでたわ 弘一

好きなこと始める誰も止められぬ
八十三夢を観るのを止めました
輝 恵

悔しさが顔に出ていた持久走
歩 美

悩む事もないだる浮雲流れ雲
貞 子

しゃぼん玉空に遊んで夢うふふ
幸 子

手を繋ぐ君と山茶花咲く道で
史 子

じいちゃんのつくったおこめふわふわだ
史 子

ながればししゆつとおやまにかくれんぼ
小一 さや

六歳 ちか

城北川柳会(大阪) 近藤 正報

触れないでコロナ恐いし桃も傷
千恵子

金星をゲットの息子誉めてやり
榮 子

テレビ消す穏やかな時流れます
峰 子

よそ見してつかず離れず福の神
老い先へ和願愛顔を旨とする
俊 雄

真心は折り目正しい位置に置く
やすらぎの妻の傍ら一行詩
捷 二

ボケットの底で渦巻く子らの夢
デイスタンス死語になる目を心待ち
廣 子

ペキン五輪日本微妙なデイスタンス
いい出合い暦を見れば友引だ
弘委智

寿命には加算されないロスタイム
初日の出今年新たに一葉草
野 鶴

母コクリ猫も炬燵で大欠伸
叩きよい距離にいるから叩かれる
隆 一

酒飲めば愉快になつて踊る癖
今年こそ愉快にさせてくれ寅よ
繁 子

金持ちが転がり落ちてゆく愉快
空高し愁思を胸に一万歩
一 歩

九十六の魔女が六十九に化けた
共白髪老老介護呆けられず
堅 坊

几帳面疎まれつつも利用され
年齢はただの数字だカズ凄さ
楓 香

妖怪のリンチを浴びる蒼い星
消毒のし過ぎで両手ふやけてる
信 子

女神様全没救う天一句
スカンタコとは自然にできるデイスタンス
廣 光

わかやま吟社 小谷 小雪報

各盞の酒へゆるりと夜が深む
生涯の無駄な時間も糧にする
精 子

亡夫にもらった自由活かして飛び跳ねる
発酵を待ちくたびれるロスタイム
俣 子

各々が自分本位で纏まらず
ロスタイム積もる話もあるのです
紀 子

リフレッシュするためあるロスタイム
急がずに今日一日のロスタイム
佳 子

各々が個性を発揮ハーマニー
砂時計見ながら各位ご挨拶
和 宏

失恋に止まる時計のネジを巻く
各停の芒のどかにこんにちは
敦 巳

独り居は寂しさとあれど気楽です
独り居の気楽さセーブして生きる
八 茶

独り居は気楽だけれどおとしあな
老々介護欲しい息抜きロスタイム
節 子

プロボース受けたあの日がロスタイム
今日に暮明日は良い事あるだろう
富美子

矛先を自分に向けるロスタイム
各停でゆっくり歩む老いの旅
節 子

各々が自分勝手手の世に生きる
ロスタイム詰めた袋に穴がある
富美子

なるようになるさ心配しなくても

大輪

光ともズレが楽しい遠花火
なにはともあれスマホにかじりついている

宏章

こころ砕いて話そう命あるうちに
憲法を砕いて話すむつかしさ

理恵

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西

茶子報

冬抜けて優しい春の音がする

美ツ千

退院すナースの顔が良薬で
元氣だと言われて増々精を出す

洋一

北朝鮮砕かれたまま母と子と
砕かれゆく敗戦後の民主主義

こみつ

温泉で暖めなおす冷めた愛

茶子

おはようさん元氣一杯ランドセル
お復の兆しが進む試歩の杖

ひとみ

来年はきつと来るだろ福の神
お歳暮はきつとカニだと鍋用意

蕉子

雑音に耳を貸さずに突っ走る

ゆたか

ピンピンコロリ出来る生き様学びたい
元氣な日としんどい日との繰り返し

泰子

お静かに別れの曲が流れ出す
わだかまり流せずに居る水たまり

よしみ

温泉に浸かつて延ばす寿命かな

正昭

若者の元氣におこほれを貰う
歳よりも体内年齢四つ下

さくら

お静かに別れの曲が流れ出す
お静かに別れの曲が流れ出す

大子

春を待つ祭りの匂い笛の音

小鹿

老い二人元氣で過ごす子孝行
元氣ゲンキと自分にハッパかけている

久仁雄

水山のタイタニックは海の底
アメちゃんを最後まで舐め切れぬボク

昌紀

一本のドラマ完結まで歩く

楓花

大雪で笑い元氣な今日にする
大声で笑い元氣な今日にする

瑞美子

扶美代
いさお

実

神様はわんさの願い背負いきれず

白周

元氣な日としんどい日との繰り返し
生き甲斐が棄になつてます元氣

千鶴子

お静かに別れの曲が流れ出す
お静かに別れの曲が流れ出す

通江

耳鳴りに混じる深夜の風の音

弘子

元氣な日としんどい日との繰り返し
生き甲斐が棄になつてます元氣

久仁雄

お静かに別れの曲が流れ出す
お静かに別れの曲が流れ出す

弘子

蟹する音だけ響き会話なし

文道

元氣な日としんどい日との繰り返し
生き甲斐が棄になつてます元氣

久仁雄

お静かに別れの曲が流れ出す
お静かに別れの曲が流れ出す

あや子

温泉は地の底からのプレゼント

完司

元氣な日としんどい日との繰り返し
生き甲斐が棄になつてます元氣

久仁雄

お静かに別れの曲が流れ出す
お静かに別れの曲が流れ出す

あや子

ドラマなど無いけど今日も歎と鎌

盛桜

元氣な日としんどい日との繰り返し
生き甲斐が棄になつてます元氣

久仁雄

お静かに別れの曲が流れ出す
お静かに別れの曲が流れ出す

あや子

極楽へわんさとさばる蜘蛛の糸

すみれ

元氣な日としんどい日との繰り返し
生き甲斐が棄になつてます元氣

久仁雄

お静かに別れの曲が流れ出す
お静かに別れの曲が流れ出す

あや子

温泉に誰も見てない平泳ぎ

草文

元氣な日としんどい日との繰り返し
生き甲斐が棄になつてます元氣

久仁雄

お静かに別れの曲が流れ出す
お静かに別れの曲が流れ出す

あや子

庶民からわんさと税取り無駄使い

恒

元氣な日としんどい日との繰り返し
生き甲斐が棄になつてます元氣

久仁雄

お静かに別れの曲が流れ出す
お静かに別れの曲が流れ出す

あや子

わんさかと咲いた椿に値をつける

茜

元氣な日としんどい日との繰り返し
生き甲斐が棄になつてます元氣

久仁雄

お静かに別れの曲が流れ出す
お静かに別れの曲が流れ出す

あや子

サンリ座の女性癪癪持ちという

蟹郎

元氣な日としんどい日との繰り返し
生き甲斐が棄になつてます元氣

久仁雄

お静かに別れの曲が流れ出す
お静かに別れの曲が流れ出す

あや子

心地よいドラマに触れた年始め

一平

元氣な日としんどい日との繰り返し
生き甲斐が棄になつてます元氣

久仁雄

お静かに別れの曲が流れ出す
お静かに別れの曲が流れ出す

あや子

走り出すわんさと降った雨を蹴り

弘六

元氣な日としんどい日との繰り返し
生き甲斐が棄になつてます元氣

久仁雄

お静かに別れの曲が流れ出す
お静かに別れの曲が流れ出す

あや子

真子さんと圭さん出合いメロドラマ

瑞子

元氣な日としんどい日との繰り返し
生き甲斐が棄になつてます元氣

久仁雄

お静かに別れの曲が流れ出す
お静かに別れの曲が流れ出す

あや子

子の帰省包丁の音弾ませる

孝子

元氣な日としんどい日との繰り返し
生き甲斐が棄になつてます元氣

久仁雄

お静かに別れの曲が流れ出す
お静かに別れの曲が流れ出す

あや子

脇役も主役もこなす母となる

静恵

北朝鮮砕かれたまま母と子と
砕かれゆく敗戦後の民主主義

ダン吉

はびきの市民川柳会(大阪)藤原

大子報

南大阪川柳会

松岡

篤報

財源もないのに税の無駄遣い

克己

クリスマスわくわく土産のキーキ待つ

シマ子

女医さんで何でも聞けて診察日

ルイ子

新札と替えてわくわく刻を待つ

柳右子

リアル句会わくわくと待つ年男

敏治

科学者の能力アメリカで咲いた

一步

クラス会わくわくさせる何かある

篤

わくわくと人待つ時計進まない

楓楽

わくわくと刺激いっぱい趣味の会

国和

給付金どうせパソナが儲けます

勝弘

冷たい世暖かいのはカイロだけ

峰子

独りばちやさしくなろうなろうとす

ひさ乃

くじけずに生きよ自分に旗振って

志華子

自分史を辿り昭和に戻すネジ

亜成

川柳茶ばしら(愛知)

金子美千代報

旅行誌が届いた頃にまたコロナ

かつ子

酒が切れ名残り惜しいが中締め

三樹夫

千円でおつりわずかな月刊誌

まみ子

子が帰り二年振りなり進む酒

遡行

カモのよう一度買ったら来る雑誌

美千代

富柳会(大阪)

山野 寿之報

今日出来ることにやる気が弾みつ

惠

空腹にほんのり沁みる米の湯気

武人

ふる里納税故郷の米がやって来た

和子

ポツの句に納得出来ぬ憤り

高鷲

米粒がシャキッと立った寗飯

壽峰

亡き母を思い出させる握りめし

一文

突然の訃報無音の冬の海

あかり

白米を食べられましたお正月

清

蹴鞠のよう弾む一年期待大

由夏

色数が減って来ている一行詩

文重

一粒の米に農家の汗を知る

きみ子

コロナ禍がまさかこんな風に続くとは

正義

あやとりを皷の指から無垢の指

寿之

川柳塔まつえ吟社(鳥根)相見

柳歩報

切れ悪い嘘沢庵のひとつなぎ

とも子

一点のくもりも無いと言ったバク

青帆

嘘じゃないどころから見ても美しい

柳歩

聞かれたら幸せよって言っておく

吹喜

拉致犯を逃し慚愧の日本海

弘充

海原に向かい合ってる心地良さ

邦代

海岸で聞く流木の放浪記

桂子

スイーツを用意あの娘の操作術

瑞人

もののふを操る悪女の微笑み

芳山

リモコンであなたに繋ぐ導火線

美智子

もう一度誰かはらはらしませんか

みちを

コロナ禍ではらはら続き風を待つ

あきら

はらはらと悔し涙が意地を張る

豊仙

舞台裏はらはらさせたアキレスケン

雪代

はらはらの橋渡つてる運だめし

知恵子

ドキドキしはらはら見てたヒッチコック

モナカ

はらはらと見る満月の丸裸

徳利

川柳花の輪(大阪)

川本 信子報

紅白の巫女が天女のように舞う

亜成

高嶺の花モデルハウスに手も出せず

泰子

一からと出直したい気分です

笑子

白塗りに紅差しして隈取を入れる

正太郎

一輪の花が小さく突き刺さる

博泉

一才のほくの笑顔に皆笑顔

やすの

悔い祈る百合一本の交差点

信子

川柳さんだ(兵庫)

酒井 健二報

森友の暮切れ汚な過ぎまっせ

正和

赤木ファイルなおも逃げるや財務省

洋次郎

逃げ出さぬコロナに防御尽くすのみ

万彩

コロナ禍と言いつくできる家族葬

健二

認諾も付度の一つであろう

勝弘

一日があればあれよと逃げてゆく

裕康

あのエクボ男心を放さない

ほんわかと君はいつでもチャーミング

にっこりに買ってしまった不用品

淋しいね愛想笑いの上手な娘

汚れてもママは喜ぶユニフォーム

不都合は黒塗りにして謎のまま

近未来宇宙がゴミの捨て所

たつぷりと皮肉を混ぜる負け惜しみ

パンクシーの落書き以外お断り

廃業の店舗看板朽ちたまま

デザートに一輪添えた寒椿

ゴキブリが住みよい家や言うてます

デザートは琴ひく妻の指の舞

人生のデザートとなり孫の世話

和食には葛饅頭がよく似合う

次の世も夫婦漫才しましょうね

願うのは正味期限の無い平和

お百度を踏むより術を知らぬ母

浪人生去年の絵馬を掛け直す

妻も子も達者でいればそれでいい

手を合わせ願うものなし御礼のみ

些少でも嬉しいことは書き記す

病院の待合室は祈りの場

付けるだけブルーリボンと赤い羽根

おさむ

ひとみ

利子

武彦

良子

三ツ世

紀恵

直美

博

俊昭

修平

耕治

哲夫

俊朗

義徳

利尚

和郎

武彦

和宏

廣光

哲男

勝正

美津子

雅尚

温暖化ノーベル賞はピツタリだ

カムカムはわが青春の応援歌

ゴメンねと言えぱりセットされる過去

年とれば無欲になると思ってた

薬より効き目が速い孫の顔

きやらばく川柳会(鳥取)後藤

足し算がなく引き算の空財布

手を上げて言うべきだった会終わる

新聞も時に音読はけ防止

一年の痛んだところ手当する

車窓からみる景色には柿たわわ

人柄と声に魅せられ深夜便

親ガチャと言われてもいい好きにする

一年の重み背負って誕生日

我が家計補正予算を付けたいよ

藤井棋士コンピュータの先を読む

皿の絵も一緒に食べるふぐ刺身

わたくしを励ますドクタースマイル

もやもやを垢といっしょに流す風呂

喜びとストレスくれる五七五

三冠の指四冠の胸に触れ

アワダチ草咲き誇ってる売れぬ土地

ずっこけた何もないのにずっこけた

ひろし

正彦

優子

真桜子

稠民

玲子

宏之報

宏之

雨奇

久直

宣子

治代

恵子

俊久

多美子

美緒

博子

紀の治

菜々

瑞枝

美穂

千代

令位子

ひろし

ほたる川柳同好会(大阪)水野 黒兔報

千年の大樹を抱いて気を貰う

気遣いをしてくれるのは犬のモモ

移り気を逆手に生かすアイディアマン

気楽には頼めぬ時価というメニュー

大風呂敷広げて話す酔っぱらい

糸切れた風の漂う広い空

この広い世界に僕の職がない

若者に希望与える広い空

全島が公園みたい北海道

広い基地沖繩どこの国ですか

さてばかり言ってるうちに日が暮れる

もう一本呑むか止めるかさて財布

まだ若いやつと傘寿の声を聞く

川柳de遊ぼう会(大阪)小野 雅美報

湿布薬背に貼れる猫募集中

えんま堂わが人生を査定され

コロナ禍で二年の時が暮の中

のび悩み柱に刻む子の背丈

ばかに効く薬くださいお義母様

三十路過ぎ今年も泣いた薬指

正子

一弥

則彦

宏造

奈津子

堅坊

直子

黒兔

勝弘

契子

純子

守啓

春代

えみ子

てるひこ

康雄

はるみ

よしみ

えいじ

「チンブイブイ」母の薬は子を宥め
怖いのは訳の分らぬ逆うらみ
嘆き声ずっと聴いてた如来像
怖いのは死ぬことよりも生きること
物忘れ自覚するたび怖くなる
食卓を少し待たせる袖子の風呂
一瞬の風になりたい君のそば
待ち受けの母の笑顔が常備薬
幸せな時もあったな日記練る
タイムマシーン振ってやりたい恋がある
馬の背を歩く迷いを捨てながら
その間は見えず火の粉が舞い上がる
散り時を模索している白椿
隠し事見抜いてますと遺影の目

幸子

喜美子

幸徳

晋一

満知子

和男

恵子

めぐむ

敏郎

のり子

孝純

旅人

美智子

雅美

ブラザ川柳(大阪)

穂口 正子報

柏汁がじんわり解かすかじかむ手
初詣絆深まる三世代
除夜の鐘余韻を耳に第一歩
みな帰省温もり持って家路つく
わくわくと十年日記寿命まで
公言を憚る5度目の禁煙
今でもねわたし好きなの亭主をね
いの一かわしの流儀は手を洗う

正子

五月

政夫

景子

和代

弘光

靖子

園子

癒やされる我が家に笑顔でんこもり
借金をオミクロン乗せ船出する
おぎやあから我が儘すぎて落ちこぼれ
寅次郎のバカがみんなを喜ばす
アクリル板挟み笑顔の母がいる

悦夫

清乃

克三

淳司

一彌

蟹郎

勲章

楓花

壽峰

美ツ千

寿之

八千代

妙

金祥

一瑤

ゆき女

典子

梢

無限

茶子

頼太

慎吾

川柳ふうもん吟社(鳥取)山下 凱柳報

いっぼんのザイルを信じ切る谷間
産声はこんなにな強く愛おしい
上書きに酸素の量は十分か
上書きをするたび増えてゆく骸
嘘ついた箇所凹ませたまま保存
上書き保存三万回の深い皺
お手上げだ怒り上戸と泣き上戸
断捨離が苦手で部屋は古物商
こんなにやくのような人とは噛み合わせぬ
苦手なものにまな板が加わった
ハイヒール私の脚に懐かない
貧乏くさくなつた日本も私も
ラムネ瓶すかし初恋引き寄せる
泣きました優しい人に囲まれて
頂上に着いたら大空とハグだ
蟹ツアー鳥取駅は雪の中
穏やかな夕景宍道湖と私
上書きの一つ一つにある苦惱

拓治

ひとみ

小鹿

宏

久美子

宏章

回春子

つとむ

盛桜

かずお

哲男

まさと

みゆき

唯人

真理子

勇三

心咲

凱柳

千賀子

美恵子

洋次郎

利子

六甲川柳会(兵庫) 糞谷 和郎報

ジグザグを越えてようやく君の許
一万歩狙う八十路の心意気
明日には職があるのか冬銀河
天地人期待している顔ばかり

守る人狙う人あり椅子一つ
恭子

スター振り売れて天狗が落ちて行く
正彦

あかんでもってべん目指すカタツムリ
武彦

安全な道をジグザグ来た男
利恵子

喜べば喜び合える人と居る
和宏

百ねらう母に誘われ初日の出
次郎

成りゆきはどうかあれ今日を使い切る
和郎

電話中妻は横から口を出す
博

福耳が邪魔して金に苦勞する
道子

楽しそう孫らの遊び邪魔しない
崇史

五欲あつて真つ直ぐ生きる邪魔をする
廣光

ジグザグに闊歩している心電図
隆浩

新年会はよせな来るよ第六波
盛夫

ふところを狙うもみ手と甘言と
狸月

腑に落ちぬ妙に夫が上機嫌
哲男

邪魔者を間に葬る怖い国
正美

お義父さまルンバが邪魔といつてます
美津子

ブライドが邪魔をしている孤独感
光久

狙つたあの子どうしているのかな
勝弘

結末にやさしい答えひとつ置く
公輔

冬バラ一輪道ゆく人にほめられて
美穂

ホイホイと昼風呂へ行く大晦日
正和

七変化をこまでコロナ見せるのか
弘

セコハンの嫁のいいとこかみしめる
義明

目薬をメガネしたままさすなんて
聞か耳をコロナ素通り永田町
万年課長狙つてなれるものでない

川柳塔さかい(大阪) 内藤 憲彦報

客は皆素顔で眠る終電車
俶子

入れ替り年始客来る三ヶ日
八千代

客扱いしない友来て飲み明かす
久仁雄

一時間並びラーメン舌鼓
さくら

客足が減つて再起のデリバリ
志津子

五時からのスーパードで見ると同じ顔
和夫

論客も家では寡黙押し通す
時雄

年の初めまずは笑顔でお目出とう
万紗子

はにかんでする初めてのご挨拶
瑠美子

初志貫徹迷う自分に活を入れる
憲彦

書き初めの虎の一字が咆哮す
満作

昨日とは何だか違う初日の出
ゆみ子

初詣で行列できた恋みくじ
満知子

物事は初め肝心楽しもう
廣子

六十年添うてびつたりいかなんだ
世紀子

九号がびつたりだった去年まで
いさお

幸せなかびつたりになるしサイズ
佳子

夜遊びをびたりと止めて老けはった
玄也

ブランドにビタリ合わせるタイエット
みつ江

楨之
栄
祐一

びつたりに来る人なぜかおもろない
犬猿に見え実はびつたり夫婦仲
母親の昔のサイズ娘にビタリ
初めてのおんよ地球へ御挨拶
汗掻いて初めて見える夢がある
フレイルに負けず大声歌い初め
まず祖父が一箸入れるにらみ鯛
最初から白状すれば軽い罪
初めての顔で話を聞く介護

さよならと別れた方が楽かしら
参観日わざといちびるランドセル
早乙女の若さが香るラベンダー
歳月が私の過去を楽にする
最高の笑いだ今をラッピング
さまよえる我が子へ母の羅針盤
歳月の佻しく過ぎる拉致家族

初め
進
光雄

敏治
美津子
としお

舞夢
憲
朝子
みつこ

扶美代
朝子
みつこ

初音報
佐和子
雅子
柳明
和子
厚江
菊江

川柳あまがさき(兵庫) 大浦 初音報

八十五年生きて奇跡は起きなんだ
くらがりて枯葉の音にびくついた
海を見て暮す一日波の音
フルートの音は出せても曲吹けぬ
ライバルがいてこそ闘志わいて来る
痛宣告冗談にしてお医者さま

夫退院生きる幸せ沸いてくる

新雪で里の廃屋デコレート

極上の音は焼肉じゅうじゅうと

願掛けは落ちない城の絵馬にする

割り切れぬご祝儀してもすぐ別れ

にがい思ひすっぱりと断つ空の下

一丁目が遠くなつて核家族

一月三日おせち完食悲無し

除夜の鐘騒音ですよそんな時代

音もなく海を犯した温暖化

音無しの構えで迫るオミクロン

うっかりと冗談言えぬお医者さん

冗談に波瀾がひそむ御用心

生き方をあと一合の酒に訊く

新札がフル回転のお正月

油断するな電車病院オミクロン

クラウンに乗ればコロナに勝てるはず

ごちそうに黙食という新作法

お釈迦様ジョークで垂らす蜘蛛の糸 (俗) 修平

カエルコールをふつつ待つているスーパ 耕治

祝い酒羽織袴の千鳥足 哲男

もうちよつと布団に居たい寒の入り 純

ふつつつと煮詰めています君の愛 宏造

りこ

川柳藤井寺(大阪)

鈴木いさお報

英坊

隆一

千賀子

ゆきみ

初音

紀華

こみつ

雪菜

紀恵

新録

正彦

久仁雄

良種

勝弘

万彩

かずお

里帰りほろよい父と三姉妹

父似だと言われて好きになった父

俺に似ず酒もタバコも飲まぬ父

父に似て皆が好きなき草団子

言ひ勝つて悲しい父の丸い背

父の日に少し味わう失望感

軍服の父の写真は宝物

酒好きの父DNAに感謝する

職人肌で世渡り下手な父だった

石ころのひとつとなつて父還る

絵葉書にふと甦る父の声

父は戦死私は父の味知らず

職人の父は背中がよくしゃべる

遠くから父だとわかる咳払い

言ひ訳をしようとしなない父でした

ダービー馬の父もやっぱりダービー馬

喜代子

大子

勝弘

シマ子

俣子

まつお

シルク

一步

ひろ子

ダン吉

みつこ

かずお

久仁雄

瑠美子

扶美代

いさお

大山滝句座(鳥取)

新家 完司報

大山に登つてこころ軽くする

面倒と思えばこの世みんなそう

雪かきをしたのに雪が降っている

転び転んで大きな雪だるま

山だつて毎日顔を変えている

面倒が降つて来るからアワテナイ

お隣のカレーの匂いごちそうさん

早いがごつおロールキャベツは面倒だ

山の神怒らせぬよう春を待つ

東シナ海大きな山が横たわる

己から決して転ばないダルマ

耳たぶにICチップ埋められる

親御から貰つた才を使つたか

喫茶こだま雪山讃歌思い出す

お年玉子供に貰う歳になり

見舞い止める風邪を貰うと困るから

風流か白い悪魔と酒を酌む

下駄箱で埃まみれの登山靴

面倒な津波を嫌う深海魚

説明書が厚いうえに字が細い

ケータイの中に宇宙が詰まつてる

願わくばいつもプラスに転びたい

まさぞえにするな一人で死んでくれ

登り切り下りで転ぶ御用心

嫁が来てポツと明るい気がながれ

蝦夷地から薩摩まであるおらが富士

雄大

きこ

幸子

紀の治

楓花

八千代

芳光

照彦

くにこ

ゆたか

けいこ

由紀子

風露

余光

石花菜

小鹿

順子

富隆

清明

希楽良

久子

コスモス

規雄

貰つてもいいか拾つた五百円 完司

川柳ささやま(兵庫) 北澤 稠民報

支えてる筈の家に指図され 哲男

八十路過ぎふくらむ欲を抑えてる 稠民

飽きるほど新年が来る機嫌よく 善輔

ああしまった朝からこれで何回目 重男

座る場所無いはずなのにここですか 良子

カレンダー今年もメモし頼ります 美智子

新酒飲み鏡開きの力借る 哲夫

コロナ禍の難攻陥落福祈る すみえ

鬼は外福豆まいて鯛焼く 智恵子

針仕事一針ごとにほこりもち 凛繪

おめでたを祝う時には福使う 照代

倉吉川柳会(鳥取) 大羽 雄大報

脳味噌を切り替えすぎて認知症 照彦

もつともな顔で講じる和尚さん 石花菜

目を開きよーし今年は口閉じよ 萩江

饒舌に講じる割りにピンと来ぬ 龍枝

よーしよし曾孫あやして婆が寝る 紀美恵

貧富の差消して真白き銀世界 節子

若い君よーし掛け声まだ八十三 恭子

何事も切り替えるのは勇氣いる さちこ

苦心の句披講されたらうきうきと 風露

進む古い手段講ずる術もなし 智恵子

停電だ初めて知つた雪明り 日出子

切り替えは早いですがすぐに忘れます けいこ

よーし出た十万給付お福分け 佑子

免許返して妻に逆らわず 茂夫

もう一度こねて磨いて光らせる 麦青

行き詰まり気分切り替え寝てしまい 道春

思い出は親子で掘つたカマクラだ 隆昌

心にもない事講じ座がしらけ 由紀子

老化する五体講じる策がない 完司

嫁が来て古いしきたり切り替える 酔芙蓉

よーし笑わせて下さい川柳会 玲子

切り替える余力まだある金もある 雄大

岸和田川柳会(大阪) 石田ひろ子報

切り捨てるの枝生け花に生きている 理恵

寒の枝柿がポツンとしがみつки 昌代

負けん気の作り笑いが痛ましい 朝子

謝罪会見しても命は戻らない 保州

二十億買つたら当たると十億円 万彩

どんな手でやる気育てた塾講師 和美

アンタが言うか年寄りの身嗜み 眞澄

焼鮎に体一面塩化粧 義泰

正装し出かける場所が今はない 珠子

装つてみればまずまず年相応 はこべ

装うて菊の気品に負けている 扶美代

装つて見せても戦争は哀し みつ江

結果論いつもでつかい声を出す ダン吉

四島を今更返さぬとロシア 玄也

今更をいくつ悔めば気が済むの 世紀子

軽石が来る嘆いても大自然 三成

枝ぶりを愛でてハサミの手を休め 彦弘

生け花に柿の一枝欲しくなる カズ子

もの悲し枯れる枝葉のさんぽ道 ユリエ

枯れ枝がリースになつて華やかに ふさあ

民主主義トリックだらう多数決 いさお

鳩の出る帽子が欲しい平和主義 常男

幹見ずに枝葉ばかりに文句つけ 達彦

がむしゃらに生きた二十才の華の頃 蕉子

慣れましたマスクに合つた服選び しげ子

活断層今となつては引越せず 香代

今更に金儲けなど興味ない 康信

百万円今更議員何を言う 清

ワクチンと離婚はもはや何度でも まさひろ

亡くなつた夫の愛の深さ知る 節子

白寿まで連理の枝でいく夫婦 優

ばつさりと枝切り梅の花咲かす 一歩

日本沈没トリックならばいいけれど
今更の話で弾む三次会
装うて母いそいそとケアハウス

長 柳 会(大阪) 大浦 福子報

生かされている喜び胸にまた一步
ウィルスの記事の消える日待ち望む
病床で第九歓喜の歌を聞く
老春で色とりどりの花が咲く
嫌なことサラリとかわす老いの知恵
あたり前をあたり前に出来る幸
人生のスタートライン呱呱の声
日々の労さらりと流す仕舞風呂
角砂糖口に入れると砂時計
泣き虫もお客に乗せた縄電車
スタートは良妻賢母だった筈
たまに来てサラリと消える論吉さん
シワやシミ七難隠すマスク顔
新聞よりネットニュースを見る時代
一分でパンダ楽しむ動物園
特効薬ひび割れしたらまず「ごめん」
銀世界初日を拝む山ガール
百八ツ煩惱消して寅吼える
後期高齢不安を抱いて第一歩

敏 治 航太郎 ひろ子 福子 幸子 隆明 由子 ヒロ 孝代 由夏 洋二 正博 淳司 和子 光弘 純風 正美 おくみ 直樹 規之 靖博 隆彦

冬枯れのベンチの隅に蟬鼓
おべんちやら真面に受けて付け上がる
老後設計しつかりしてた筈なのに
賽銭の五円で祈る億のくじ
永遠にノーマア広島キノコ雲

豊中もくせい川柳会(大阪)初代 正彦報

背中押す応援の手があなたたい
生命線ほどほどで良いのに長い
娘一家一週間居た熱が出た
米寿ですか言われてジャンと腰伸びる
これが恋景色がみんなばら色だ
文鎮のような亭主がまた昼寝
キャンパスに私を変える人がいた
此岸より彼岸に友が多くなり
七変化コロナしぶとさピカ一だ
試される日本大雪オミクロン
通販の怖さを知って日が暮れる
シナリオをまた変えさせるオミクロン
余生はいい趣味とお酒とそして友
輝いた頃もあったね写真帳
収束感引き摺り下ろす第六波
散歩道逆に歩いてリフレッシュ

澄子 たけし 和代 登美子 孝 晴子 時子 多美子 武彦 真理子 英三 玲子 健二 義明 憲央 公輔 ヨシエ 敏昭 肇 玲子

ほどほどに酔うというのは難しい
湯豆腐と熱燗の湯気春非ず
鍋焼きにポトリ至福の生卵
師の助言自分を変えるヒント得る
小春日に誘われ老いを脱ぎ捨てる
角曲がり影はあなたと重なった
自粛してほーっと過す癖がつき
勇氣ある女性こそ世を変えられる
その通りほんによろしい腹八分
憲法を変える守るの剣ヶ峰
手助けは出来ず一緒に泣いてやる
友来る鬱ぐ気分がぱっと晴れ
恥ずかしい国だ平気で嘘をつく
少少のお酒とつまみ今日締める
読み終えて生き方変える歎異抄
新春の箱根筋す応援歌
真冬でも温い便座の心地よさ
ほどほどの夢を咲かせる母子草

川柳ねやがわ(大阪) 籠島 恵子報

赤ちようちん灯りやなじみの顔が寄る
留守電にそつと弁解置いておく
恋人は父によく似たお人好し

篤 弘委智 武人 満作 初正彦 見清 忠子 則彦 美津子 一步 洋志 英旺 眞澄 ひとみ 野鶴 正彦 勝弘 黒兔 寿子 郁夫 朝子

子や孫に会う日頬紅うすく塗る
 握手してハグした友の名を忘れ
 席につき注文なしで出るお酒
 郷愁のえくぼ一つも顔なじみ
 盃を交わせばみんな顔なじみ
 良き時代顔パス効いた映画館
 あだ名しか知らぬ飲み屋の顔なじみ
 顔なじみだけど名前が出てこない
 隣の犬が僕にしつぱを振ってくる
 言い訳を聞いて思わず妻ニヤリ
 無用だと言わず少しは聞いてえな
 情けない弁解するなもう呑むな
 それ以上言うな俺の方が辛い
 弁解をすれば哲学瘦せていく
 弁解などするかと惚けて生きてやる
 弁解のうまい人には負けておく
 弁解はせぬきつぱりと丸坊主
 捏造の証拠を閉じるシュレッダー
 哲学書三行読んで目を閉じる
 合掌で今年を閉じる家族鍋
 明日の夢捨てぬ恋人離さない
 財産のある恋人を募集
 恋人と一緒に今空気が

賢子 武人 千鶴子 麗 祥昭 高鷲 かずお 壽峰 弘一 一文 銀杏 武彦 千賀 常男 鈍甲 さち子 博 堅坊 高志 欣之 博泉 和織 勝弘

恋人が出来たスリムになってきた
 恋人とレモンで惚ぶ薫風師
 茅の輪くぐる草履革靴スニーカー
 初詣去年の倍の願ひ事
 大根や牛蒡に朝に顔を見せ
 銭湯の更地皇帝ダリア咲く
 良い事もいくつかあつて年暮れる
 秒針が二度と戻らぬ音刻む
 型振りはかまっておれぬ残余距離

西宮北口川柳会(兵庫) 緒方美津子報

寿之 かずみ 弘委智 信子 ルイ子 あかり 弘子 亜成 仁 洋次郎 ひとみ 昭九朗 ゆきみ みよし 緑 水筆 堅坊 良種 邦男 勝弘 靖夫

ひと時の不倫を論す古日記
 全身を耳にして聞く「愛してる」
 粘ったが負けたトラにも大拍手
 シンブルに生きていきますこの先は
 良い年は有馬記念を当ててから
 女房の寝言はいつも喧嘩腰
 耳奥にグッバイシーン残ってる
 ペン牝肌が粘り自分史書き上がる
 讚え合うふたりよく攻めよく守り
 これという賞罰なしで咲いている
 孫とする内緒話は心地よい
 関西は一人一人が漫才師
 自肅中耳学問という宝
 散髪でもややも気分消えて行く
 妥協するたびに自分の色が消え
 上手に嘘が言えこわくなる自分
 方言で言えば聞こえる爺の耳
 自由なる大きな屋根は青い空

川柳塔なら

大久保眞澄報

紀華 敦子 隆一 盛夫 敏子 俊雄 廣光 正 野薫 恭子 富次 野鶴 宏造 和宏 美津子 千代 淳子 昭

謹んで受けておこうかプロポーズ
 正座して急に真顔になる頼み
 初詣無神論者が手を合わせる
 神妙に祝うコロナ下でのお産
 神妙に聞くドクターのご託宣
 神妙に弾くと勝てぬパチンコ屋
 神妙な顔で閻魔の裁き待つ
 神妙な顔で数独母卒寿
 回峰行終えた師僧の法話聴く
 神妙に誓った君を忘れない
 神妙な顔も嘘だと見抜く母
 ドナーカード奇特な愛に恵まれる
 きらめいていたいだろうに一円貨
 磨くほど輝きの出るほんまもん
 年なりのキラキラさせてくれる趣味
 キラキラと輝いている第二幕
 キラキラと希望を詰めたランドセル
 ジャズコンサート老いの胸にも春の風
 逆上がり出来たと話す子の瞳
 スマホ止め輝く星を見てごらん
 ときめいていようキラキラしていよう
 (平)美智子
 煌めきと放つ聡太も翔平も
 全身が発行体になる結弦

風鈴 人を受そうははじめは私自身から
 亜成 呱呱の声から人間の始発駅
 行久 始まりはあつて終りのない老化
 羅天 雪解けの始まる土のにぎやかに
 かずお 一本の電話から始まった詐欺
 則彦 産声で始まる冥土への旅路
 優 始まりはいつも未知数夢溢れ
 純子 マニユアルを捨てて私が躍り出る
 水筆 世界和平始まる予感コロナ後に
 理恵 富子
 武人 和太
 成子 黒兎
 保州 瑠美子
 和郎 忍
 大子 加代
 定生 りゅうこ
 きみ子 心平太
 美美子 立信子
 美智子 紅絵
 順啓 正
 みほ子 北朗

あかつき川柳会(大阪) 磯島福貴子報

創始者に次は頼むと握手され
 なんと軽いだけでも重い曾孫抱く
 君を見るたびバブプロフの犬になる
 ときめいて前後左右が判らない
 ときめいて待つコロナ禍の終息後
 流木のハンゲル文字に拉致思う
 他人は他人流れに乗らずマイペース
 二次会の流れに躊躇するマスク
 濁流が攫っていったスニーカー
 心の傷時の流れに身を任す
 今はゴミ桃が流れたのは昔
 九十七歳の年が始まる頑張ろう
 マイナンバー札束積んでも売りません
 地位協定コロナ禍にまで影響し
 隠敵を最後は金で押え込む
 共闘は失敗したとわめき立て
 侵略と言えず敵基地攻撃論
 新カレンターまず医者行きの印する
 議席数量より質の総選挙
 核のこと拡散防止と軽い口
 筋通す時は流れにも逆らう
 核廃絶流れにそむく傘の下
 悪戦苦闘靴底に見る物語

柳界展望

★「第40回没句川柳供養(誌上)大会」参加者193名。同人成績。

天位 田賀八千代

あせつたら私の色が消えていく

天位 中村 金祥

飾らずに昨日のままで嫁に來い

天位 福西 茶子

胸中に弥陀と悪魔を飼っている

天位 上田ひとみ

産声はこんなに強く愛おしい

天位 岸本 宏章

上書き保存三万回の深い皺

天位 北野 哲男

ハイヒール私の足に懐かない

天位 永見 心咲

おだやかな夕景六道湖と私

洋々賞 田賀八千代

★「愛媛県令和三年度県民総合文化祭・川柳誌上大会」参加者249名。

天位 古手川 光

石ぼんと投げて波紋を見てやろう

天位 新家 完司

転んでも握ったスマホ離さない

★第44回川柳ねやがわ誌上大会同人成績

秀句 柿花和夫

悩んでも夜は明日を連れて来る

秀句 木本朱夏

断捨離の書架に残した『方丈記』

秀句 藤田武人

自叙伝の1ページだけピンクです

秀句 永見心咲

栄誉賞辞退オオタニの宇宙

▽各地動向△

○本社句会令和三年度の年間賞は三田市の上田ひとみさんに決定。

○高瀬霜石さん(理事・弘前市)がパーソナリティーを務めるFM放送局「FMアップルウエーブ・霜石のやじうま川柳」は、2月16日をもって22年間5555回を迎えた。

○「大山滝句座・令和3年度・年度賞」3名。

竹村紀の治

日の丸の赤いところに僕もいる

田賀八千代

ふる里の森は光ついで欲しい

新家 完司

自画像を描けば錆びた五寸釘

▽新誌友紹介△

尼崎市 藤井 歌子

紹介者 藤井 宏造

東大阪市 青木 隆一 大阪市 田原 康雄

三田市 江島谷勝弘 紹介者 平井美智子

三田市 安川 充 大阪市 白谷よしみ

三田市 堀 正和 紹介者 平井美智子

三田市 吉永 篤 尼崎市 淡井恵美子

三田市 小島 蘭幸 紹介者 平井美智子

おりひめ☆ひこぼし川柳会 第2回誌上大会のご案内

課題と選者(各題2句)

☆「天」 ☆ 森中恵美子 選

☆「踏切」 ☆ 江畑 哲男 選

☆「誓い」 ☆ 真島久美子 選

☆「心待ち」 ☆ 高瀬 霜石 選

☆「たまご」 ☆ 西出 楓楽 選

☆「一緒に」 ☆ 小島 蘭幸 選

☆「輝く星空を思い浮かべながら詠んで下さい」 ☆ 謝選 藤田 武人

投句締切 7月7日(木) 消印有効

投句要領 規定の用紙(コピー可)

参加費 1000円(切手不可・小為替等)

投句先 〒573-0095

大阪府枚方市翠香園町2-7

電話 072-395-5453 藤田 武人

☆お問い合わせは18時以降にお願いします。

編集後記

★梅よりも桃に魅かれる
少し老い 薫風

★令和4年幕開け早々、
新型コロナウイルス感染症は第6波に突入。多くの都府県でまん延防止等重点措置が実施されたが、昨年までの感染者の激減は何だったのか。和歌山・鳥取・島根では感染者ゼロの日も多くあったがあれは幻だったのか。予測されたこととはいえ私たちが心の紐が緩んでいたのか、ウイルスが悪魔的に進化しているのか、人類には手立てが残されていないのか、暗い日が続く。2月号に書いた「コヘレトの言葉」は「嘆くに時があり、踊るに時がある」と続くが「踊る時」は来るのだろうか。在宅編集に戻った机の前で、私は

面。「読者文芸欄」に短歌・俳句・川柳・エッセイ、郷土雑誌の紹介。「読者ひろば」欄には「私の一字」として習字、「モノクロギヤラリー」には読者の絵画。「熊本弁まっだし」というコーナーがユニークだ。「ハあー、かわいいか。似合うとるばーい。着付けから戻ってきた孫娘んこつですたい」という書き出しの熊本弁の投稿が掲載されており、読者とともに歩む熊本日日新聞社の姿勢が見える。「孫娘んこつですたい」の投稿には「係る」家族思いのよか娘さん。よか一日になりましたな」とのコメントが添えられて、投稿者と新聞社の絆があたたかい。全国紙にはない強みだろう。「係かる」はたぶん「係から」だと思いが、「熊本弁まっだし」の「まっだし」とは？

★熊本日新聞を手にする機会があった。全28
★熊本の多い地に住む友人から自家製野菜が届いた。

ひとこと

知らぬが仏オミクロン

◆コロナに関心を持つようになったのは、R2年2月のことである。近隣の句会から、公民館が使えなくなったという情報に始まる。◆その当時のテレビで既に第6波までを予測されていた。前例のない新型コロナウイルスになぜ詳しい方が居るのだろうか。◆その後、変異株デルタの登場。そのコロナが収束に向かいかけたかに見えた矢先、耳慣れない変異株オミクロンの報道である。◆検索して驚いたのは、

オミクロンまでに、既に12種類の変異株が存在していたということである。◆考えてみると、デルタ以外の変異株を悩まされずに済んだ日本人は恵まれていたのだと気づいた。自国オンリーではなく、地球規模の終息を考えなければ、コロナは収まらないことを教えてくれた「オミクロン」であった。

◆収束の日を願われた木本朱夏さんの句をお借りする。

コロナ終息ドアを開けば新世界
(澤井敏治)

た。中からひよつこりと落の臺。暖かい木の国に住む私には久しく目にすることのない落の臺。コロナ禍にあつて背中をまゐめて過ごしていたが、「ああ春はそこまで来ているのだ」と心が和んだ。そこで一句「地方紙にくるまれてきた春の使者」

(朱夏)

○マンションの1階に住む私達も十分老人だが、2階には恐らく八十年代の半の老人が一人暮らししたあけく、店を閉めた。

私のパーマはどうなる？
○川柳の先輩の方々も、ご自身の体調や、家族の介護で外出が難しくなつた方が増えている。七十年代の私に向けた「あなたは若い」が妙に説得力を持つてしまう。振り向けば後に「もつと若い」人がいない。ああ高齢化！

○かくして「若い」七十年代が湿布を貼つてジタバタしているのです。

(眞澄)

作品募集

5月号発表 (3月15日締切)

川柳塔 (8句)	小島蘭 幸選
水煙抄 (8句)	川上大輪 選
愛染帖 (2句)	新家完司 選
檸檬抄「ユニーク」 (2句)	乗原道夫 共選
久保田千代	
インスレクションナビ (2句)	大西泰世 選
一路集 (2句)	「とにかく」 工藤千代子 選
「重い」	山東日出男 選
「庭」 (3句)	西出楓 選
初歩教室「庭」	は6月号発表 楽担当

6月号

檸檬抄「鈍い」
一路集「刻む」「とことん」
初歩教室「強情」

お知らせ

本社3月句会は3月7日(月)開催予定でしたが、中止と決定しました。代わって誌上句会として開催致します。詳細は表紙裏をご覧ください。オミクロン株は感染力が強く、発症までの期間も短いようですが、三密を避け、マスク、手洗い、消毒、換気の基本を守り、ご安全にお過ごしください。

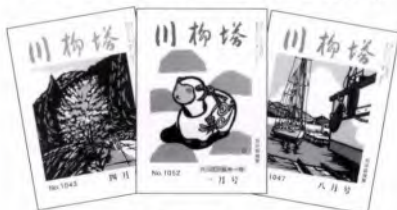
本社4月句会
4日(月) 午後1時から
兼題「買う」「語る」「エネルギー」
「つるつる」「記録」

川柳塔柳箋

3冊 送料共 1,000円
事務所あてお申し込み下さい。

川柳・俳句・エッセイ・小説
新聞・広告・ポスター・伝票等

あなたの思いをかたちにします。



美研アート

〒531-0061 大阪市北区長柄西1-1-10
TEL (06) 4800-3018
FAX (06) 4800-3028
Eメール bikenart@ea.mbn.or.jp
ホームページ <https://www.bikenart.com>

定価 八百円(送料100円)
半年分 五千円(送料共)
一年分 九千八百円(同)

二〇二三年(令和四年)三月一日発行

発行人 小島和幸
編集人 木本朱夏
印刷所 美研アート

〒543-0052
大阪市天王寺区大田一丁目一七
花野ビル201号室

発行所 川柳塔社
電話(06)六七七九一三四九番
振替〇〇九八〇一四二九八四七九番

川柳塔のホームページアドレス <https://senryutou.net>

箸がとまらない極うま塩昆布

「直火仕込み製法」により炊き上げた濃厚な旨さ

職人の技術で、超とろ火の火加減により、

秘伝の煮汁にじっくり溶けだした旨味を、昆布に染み込ませています。



お友達LINE
QRコード

舞昆のお友達に
なって下さい。

舞昆のこうはら

商品のお問い合わせはこちらまで（ご試食承ります）

フリーダイヤル 0120(11)5283

『歯を含むお口の中を一生守っていく場所』としての歯科医院

『痛くなく、怖くなく、通院が苦にならない』と思えるクリニックの実現



海岸通デンタルクリニック

KAIGANDORI DENTAL CLINIC

診療時間	月	火	水	木	金	土	日
9:00~13:00	○	○	○	—	○	9:00	—
14:30~20:00	○	○	○	—	○	17:00	—

🦷 診療科目 🦷

- ・歯科・歯科口腔外科・小児歯科
- ・予防歯科・審美歯科
- ・インプラント・ホワイトニング

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通2-2-3
HAT神戸メディカルモール3F(1F ケーズデンキ)

TEL.078-261-3300
www.hat-dental.com